三重県埋蔵文化財調査報告138

天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告

～一志郡嬉野町天花寺所在、天花寺城跡・小谷赤坂遺跡の調査～

1996・3

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県の中央部に位置します一志郡は、雲出川が形成した肥沃な土壌の影響で、古来より高い文化を形成してきました地域であります。この雲出川の支流である中村川の流域は、現在の嬉野町域にほぼ重なるわけでありますが、この地域は一志郡のなかでも特に重要な文化を刻み続けてまいりましたところであります。

嬉野町には、縄文時代後期を中心とした天白遺跡、筒野・向山・西山・錆山といった古墳時代前期の前方後方墳群、横穴式石室墳を中心とした膨大な数の群集墳、天花寺廃寺・一志廃寺・上野廃寺・嬉野廃寺・中谷廃寺といった白鳳時代を中心とした古代寺院群、あるいは辻垣内窯跡群から発掘されました完全なかたちの鴟尾など、全国的に見ても屈指の遺跡・遺物が集中している場所であります。三重県下の歴史を見るうえで重要というばかりでなく、全国的に見ても重要な地域といえるのではないでしょうか。

さて、今回の報告書は、県道改良事業に伴って緊急発掘調査を実施しました天花寺城跡・小谷赤坂遺跡を掲載しております。天花寺という地区は、先に掲げました筒野古墳や天花寺廃寺などが造られている場所でありまして、町内でも特に重要な地域といえる場所であります。今回の調査によってもそれは再認識されるものであります。ただ、このような貴重な遺跡が、記録保存というかたちでしか残せないのは残念というほかありません。また、調査が終わればそれでおしまいというものでもありません。調査の成果を三重県の財産としてどのように活用していくかが、今後の我々に課せられた重要な問題と考えております。

調査にあたっては、地元の方々をはじめ、嬉野町教育委員会、県土木部・久居土木事務所から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

1996年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　川　村　政　敬

例　　言

1　本書は、三重県一志郡嬉野町天花寺字赤坂地内に所在する遺跡群の発掘調査報告書である。今回の調査対象地区内には「天花寺城跡」と「小谷赤坂遺跡」が所在する。

2　調査は、一般地方道天花寺一志嬉野インター線緊急地方道路整備（A）改良事業に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。

3　調査は平成７年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
　　技師　伊藤裕偉　　主事　木野本和之

4　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、以下の者が補助した。遺構・遺物の写真は、伊藤・木野本が撮影した。執筆及び全体の編集は、伊藤裕偉が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口　愛、井田美奈子、楠　純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、冨楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、浜崎佳代、早川陽子、堀内博子、松本春美、松月浩子、森島公子、柳田敬子

5　調査にあたっては、嬉野町在住の各位、嬉野町教育委員会、および県土木部道路建設課・久居土木事務所から多大な協力を受けたことを明記する。

6　報告書作成にあたっては、伊勢野久好氏（一志町教育委員会）、久保勝正氏（三重県立上野商業高等学校）、新田剛氏（鈴鹿市教育委員会）、水谷芳春氏（桑名市教育委員会）、和気清章氏（嬉野町教育委員会）のご教示を得た。

7　挿図の方位は、全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏６°20′(昭和62年)、真北方位は西偏０°18′である。

8　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

9　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき…「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。
わん…「椀」「碗」「埦」があるが、「椀」を用いた。

10　当報告書での遺構は、通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けた。

ＳＤ……溝　　ＳＨ……竪穴住居　　ＳＫ……土坑　　ＳＸ……墓、古墳
ＳＺ……土塁、落ち込みなど　　pit……ピット、柱穴

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ⅰ　前　言 …… (1)
1　調査の契機 …… (1)
2　調査の経過 …… (1)
3　調査の方法 …… (2)
4　遺跡の名称について …… (2)

Ⅱ　位置と環境～問題の所在～ …… (5)
1　天花寺の位置 …… (5)
2　雲出川中流・中村川下流域の遺跡動向 …… (5)
3　中世の動向～文献史料を中心に～ …… (6)
4　天花寺丘陵周辺の状況 …… (7)
5　小結 …… (9)

Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～ …… (13)
1　調査区の地形と基本層位 …… (13)
2　検出した遺構 …… (13)
a　弥生時代の遺構 …… (13)
b　古墳時代の遺構 …… (22)
c　奈良時代の遺構 …… (32)
d　中～近世の遺構 …… (39)
e　時期不明の遺構 …… (45)

Ⅳ　調査の成果～出土遺物～ …… (49)
1　縄文時代の遺物 …… (49)
2　弥生時代の遺物 …… (49)
3　古墳時代の遺物 …… (52)
4　奈良時代の遺物 …… (52)
5　中～近世の遺物 …… (52)

Ⅴ　調査のまとめと検討 …… (59)
1　弥生時代の遺構と遺物について …… (59)
a　竪穴住居について …… (59)
b　弥生土器について …… (60)
2　古墳群について …… (60)
3　奈良時代の遺構と遺物について …… (61)
a　竪穴住居のカマドに関する問題点 …… (61)
b　出土遺物について …… (62)
c　集落立地について …… (62)
4　中～近世の天花寺丘陵について …… (63)

写真図版目次

ＰＬＡＴＥ表紙　調査区を西方上空から望む
ＰＬ．１　調査前後の風景
ＰＬ．２　調査風景・遺構（弥生時代１）
ＰＬ．３　遺構（弥生時代２）
ＰＬ．４　遺構（弥生時代３）
ＰＬ．５　遺構（弥生時代４）
ＰＬ．６　遺構（古墳時代１）
ＰＬ．７　遺構（古墳時代２）
ＰＬ．８　遺構（古墳時代３、その他）
ＰＬ．９　遺構（奈良時代１）
ＰＬ．10　遺構（奈良時代２）
ＰＬ．11　遺構（天花寺城跡関連）
ＰＬ．12　遺構（中世墓群１）
ＰＬ．13　遺構（中世墓群２）
ＰＬ．14　遺構（土塁・溝）・参考資料
ＰＬ．15　遺物１
ＰＬ．16　遺物２

挿図目次

fig．1　天花寺丘陵とその周辺の遺跡群……（３）
fig．2　天花寺丘陵東部地形図……（４）
fig．3　天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第１次）調査区平面図……（11～12）
fig．4　調査区土層断面図……（14）
fig．5　倒木痕ＳＺ27平面図……（15）
fig．6　土坑ＳＫ21平面・断面図……（15）
fig．7　竪穴住居ＳＨ11・19平面・断面図……（16）
fig．8　竪穴住居ＳＨ14・36平面・断面図……（17）
fig．9　竪穴住居ＳＨ22・40平面・断面図……（18）
fig.10　竪穴住居ＳＨ43平面・断面図……（20）
fig.11　竪穴住居ＳＨ45平面・断面図……（21）
fig.12　竪穴住居ＳＨ59平面・断面図……（22）
fig.13　竪穴住居ＳＨ63平面・断面・立面図……（23）
fig.14　古墳群関連遺構測量図……（25～26）
fig.15　１号墳平面図及び埋葬施設平面・立面図……（27）
fig.16　２号墳平面・断面図……（28）
fig.17　３号墳平面・断面図及び上層須恵器出土状況……（29）
fig.18　４・５号墳平面・断面図……（30）
fig.19　６号墳平面・断面図及び施設平面・断面図……（31）
fig.20　土壙墓ＳＸ64平面・断面図……（32）
fig.21　土器棺墓ＳＸ28平面・断面図……（32）
fig.22　竪穴住居ＳＨ30・33・34平面・断面図……（33）
fig.23　竪穴住居ＳＨ32平面・断面図……（35）
fig.24　竪穴住居ＳＨ35平面・断面図……（35）
fig.25　竪穴住居ＳＨ37平面・断面図……（36）
fig.26　中～近世遺構平面図……（37～38）
fig.27　溝ＳＤ23礫・五輪塔出土状況及びＳＤ２・23・41各部土層……（40）
fig.28　集石群１平面図……（42）
fig.29　集石群１関係土層図……（43）
fig.30　中世墓関係実測図……（44）
fig.31　集石群３平面図……（45）
fig.32　土塁ＳＺ１及び溝ＳＤ２土層断面図……（46）
fig.33　土坑ＳＫ50土層断面図……（46）
fig.34　出土遺物実測図(1)　石器類……（49）
fig.35　出土遺物実測図(2)　弥生土器１……（50）
fig.36　出土遺物実測図(3)　弥生土器２……（51）
fig.37　出土遺物実測図(4)　古墳群関連……（53）
fig.38　出土遺物実測図(5)　奈良時代……（54）
fig.39　出土遺物実測図(6)　中～近世……（55）
付図
天花寺丘陵東部測量図

表目次

tab．1　遺構一覧表　(1)……（47）
tab．2　遺構一覧表　(2)……（48）
tab．3　出土遺物観察表　(1)……（56）
tab．4　出土遺物観察表　(2)……（57）
tab．5　出土遺物観察表　(3)……（58）

Ⅰ　前　　言

1　調査の契機

嬉野町の中央部、島田から薬王寺地内にかけては近畿自動車道（伊勢道）が南北に走っている。この道は、近畿地方から伊勢方面への幹線道であるとともに、伊勢から近畿あるいは東海東部地方へと至るための動脈でもある。しかし、久居Ⅰ．Ｃから松阪Ⅰ．Ｃ間でもあるため、その利用には若干の不便が生じていた。そこで嬉野町・一志町が共同で、嬉野町島田地内に一志嬉野Ⅰ．Ｃを建設することになった。今回の発掘調査対象地は、嬉野町天花寺地内からこのⅠ．Ｃに至るアクセス道相当部分にあたる。

一方、このアクセス道が接続するのは県道松阪一志線なのであるが、この道についても嬉野町天花寺から一志地内にかけては大変細い道であり、生活のために自動車を欠くことのできない現代にあっては極めて不便であった。今回の調査契機となった県道改良事業と、天花寺丘陵東部を南北に縦断するこの県道改良は、直接的ではないが、有機的な関連を持っている。

以上の事業によって、天花寺丘陵東部は大規模な現状変更がなされることとなった。今回の調査は、事業名こそ違え、今後継続して行われる発掘調査の第１次として位置づけられるのである。

なお、これらの県道改良工事に伴って破壊を余儀なくされる遺跡は以下のとおりであり、今後継続的に調査がなされていくこととなる。

・天花寺丘陵南東裾部
　北瀬古遺跡（縄文～平安時代）
・天花寺丘陵部
　清水谷古墳群（古墳時代、基数不明）
　清水谷遺跡（旧石器～中世）
　天花寺城跡（中世）
　小谷赤坂遺跡（縄文～奈良時代）
　小谷古墳群（古墳時代、24基のうち６基）
　天花寺瓦窯跡（飛鳥～奈良時代）
・天花寺丘陵北裾部
　小谷Ｂ遺跡（中世）
　堀田遺跡（縄文～中世）

2　調査の経過

a　調査経過概要

今回調査の対象となったのは、このうち天花寺城跡と小谷赤坂遺跡である。また、堀田遺跡についても、今年度に一部調査を行っている。第Ⅱ章でも触れるが、天花寺城跡については、『嬉野町遺跡地図』（町教育委員会　1989）で「天花寺南砦跡」（町94、県4754）とされていた場所である。また、現在の天華寺を取り囲むように存在する、土塁を伴った区画部分についても、一応「天花寺城跡」に含めて考えておく。

調査は、広範囲かつ良好な遺跡が群在することから、今回の調査箇所が丘陵内のどのような場所に当たるのかを認識する必要がある。そのために、まずは調査前の地形測量を行った。しかし、調査時期が夏場で、草の繁茂も激しいことから、今年度に調査を行う部分のみを先行して測量し、冬場に丘陵全体の測量を行うこととした。

９月から実際の掘削作業に入ったのであるが、遺構面の浅いことが予想され、また、切株が多いことから、全て人力による掘削となった。特に、檜を中心とした立木の抜根作業には大変手を焼いた。それでも、掘削作業は極めて順調に進行し、11月の終わりには完掘した。最終的な調査面積は1,590㎡であった。

調査の間、大変暑い日や強風の寒い日もあった。特に期間内には降雨日がほとんどなく、疲労の溜まりやすい調査であったように感じる。それでも、作業員各位の暖かい御配慮と熱心な意欲に後押しされ、無事終了することができた。ここに御芳名を記し、心からの御礼を申し上げたい。

大倉みさ子、笠井安夫、倉田　保、小林嘉兵衛、坂本進一、里路あやの、杉山　奏、　鈴木秀征、関山恭子、田中ミツエ、中川小夜子、萩原幸子、長谷川ハルエ、畑五つ子、船木文雄、松浦ノブ子、松田きみ、山崎　衛、芳尾はるみ

b　調査日誌（抄）

８月24日　久居土木事務所と調査前の事前協議（杉

谷政樹・伊藤裕偉）

9月5日　調査前測量（～7日　杉谷・伊藤・木野本和之・日栄智子）

9月8日　道具搬入

9月11日　ベルト・コンベアー等搬入、掘削開始

9月12日　15ライン付近の掘削。奈良時代の遺物出土。

9月18日　ＳＨ10・11を確認。

9月19日　ＳＨ16から石鏃出土。

9月22日　ＳＨ11の貼床掘削。貯蔵穴周辺に小ピット溝状遺構検出。

9月25日　ＳＨ19の調査。

9月26日　ＳＤ23を確認。

10月5日　ＳＨ14の全体を検出。土塁ｃ上面に五輪塔を確認。

10月9日　土塁ｃ北斜面部の集石群１の調査。ＳＸ28の検出、掘削。

10月11日　ＳＸ29の検出、掘削。

10月13日　ＳＤ23の掘削。ＳＫ27から弥生中期土器。

10月17日　ＳＨ14の掘削、ほぼ完了。ＳＨ30・32の検出、掘削。

10月18日　集石群１の再精査。

10月19日　ＳＨ35を検出。

10月20日　玦状耳飾出土。

10月25日　ＳＸ29を取り囲む方形溝を検出。

10月26日　ＳＨ34の北半を終了。ＳＨ35ほぼ終了。ＳＤ23の土層図作成。

10月27日　ＳＸ39、ＳＨ40検出。

10月30日　ＳＤ41を検出。ＳＤ２との関連は不明。

11月2日　ＳＤ23とＳＤ41間にピット、門柱？ＳＨ43を検出。

11月6日　土塁とＳＤ２の測量（伊藤・木野本）

11月7日　集石群１下部の精査、墓壙不明。地上測量の説明会。

11月8日　強風の一日。ＳＨ43に高杯の良好なものあり。土塁ｂの除去。ＳＨ22を検出。

11月9日　ＳＸ47検出。

11月11日　現地説明会を開催。130名の参加を得た。

11月14日　地上測量入札、㈱イビソクが落札。

11月16日　土塁ｃの除去、ＳＤ61を確認。

11月17日　ＳＨ22終了。

11月21日　ＳＨ35の貼床下に土坑を確認。ＳＸ64を確認。ＳＨ63を検出。

11月22日　集石群３下のＳＸ66から火葬骨片多量に出土。

11月24日　ＳＨ63、検出終了。床面に土器が口縁部を下にして並べて出土。ＳＸ24の周溝埋土から須恵器壺の蓋が出土。

11月27日　ＳＨ59の掘削。全体の清掃。

11月29日　ベルト・コンベアーの撤収。本日で掘削作業は終了。

12月1日　遺構全体図の実測（伊藤・木野本）。ＳＨ63の遺物取り上げ。

12月4日　ＳＨ30・33の貼床除去。土坑を確認。

12月5日　地上測量に関する踏査（イビソク、伊藤・木野本）

12月11日　調査区内測量（伊藤・木野本・山田康博）

12月13日　道具の撤収。

ｃ　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
　平成７年７月20日付け道建第825号（県知事通知）

・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
　平成７年８月７日付け教文第1474号(県教育長通知)

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
　平成８年３月18日付け教文第18－18号（県教育長通知）

３　調査の方法

ａ　小地区設定について

今回の調査では、調査区内を４ｍ四方の升目で切ることによって小地区を設定した。西から数字、北からアルファベットを付け、升目の北西隅の交点をその小地区の符号とした。なお、この小地区設定は、国土座標軸とは無関係である。

ｂ　遺構図面について

調査区の平面図は1/20で作成している。また、竪穴住居などの出土遺物を伴うような遺構は、個別に1/10の実測図を作成したものもある。

また、天花寺丘陵東部全体の地形測量については、

委託により㈱イビソクが作成した。

4　遺跡の名称について

a　天花寺城跡について

天花寺城跡については、第Ⅱ章で触れるので、ここでは割愛する。

b　小谷赤坂遺跡について

この丘陵上には、嬉野町教育委員会による試掘がすでになされており、その結果、字小谷から字赤坂地内にかけて、主に弥生時代の遺跡が広がっていることが確認されている。また、字小谷地内には小谷A遺跡、小谷B遺跡とされているものが、すでにある。また、「赤坂」の名称は、久居市内にある弥生時代集落として「赤坂遺跡」があり、比較的近在しているため、混乱を招く恐れがある。そのため、「小谷赤坂遺跡」と呼称し、新発見の遺跡として認識する。具体的には、天花寺城跡造営以前の、弥生時代と奈良時代を中心とした集落跡と認識する。

fig.1　天花寺丘陵とその周辺の遺跡群（1：5,000）国土地理院　1／25,000『大仰』『松阪港』を使用

1．赤坂遺跡　2．片野遺跡　3．平生遺跡　4．鳥居本遺跡　5．堀田遺跡　6．片部遺跡　7．下之庄東方遺跡
8．天保遺跡　9．中尾垣内遺跡　10．辻垣内瓦窯跡群　11．中之庄遺跡
⚱⚱は前方後方墳・前方後円形墳墓　a．西山1号墳　b．筒野1号墳　c．錆山古墳　d．上野1号墓　e．向山古墳
⊡は古代寺院跡　f．高寺廃寺　g．八太廃寺　h．天花寺廃寺　i．中谷廃寺　j．一志廃寺　k．嬉野廃寺
l．上野廃寺
■は中世城館跡　A．川方城跡　B．木造城跡　C．八太城跡　D．小山城跡　E．天花寺城跡
F．須賀城跡および積善寺跡　G．釜生田城跡　H．八田城跡　I．森本城跡

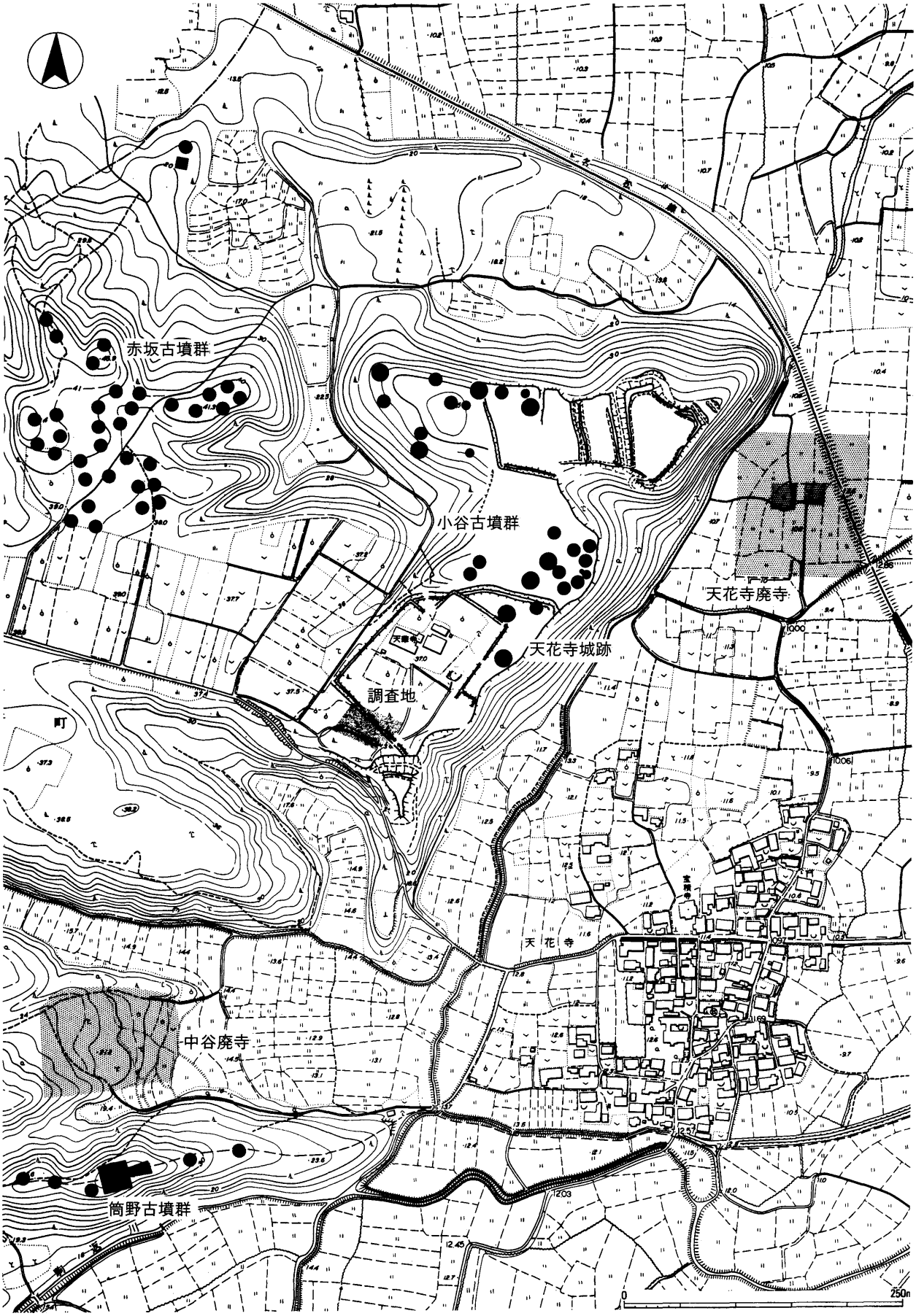


fig.2　天花寺丘陵東部地形図（１：5,000）※圃場整備前の地形図　天花寺廃寺・中谷廃寺は範囲を示していない。

Ⅱ　位置と環境　～問題の所在～

1　天花寺の位置

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡は、一志郡嬉野町天花寺字小谷・赤坂・清水谷に所在する遺跡群である。標高約37mの平坦な丘陵上に位置している。天花寺の集落は、この丘陵の東裾から少し離れた位置にあたる。「天花寺」という地名の元となった「天華寺」は、かつては今の集落内に所在していたというが、今ではこの丘陵上にある。この天華寺の南に接して今回の調査区がある。

今回調査を行った天花寺丘陵は、嬉野町と一志町の境目にあたる、通称「小鳥山」山塊から東方へ派生する低丘陵にあたる。一志郡各所の最奥部を水源とする雲出川と、その支流で嬉野町の最奥部から流れ出る中村川とが合流する地点に、突出するように派生している丘陵である。したがって、当地は中村川の下流域であるとともに、雲出川の中流域でもある。雲出川は、旧伊勢国（以下、特に断らない限り、「伊勢」と言う場合は旧伊勢国を指す）のほぼ中央部を流れる河川で、この川を遡れば、青山峠を経て旧伊賀国へと至る。

さて、一志郡は伊勢のなかでも極めて重要な遺跡が多数分布しているところでもある。当然、天花寺についてもこの環境下における検討を行う必要がある。次に、天花寺の位置する雲出川中流部および中村川流域における通史的な環境と、天花寺丘陵近隣の状況の２点を通観し、当地の歴史的な位置を見ていこうと思う。

2　雲出川中流・中村川下流域の遺跡動向

旧石器・縄文時代

旧石器時代では、中流域の中尾遺跡や天保遺跡、焼野遺跡などでナイフ形石器等が確認されている[1]。また、縄文時代かも知れないが、同じ天花寺丘陵にある清水谷遺跡で有舌尖頭器が確認されている[2]。以上のように、当該期の遺跡は現在あまり知られていないが、丘陵部の調査が進展すれば、今後かなりの増加が見込まれる。

縄文時代になると、各地に遺跡の展開が見られる。特に、中村川中流域には、早期・後期に相当する遺跡が密に展開する。しかし、このなかで、下流域の状況は今一つ判然としない。唯一、同じく天花寺丘陵に所在する馬ノ瀬遺跡から、早期の陥穴状遺構や大川式～神宮寺式にかけての押型文土器が出土している[3]に止まるが、今後の調査によっては遺跡の増加が想定される。

弥生時代

前期中葉には、嬉野町・下之庄東方遺跡[4]のほか、同町野田遺跡[5]、久居市赤坂遺跡、三雲町中之庄遺跡[6]など、雲出川中・下流域への遺跡の広がりが顕著となる。特に、下之庄東方遺跡は古墳時代前期にまで至る長期の集落跡と目され、この地域の拠点的な集落として認識されている。また、前期後葉からはじまる一志町鳥居本遺跡や同町片野遺跡などについても、この地域の拠点的な集落と見なしてよいであろう[7]。

このような拠点的な集落は丘陵寄りの段丘上に形成されるものが多い。一方、丘陵部に展開する馬ノ瀬遺跡や今回の調査で確認された小谷赤坂遺跡のような遺跡は、比較的短期で終息する傾向にある。このような状況は、この地域周辺に止まらず、松阪市周辺や鈴鹿市周辺をはじめ、三重県下各地に認められる現象である[8]。

古墳時代

前期初頭頃に築造されている墳墓が下流域に分布する。戸挟・女牛谷の墳墓群[9]のように、いわゆる台状墓の系譜に乗るものと、上野１号墓[10]のような盛土を主体とした墳墓がある。

これらの墳墓に後続するものとして、前期中～後葉には、中村川中・下流域に、最少４基の前方後方墳が築かれている[11]。支脈こそ異なるものの、同じ天花寺丘陵内には全長約40mの筒野１号墳がある。天花寺丘陵には、前期に相当する西野古墳群や、前期から中期前葉に相当する片野池古墳群などが形成される。

天花寺丘陵内には以後、馬ノ瀬古墳群・小谷古墳群・清水谷古墳群などの中～後期にかけての群集墳

が形成され続け、濃密な古墳分布を示している。今回の調査により、古墳の数はさらに増加することとなった。

後期には中村川中流域と雲出川中流域に、横穴式石室を主体とした群集墳が多数築造される。このうち、雲出川中流域の一志町から久居市にかけての一帯には、一志町井関で産出する「井関石」と通称される砂岩系堆積岩の石棺を用いた古墳が多数確認されている。伊勢においては、石棺は極めて地域的に限定されたあり方を示すもので、当時の石工集団の動向を知る上でも興味深い[12]。

このような、墳墓に関わる資料が充実しつつある中で、集落の資料の蓄積は遅れている。それは、特に古墳時代前期について顕著で、先述の下之庄東方遺跡に若干の事例が認められる程度である。一方で、当該時期の水利施設の検出が近年著しい。西山１号墳の麓に形成された片部遺跡[13]では大規模な灌漑施設が、天花寺丘陵の北麓にある堀田遺跡[14]では多量の木製遺物が出土しており、この地域に集中的に分布している前方後方墳の権力基盤との関連が大いに興味深い。

古代

10世紀前葉頃に成立した『倭名類聚抄』[15]によると、一（壱）志郡内には「八太・日置・島抜・民太・神戸・須可・小川・呉部・宕野・餘戸」の10郷が存在していた。このうち、天花寺周辺については諸説あるものの、小川ないしは須可郷内に相当していたものと見られる。

７世紀後半から８世紀にかけて、一志郡内には古代寺院が密集して建てられている。中村川中・下流域で５寺院、雲出川中流域の一志町側で２寺院が確認されている。また、場所の特定こそされていないものの、雲出川中・上流域の白山町川口には「川口の関跡」の存在が確かである。さらに、文献史料からは「一志駅家」の存在も知ることができる[16]。

古代寺院の分布については、天花寺周辺では特に顕著であり、天花寺廃寺・一志廃寺・中谷廃寺が極めて近距離に密集する。一志廃寺は均整のとれた川原寺系の瓦[17]を、天花寺廃寺は重弧文や藤原宮式の軒瓦を主体とした瓦の他に六角形塼仏[18]を、中谷廃寺は重圏文軒瓦を出土した[19]ことで知られる。これは、特に一志廃寺付近に「郡一」の地名が残っていることからも、この地域が古代律令制下における一志郡の中枢部であったことを物語っている。さらに、近年の調査で明らかになった中村川中流域にある辻垣内瓦窯跡群[20]からは、これらの寺院群のいずれかに供給される予定であったと推察される鴟尾２体が、ほぼ完全なかたちで出土していることも重要である。

当該時期の集落跡は、中村川流域に、いたって広範囲に展開している。そのうち、天花寺丘陵の北東の低地部にある堀田遺跡や、やや北方に離れる平生遺跡は、伊勢でも畿内色の強い暗文土師器が多数出土する遺跡[21]であり、寺院群との有機的な関連が想定できる。また、一志町・片野遺跡でも、奈良時代頃の倉庫跡が確認[22]されており、古代の一志郡を考察する上で重要な位置を占めている。

平安時代の当該地域は判然としない。中村川中流域で若干の集落跡が検出されているに止まる。しかし、斎宮群行退下のルートとして、前代以来の重要性は明らかである。

３　中世の動向～文献史料を中心に～

中世（平安時代末から戦国時代までとする）の動向は、文献史料から読みとれるものを加味して見ていこう。

中世前期の動向

平安時代の終わり頃から鎌倉時代に至ると、天花寺は荘園として成立している。『吾妻鏡』文治３年４月29日条[23]には、文治３(1187)年３月30日付けの公卿勅使駅家雑事にかかる勤仕庄・不勤仕庄の注進状が掲載されているが、その中の不勤仕庄として「天花寺」の名が見える。ここには「二位久気次郎」と割注があり、天花寺庄が彼の管理によるものであることが知れる。しかし、「久気」なる人物は定かではない。あるいは「久我」の可能性も考慮したい。

なお、同史料にはおなじく不勤仕庄として「曽祢庄（三雲町周辺）」、「小倭田庄・家城庄・川口（以上、白山町）、「新屋庄（嬉野町）」、「木造寮田（久居市）」などの、天花寺周辺の地名が見られる。当地周辺に、当時、広く荘園の成立していたことを知ることができる。

この時期の集落跡としては、ここで対象としてい

る地域全域に広がっていることが推察される。しかし、発掘調査によってある程度の実態が判明しているのは嬉野町平生遺跡[24]程度である。

中世後期の動向

南北朝期から戦国期にかけての当該地域には、北畠氏という大名権力との関わりが顕著である。しかし南北朝初期には、後述のように、足利幕府の影響も多分にあったものと考えられるが、明確でない。

南北朝中期以降、この地域は実質的に北畠氏の領域に入ったものと考えられるが、当初はその領域のなかでも最北部に位置するものと考えられる。文和元(1352)年には、中村川流域における北畠氏の軍事的な拠点と評価できる阿坂城を中心とした合戦が行われている。また、南北朝合一後の応永22(1415)年にも、雲出川から中村川流域にかけての地域で北畠氏と足利幕府とが合戦を行っている[25]。

このように、当該地域は主に南伊勢を領域支配する北畠氏と、北伊勢に配置された幕府側勢力との狭間に位置していたと評価でき、雲出川付近が、伊勢を南と北に２分する境界線の役割を果たしていたことが推察される。一志郡の最奥部、多気（現在の美杉村上・下多気）を本拠とする北畠氏にとって、中村川流域はその生命線ともいえる地域なのであり、彼等がどれほどこの地域を重視していたかは想像に難くない[26]。

これらの状況下で、この地域にも多くの城館が築造されている。天花寺城もそのひとつである。これらの城館は、北畠氏支配下の行政的中核として評価できるもの（木造城・森本城）、軍事的核と考えられるもの（阿坂城・波瀬城）、その他のもの、の３者に区分できよう。その他のものには、居館的なもののほか、各地に成立していた村落の惣的結合の結果生まれたものもあるようで、これらを取り込むことによって大名権力的支配の貫徹を目指したものと想定される。天花寺城については、後述の史料からも想定されるように、北畠氏直営の軍事的な城の可能性も高いのであるが、天花寺村落との関わりもあながち無視できない。

中世後期における遺跡は、やはり今回の検討対象地域に広く分布しているものと考えられる。しかし、実際に発掘調査で実態がおおよそ判明しているのは、嬉野町弥五郎垣内遺跡[27]程度である。

4　天花寺丘陵周辺の状況

以上、旧石器時代から中世に至る当該地域周辺の状況を見てきた。ここでは、少し細かく、天花寺丘陵界隈の状況を見ておこう[28]。

考古学的成果

先述のように、天花寺丘陵にはいくつか多数の遺跡が認められる。

旧石器～縄文時代　旧石器時代では、有舌尖頭器が清水谷遺跡で確認されている。縄文時代では、馬ノ瀬遺跡で早期の陥穴状遺構や押型文土器が確認されている。縄文後期では、清水谷遺跡で少量ではあるが土器が確認されている。

弥生時代　馬ノ瀬遺跡で中期後葉の竪穴住居跡が２棟確認されている。後期には、今回確認した小谷赤坂遺跡があるが、嬉野町教育委員会による試掘調査の結果[29]から、さらに北方にかけて遺跡の広がりが想定できる。後期末頃には西野遺跡内に方形台状墓も築造されている。

古墳時代　前期から後期にかけて、西野・片野・馬ノ瀬・清水谷・赤坂・小谷などの古墳群が累々と築造されている。特に、前中期の古墳群が円墳を主体として築造されている点が、前方後方墳群との関連で興味深い。後期には西野５号墳のように、金銅製の馬具を副葬するような古墳もある。

古代　丘陵下に成立する天花寺廃寺・中谷廃寺・堀田遺跡等との関連が注意される。西野遺跡からは、銅製の銙帯金具が出土しており、平安時代頃の墳墓が想定されている。

中世　場所は明確でないが、天花寺丘陵内から出土したと伝えられる蔵骨器があり、中世墓の存在が考えられる[30]。また、丘陵東裾の方から一字一石経の出土が伝えられるが、これは近世のものであろうか。

以上のように、天花寺丘陵内からは各時代様々な遺跡が確認されている。今回の調査成果も、これらとの関連を考えていく必要がある。

中世後期の天花寺

中世後期には、天花寺に絡む史料が少ないながらも存在する。ここでは、特に天花寺に関する史料を

中心に見ていこう。

（史料１）

伊勢国天花寺地頭職之事、任去六日御寄附状之旨、可被沙汰付天興寺雑掌之状、依仰執達如件、

康永四年四月十七日　武蔵守（花押）

仁木右馬権助殿[31]

康永四年は北朝年号で1345年に当たる。武蔵守は足利家執事の高師直で、宛先は当時の伊勢守護の仁木義長である。すなわち、足利尊氏が天興寺に寄付し天花寺の地頭職について、その雑掌に対しそれを確実に履行するよう、高師直を通じ伊勢守護・仁木義長に対して命じたものである。

この史料から、少なくとも南北朝期初期には天花寺の地が足利家領となっていたこと、そして当地周辺が、少なくとも南北朝期初期においては北朝方＝足利幕府の管轄下に置かれていたことが知れる。この時期に当地が足利家の所領となっていたことの経緯には、鎌倉幕府滅亡にかかる北条氏没官領であった可能性があろうが、断定はできない。また、同じく断定はできないものの、鎌倉時代頃から当地に地頭の設置されていた可能性も想定される。

以上のことから、天花寺の地がこの頃まで荘園制的環境下に置かれていたことが想定できよう。

なお、近世の書物である『勢陽五鈴遺響』の「天花寺村」の項[32]に、前掲史料と関連する記述が見える。ここには、足利尊氏が「小野庄（松阪市小野町か）」とともに「洛東霊芝山大興寺」に寄付したことが書かれており、以前には天華寺に足利尊氏の御教書と高師直の書状が残されていた、と記されている。江戸時代に作られたものとはいえ、前掲の史料と内容的にもよく一致しているため、当時に調査された事実が脚色なく記されていると見てよかろう。そうすると、今の天華寺にかつて尊氏・師直の書状が残されていた、という事実は、現天華寺が当時の「天（大）興寺」支配下にある天花寺庄管轄の中心であった可能性がある。ただし、天華寺の寺伝では後述する織田軍の伊勢攻略に伴って、現在の集落から今の位置に移動したとされており、場所の特定は今後の課題となる。

この後、永禄12(1569) 年に至るまで、当地域の状況を伝える史料はない。永禄12年における信頼できる史料は２つある。

（史料２）

面々天花寺城江被罷入致辛労之由被聞食候、御祝着候、弥心懸可被仕候由所也、恐々謹言、

閏五月一日　教兼（花押）

佐藤殿

（『佐藤文書』[33]）

（史料３）

去月廿日、信長人数八万余騎にて勢州へ入、大略落居にて本所ハヲカツツチノ城に御座、天源寺ノ城持云々、（後略）

（『多聞院日記』永禄12年９月７日条[34]）

史料２は北畠家奉行人教兼から現三雲町内に居住していたと考えられる土豪・佐藤氏に宛てられた奉書。年号は入っていないが、閏５月とあることや、教兼が北畠具教の奉行人であることから永禄12年と考えてよい。織田信長が南勢攻略を本格化するのが同年８月頃なので、その情報を入手した北畠氏側が天花寺城の防御を固めているものと考えられる。史料３からは、織田軍が南伊勢を大方攻略しているものの、本所（北畠具房か）のいる「ヲカツツチ（大河内）」と「天源寺城」が未だ落ちていないことを知ることができる。「天源寺」という地名が南伊勢には見られないことから、これが天花寺を指していることはまず間違いない。

この２つの史料から、天花寺城が北畠氏側の軍事的な城として活用されていたことを知ることができる。また、天花寺城が、織田軍の攻略にもよく耐えうるような堅固な城であったことも知れようか。

北畠氏の伊勢支配は南北朝中期頃からはじまると考えられるが、先述のように、彼等が拠点とした多気と伊勢平野部を結ぶルートとして、中村川流域は最重要視されていたものと考えられる。また、雲出川を挟んだ天花寺城の対岸には、一族の木造氏を配置した木造城がある。したがって、史料からは直接導き出せないものの、北畠氏による天花寺の支配も、彼等の伊勢入部初期から開始されたものと考えてよかろう[35]。

天花寺城跡について

ここで、天花寺城跡について少し触れておきたい。

天花寺城跡については、これまでは丘陵北端部に位置する部分を「天花寺城跡」、南端の堀切部分を「天花寺南砦跡」と呼称・把握されてきた。しかし、現地における観察の結果は、両者を一体のものとして捉え、天花寺丘陵東部全体を「天花寺城跡」と考えるのが適当であるという結論に至った。すなわち、南北約500m、東西約430mの範囲について、天花寺城跡として把握しておく。

ここで、天花寺城の構成について概観しておく（付図参照）。

天花寺城は、天花寺丘陵の東部全域を城域としている。城域の西は狭い開析谷である。また、城域の北側丘陵は東西に派生しており、城域は全体として「T」字状を呈している。丘陵の東端に２箇所の堀切、南端に１箇所の堀切と切岸が見られ、これに挟まれた間に、大きく５箇所ほどの曲輪が造作されている。南端部は、「天花寺南砦跡」とされていた部分にあたる。

曲輪１は、現状の天花寺城の中で、唯一全周する土塁を持つ曲輪である。ただし、土塁の規模は均一でなく、北～西面の土塁が曲輪内からの比高差約３mほどなのに対し、東～南面の土塁は比高差１mにも満たない程度のものである。曲輪の形状は三角形状を呈するもので、地形の制約が大きい。南に虎口が取り付く。この虎口の前面には低土塁が取り付く。ここから出る通路は、南側西部の土塁を沿うようにして西へ至り、さらに屈曲して曲輪１の南にある開析谷に至る。この通路と虎口前面の低土塁の形状から、虎口部は広義の外枡形を形成していると認識できそうである。

曲輪２は、曲輪１の西にある。東・西面のみが土塁と堀切で区画されている。長方形を呈した曲輪である。

曲輪３は、曲輪２の西にある。南側は、小規模ながら土塁と溝で区画する。西側は、南側の溝の延長かと考えられる溝で区画されている模様であるが、浅いものであり、少し弱い。

曲輪４は、曲輪３の南にある。曲輪３と５の区画溝（堀）とによって認識されるものであり、この曲輪自体の土塁はない。曲輪内には小谷古墳群のうち、12基がある。

曲輪５は、曲輪４の南にある。現在の天華寺がここに占地している。この曲輪の北側には、弧状を呈する低土塁と溝（堀）が見られる。この土塁と溝は、天華寺の周囲に見られる方形の区画（土塁と溝）によって破壊されており、西側では方形区画をなす土塁の下に潜り込んでいる状況が観察される。土塁の東端部は、小谷11号墳の墳丘を利用している。また、11号墳以外にも、２基の古墳が曲輪内に取り込まれている。

曲輪５の南は、幅約15m、平均の深さ約４mの堀切があり、さらに南には切岸が見られる。この、堀切と切岸との間も、堀切側に低いながらも土塁があることなど、人為的な造作が見出される。そのため、曲輪として扱うことも可能である。

このうち、北部に位置する「旧天花寺城跡」部分（曲輪１）については、おそらく戦国末期頃の造作ないしは改修によるものと考えられる。南部の「旧天花寺南砦跡」部分も、同様な時期の造作であろう。このように考えると、現天華寺が占地する曲輪５を、どのように解釈するかが問題となる。この点については第Ⅴ章で触れるが、何らかの重要な施設が存在していたことはまず間違いなかろう。

いずれにしても、この丘陵全体を天花寺城跡として把握しておくのが、「旧天花寺南砦跡」を有効に理解するために必要である。そして、このように考えることによって、前掲『多聞院日記』の記述も首肯されるべき事実として把握されよう。

天花寺城周辺の中世資料

天花寺城跡の南端部にある、現天花寺墓地には多数の五輪塔のほか、宝篋印塔や石地蔵がある。この付近にはこのような墓場の見られないことや、破損した五輪塔が少ないことから、この場所が永年にわたって地区の墓地として利用されていたものと考えられる。石造遺物も良好なものが多く、当該期の中世墓の好資料になるものと思われる。

このうち、参道脇にある高さ約34cm、幅約25cmの石地蔵には、地蔵に向かって右に「□□童子」、左に「永禄四辛酉十月十五日」の銘がある（PL.14参照）。この墓地に当初からあるものとすれば、年代の一端

を示すものとも考えられる。また、織田軍による攻撃直前に当たる時期でもあり、天花寺城跡内に形成された中世墓との関連が興味深い。

5　小結

以上、天花寺とその周辺の歴史的状況を観察してきた。当地では、遅くとも縄文早期から人間の活動が見られ、弥生時代には各所に小規模な集落が形成された。古墳時代に入ると、前方後方墳に代表されるように、伊勢地域内でも特に重要な地であった。古代では、全国的にも珍しい寺院の集中的分布が示すように、その存在意義はさらに高まったといえる。古代末から中世には荘園として成立し、遅くとも南北朝期には地頭の設置が確認された。室町～戦国期には北畠氏という大名権力による領有が認められ、城館としての機能があった。

このように、天花寺とその周辺域は、時代を越えて重要な場所であり続けたといえる。しかし、この地を正確に位置づけるためには、さらなる資料の充実が必要である。

このような環境下にある天花寺の地における今回の調査成果はどのようなものであったか、次章以降で見ていこう。

註

(1)　皇學館大学考古学研究会編『嬉野町の遺跡』(1989)
(2)　和気清章『三重県一志郡嬉野町埋蔵文化財調査概要』平成２年度（嬉野町教育委員会　1991）
(3)　伊勢野久好ほか『天花寺山』（一志町・嬉野町遺跡調査会　1991）
(4)　吉水康夫・鈴木克彦ほか『一級河川中村川埋蔵文化財調査概要』１・２（三重県教育委員会　1987・1988）
(5)　和気清章『野田遺跡発掘調査報告』（嬉野町教育委員会　1995）
(6)　谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1972）
(7)　伊勢野久好『片野遺跡発掘調査報告』（一志町教育委員会　1986）
(8)　鈴鹿市・居敷遺跡や松阪市・川原表Ｂ遺跡など｛西田尚史ほか『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』（松阪市教育委員会　1990）、伊藤裕偉『居敷遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1996）｝
(9)　野田修久・前川嘉宏ほか『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第３分冊１（三重県埋蔵文化財センター　1991）
(10)　野田修久・伊藤裕偉「三重県」（『定型化する古墳以前の墓制』第２分冊　第24回東海埋蔵文化財研究集会　1988）
(11)　伊勢野久好「三重県の前方後方墳（『古代』86　1988）などを参照
(12)　竹内英昭「一志の石工集団」（『研究紀要』第１号　三重県埋蔵文化財センター　1992）
(13)　和気清章ほか『片部遺跡発掘調査現地説明会資料』（嬉野町教育委員会　1995）
(14)　平成７年度三重県埋蔵文化財センター調査
(15)　京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』（1968　臨川書店）
(16)　寛喜３(1231)年10月８日付、公卿勅使驛家雑事文書目録（『鎌倉遺文』4230）から、これ以前にも駅家の存在は充分に推定できる。
(17)　山田猛「天花寺廃寺」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981）ほか
(18)　註(17)文献に同じ
(19)　註(1)文献に同じ
(20)　辻富美雄ほか『釜生田辻垣内瓦窯跡群発掘調査概報』（嬉野町教育委員会　1985）および竹内英昭『辻垣内瓦窯跡群』（嬉野町教育委員会　1988）
(21)　早川裕己「堀田遺跡」（『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1982）および吉村利男『平生遺跡発掘調査報告』（平生遺跡発掘調査団　1976）ほか
(22)　註(7)文献に同じ
(23)　『鎌倉遺文』224(24)　福田哲也・野口美幸『平生遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1994）および註(21)吉村文献
(25)　伊藤裕偉「北畠氏領域における阿坂城とその周辺」（『Miehistory』vol. 6　1993）
(26)　伊藤裕偉「中世後期木造の動向と構造～北畠氏領域における支城形態の一事例～」（『Miehistory』vol. 7　1994）および註(26)文献
(27)　註(2)文献に同じ
(28)　この部分は、特に示さない限り、註(3)文献の成果による
(29)　和気清章『町道小山・宮古線建設工事に伴う試掘調査報告』（嬉野町教育委員会　1990）
(30)　Ｈ・Ｔ「一志郡嬉野町天花寺丘陵出土の蔵骨器」（『三重県埋文調査情報』三重県埋文担当者会　1989）
(31)　東京古典会編『創立50周年紀念善本図録』(1960)
(32)　安岡親毅著・倉田正邦校訂『勢陽五鈴遺響』３（三重県郷土資料刊行会　1976）
(33)　石水博物館所蔵、当史料については、小林秀氏の御教示を得た。
(34)　辻善之助編『増補続史料大成』（角川書店　1967）
(35)　註(25)(26)文献に同じ

fig.3　天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第一次）
調査区平面図（1：160）
※単独数字はピット番号（グリッド毎）

Ⅲ　調査の成果　～層位と遺構～

1　調査区の地形と基本層位

調査区は標高約36mの丘陵上に位置している関係上、丘陵部に特徴的な層位を示している。

遺構検出面は明赤黄色系土で、部分的に礫を含む。この上部には黄灰色系土の堆積が10数cm認められ、数cmの表土に至る。黄灰色系土の堆積は、溝ＳＤ２および土塁ＳＺ１以北に顕著で、それ以南では部分的で薄い。この層を一部切り込む状態で弥生時代の竪穴住居等も掘削されているため、本来はこの層が調査区全体に存在していたものと考えられる。土塁と溝の北側に限定されるのは、おそらく、土塁とその溝の影響で、それを掘削する段階、あるいはその区画成立後に、その南部を削平しているためであろう。これは、土塁と溝ＳＤ２以南の遺構が極めて浅いことや、ＳＤ２の南にある土器棺墓ＳＸ28の検出状態が、土器棺の上半分が喪失していることからも首肯される。

また、調査区の東端部では、黒色系土（いわゆる黒ボク）の堆積が見られた。この層については、純粋な黒ボクではなく、上部に奈良時代頃の遺物を含むものであるため、当初は当該期の溝状遺構かと考えた（ＳＺ３）。しかし、明確な掘形は見られなかったため、今回の調査区東端部付近を境に、今後調査の及ぶ東側との層位的な違いと考えることができそうである。

調査区の地形は、fig.14でも判るように、北西から南東にかけてゆるやかに下降している。検出時の状態では、調査区の北西隅と南東隅で約１ｍほどの比高差が生じている。

2　検出した遺構

今回の調査による検出遺構は、大きくは弥生時代、古墳時代、奈良時代、室町・戦国時代～江戸時代（以下、「中～近世」）に分けられる。ここでは主立った遺構について記述をする。検出遺構の概略については遺構一覧表（tab.１～２）に示した。

a　弥生時代の遺構

弥生時代の遺構には、竪穴住居跡11棟のほか、土坑および倒木痕がある。弥生時代後期前～中葉を中心とし、一部中期前～中葉と後期後葉も含む。

倒木痕ＳＺ27（fig.５）　調査区東部中央付近で検出した。黒色系土を基本埋土とする。東部は奈良時代の竪穴住居ＳＨ32が重なる。遺構肩が揃わず、倒木痕と考えられる。しかし、埋土中からは中期前葉から中葉と考えられる土器が出土している。ちなみに、この時期の遺構はこの倒木痕のみである。

竪穴住居ＳＨ11（fig.７）　調査区北端部東寄りで検出した遺構である。長方形の平面形をなす。全体のほぼ半分、南側を検出し、北側は調査区外に残存している。建物の西隅が辛うじて検出でき、東西辺約4.9mであることが判るが、南北辺の規模は不明である。しかし、主柱穴は３カ所確認できたため、それを基準に南北方向の規模を復元すると、4.2mとなる。

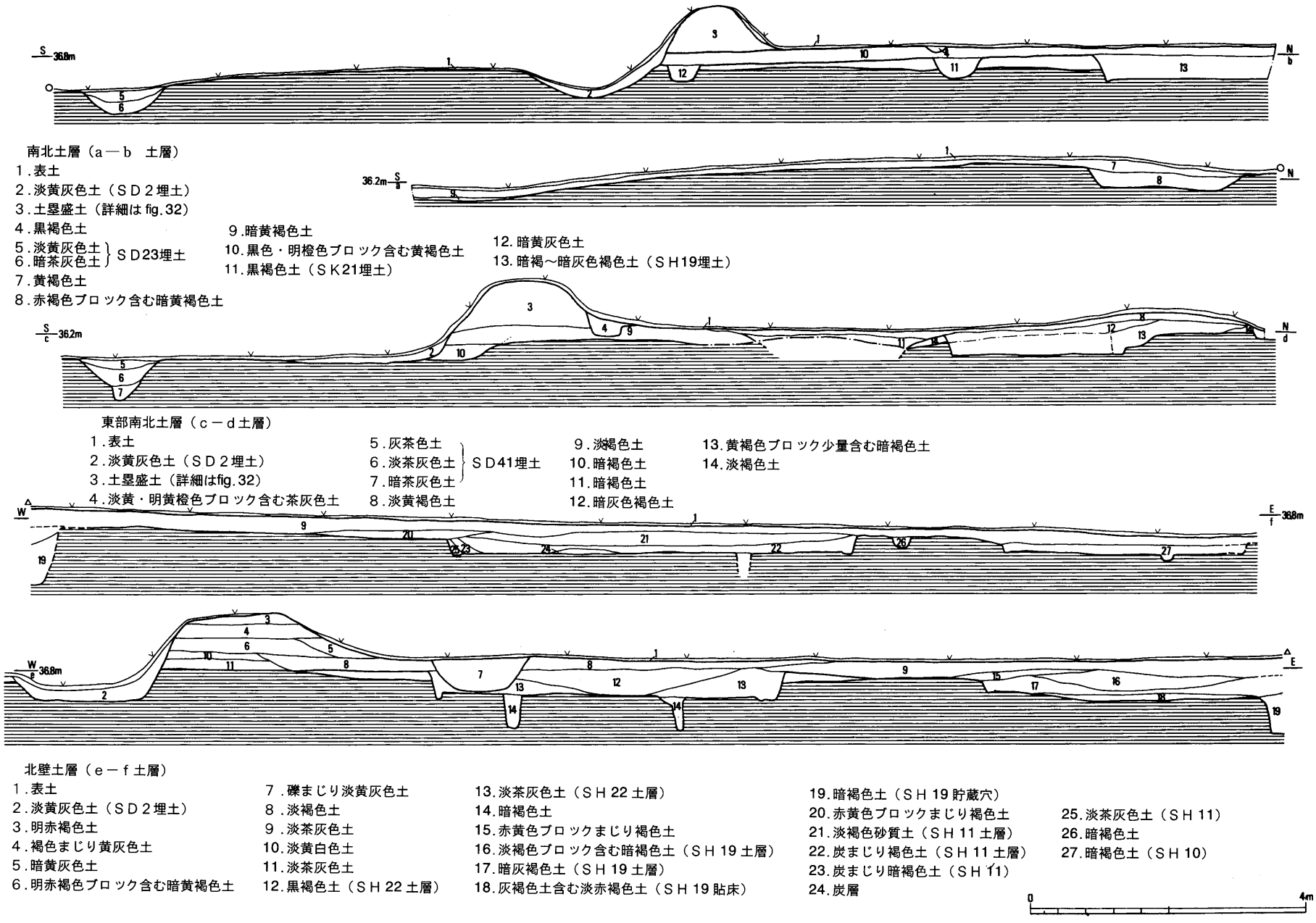
検出した部分の全体に壁周溝が認められるが、建物東壁際南寄りにある貯蔵穴と考えられる部分では途切れている。貯蔵穴は建物東辺に沿って楕円形に掘削されており、その周囲には浅い溝を巡らすことで排水の便を図っている模様である。なお、この貯蔵穴は、今回確認された他の竪穴住居の貯蔵穴とは異なり、壁とは若干の距離を置いて掘削されているという特徴を持つ。

貯蔵穴の周囲に巡らされた溝の南に接続するように、幅約0.1m、長さ約1.0mの直線的な溝がある。この溝が何を意味するのかは不明であるが、建物に伴うものであるのは間違いない。

炉の位置は、検出内では明確でない。しかし、わずかながら北寄りに被熱部分が認められ、この部分を含めた北側に炉があるものと考えられる。しかし、そうすると炉の位置は、建物中央というよりは、北西寄りということになる。

建物南辺の中央やや東寄りには、外側へ突出するピットがある。このピットに対応するように、建物内部の壁周溝寄りに、比較的等間隔の小ピットが並ぶ。前者を入り口の施設に伴うもの、後者を建物内部の壁に伴うもの、という想定も可能であろうが、

fig.4 調査区土層断面図（1：80）



南北土層（a－b　土層）

1.表土
2.淡黄灰色土（ＳＤ２埋土）
3.土塁盛土（詳細は fig.32）
4.黒褐色土
5.淡黄灰色土 } ＳＤ23埋土
6.暗茶灰色土 }
7.黄褐色土
8.赤褐色ブロック含む暗黄褐色土
9.暗黄褐色土
10.黒色・明橙色ブロック含む黄褐色土
11.黒褐色土（ＳＫ21埋土）
12.暗黄灰色土
13.暗褐～暗灰色褐色土（ＳＨ19埋土）

東部南北土層（c－d土層）

1.表土
2.淡黄灰色土（ＳＤ２埋土）
3.土塁盛土（詳細はfig.32）
4.淡黄・明黄橙色ブロック含む茶灰色土
5.灰茶色土 } ＳＤ41埋土
6.淡茶灰色土 }
7.暗茶灰色土 }
8.淡黄褐色土
9.淡褐色土
10.暗褐色土
11.暗褐色土
12.暗灰色褐色土
13.黄褐色ブロック少量含む暗褐色土
14.淡褐色土

北壁土層（e－f土層）

1.表土
2.淡黄灰色土（ＳＤ２埋土）
3.明赤褐色土
4.褐色まじり黄灰色土
5.暗黄灰色土
6.明赤褐色ブロック含む暗黄褐色土
7.礫まじり淡黄灰色土
8.淡褐色土
9.淡茶灰色土
10.淡黄白色土
11.淡茶灰色土
12.黒褐色土（ＳＨ22土層）
13.淡茶灰色土（ＳＨ22土層）
14.暗褐色土
15.赤黄色ブロックまじり褐色土
16.淡褐色ブロック含む暗褐色土（ＳＨ19土層）
17.暗灰褐色土（ＳＨ19土層）
18.灰褐色土含む淡赤褐色土（ＳＨ19貼床）
19.暗褐色土（ＳＨ19貯蔵穴）
20.赤黄色ブロックまじり褐色土
21.淡褐色砂質土（ＳＨ11土層）
22.炭まじり褐色土（ＳＨ11土層）
23.炭まじり暗褐色土（ＳＨ11）
24.炭層
25.淡茶灰色土（ＳＨ11）
26.暗褐色土
27.暗褐色土（ＳＨ10）

確証はない。

建物内部には中央部を中心に貼床が認められる。また、建物内はfig.7に示したような硬質部分があり、居住者の踏みしめによる差異が認められる。

ＳＨ11からの出土遺物は多くなく、そしてそのほとんどが埋土中のものである。唯一16の甕のみが貯蔵穴の肩にかかるようにして出土している。後期でも前葉頃の遺構とみてよかろう。

なお、この建物に直交するように土坑ＳＫ17が設置されている。時期的にもさほど隔たるものでなく、有機的な関連が想定されるが、意味はよく判らない。

竪穴住居ＳＨ14（fig.8）　調査区東部中央付近で検出した遺構である。ほぼ全体を検出したが、南西隅の一部を奈良時代の竪穴住居ＳＨ30によって破壊されている。南北約3.6m、東西約3.8mで、平面形はほぼ正方形である。遺構検出面から約0.3mで床面に達する。埋土は黒色系土で、多くの土器片を含んでいた。

床面はほぼ水平であるが、壁周溝と主柱穴は確認できなかった。中央やや北寄りに炉と見られる被熱部がある。炉は若干の掘り窪められており、底は被熱による赤変が顕著である。

南壁際のほぼ中央には貯蔵穴と見られるピットがある。北側の肩部には若干の盛土が認められ、水等の流入を防ぐ目的と考えられる。

建物内部には全体的に貼床が認められる。また、建物内はfig.8に示したような硬質部分があるが、その違いは、ＳＨ11ほど明瞭ではない。

床面に密着した状態での出土遺物はない。埋土中からの土器からではあるが、後期前葉頃の遺構とみてよい。ただし、重なり合っている竪穴住居ＳＨ36の遺物との差異は明確でない。

竪穴住居ＳＨ16　調査区東端中央部で検出した方形の竪穴住居と思われる遺構である。大部分が調査区外（今年度以降、調査予定地）に相当する。西辺の一部と南西隅を検出したにとどまる。したがって、竪穴住居跡ではない可能性もある。壁周溝は明確ではないが、その存在の可能性はある。埋土中から石鏃(5)が出土した。時期は明確にできないが、調査区全体の状況からはやはり後期の範疇で把握できるのではなかろうか。

竪穴住居ＳＨ19（fig.7）　調査区北端中央部で検出した遺構である。南側の一部を検出し、北側は調査区外である。平面方形の竪穴住居跡であるが、

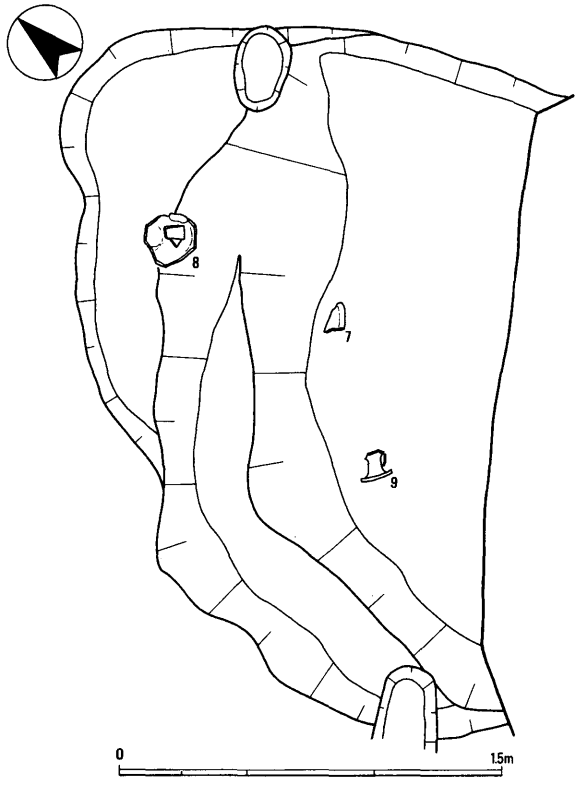


fig.5　倒木痕ＳＺ27平面図（１：30）

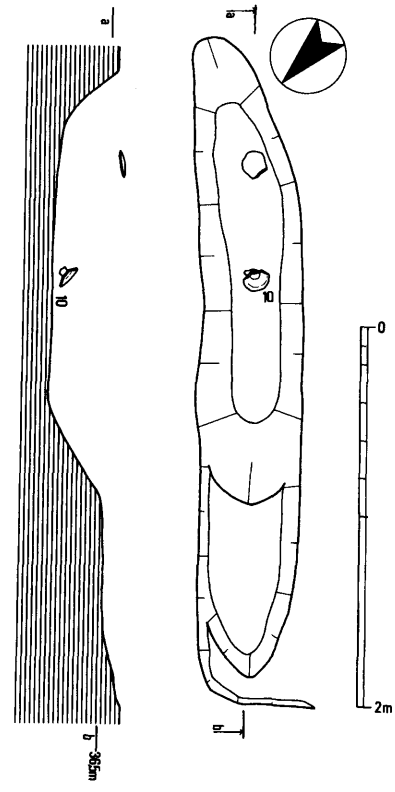


fig.6　土坑ＳＫ21平面・断面図（１：40）

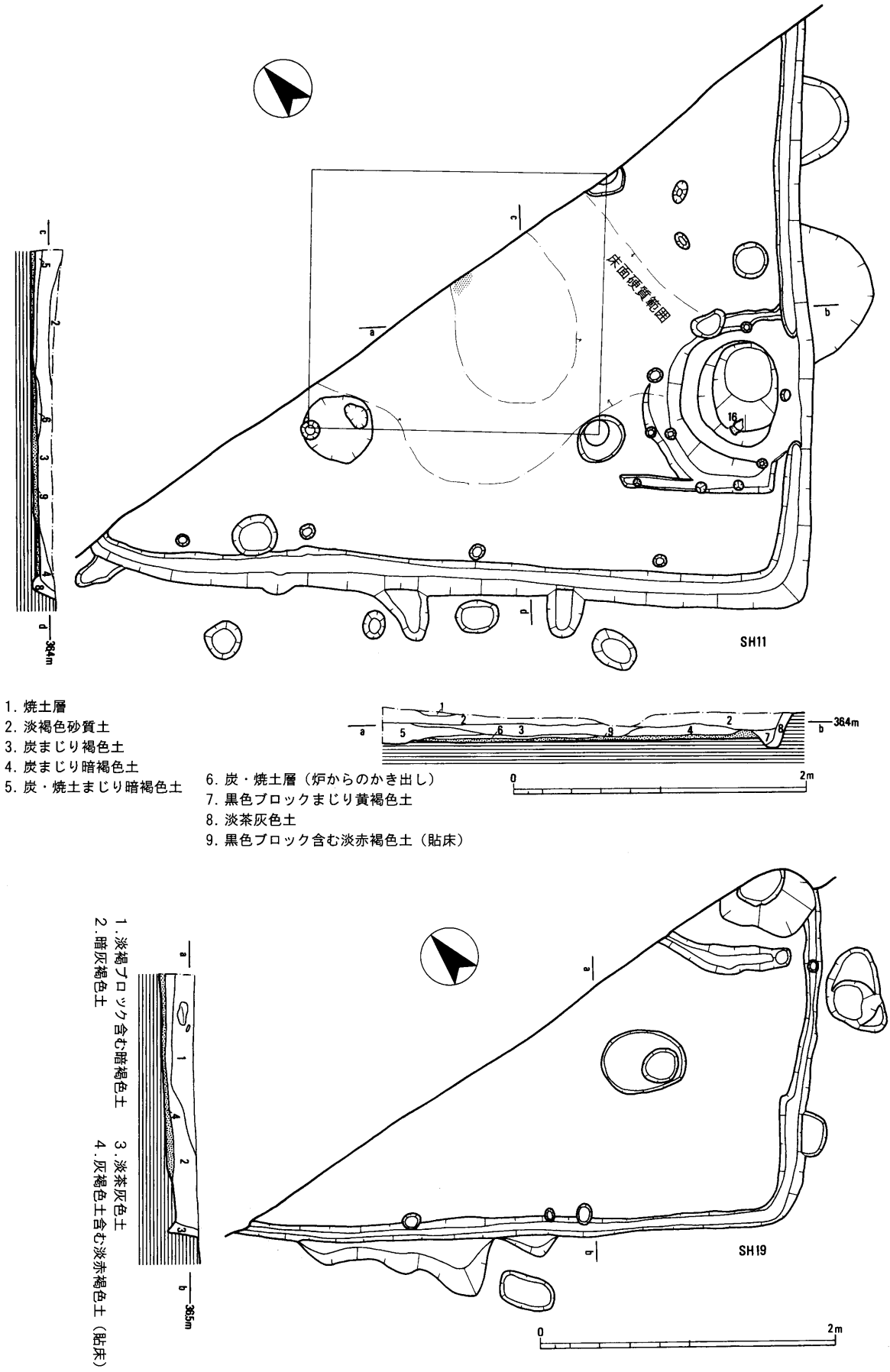


fig.7　竪穴住居ＳＨ11・19　平面・断面図（１：40）

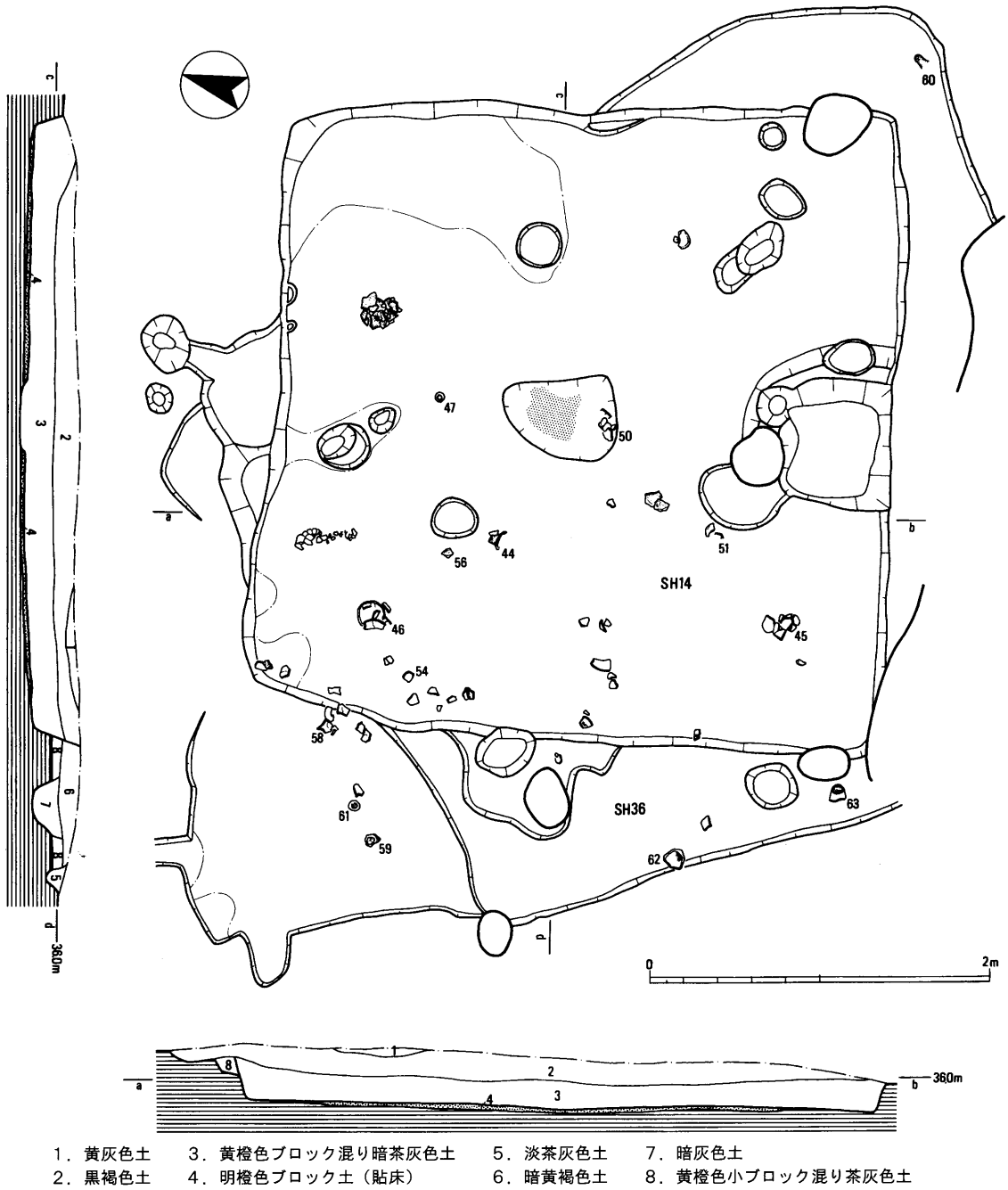


fig.8　竪穴住居ＳＨ14・36　平面断面図（１：40）

規模は不明である。主柱穴は１カ所のみ確認できた。その位置関係から、おそらく４個の主柱穴を有するものであろう。

検出範囲内全体に壁周溝が見られる。また、検出部北東隅にあたる東壁際には貯蔵穴が認められる。貯蔵穴の周囲には、ＳＨ11と同様に浅い溝が巡らされている。建物南辺には、ＳＨ11とよく似た、外側へ突出するピットがあるが、ＳＨ11ほどは揃わない。

建物内検出範囲の全体に貼床が認められる。なお、炉と考えられるものは、調査区内には認められなかった。

出土遺物は全て埋土中であるが、後期前葉頃のものが認められる。

なお、建物の南には、建物南辺とほぼ平行して掘削されている土坑ＳＫ20・21（fig.6）がある。目的等は不明とせざるを得ないが、何らかの有機的な関連が想定される。

竪穴住居ＳＨ22（fig.9）　調査区北端やや西

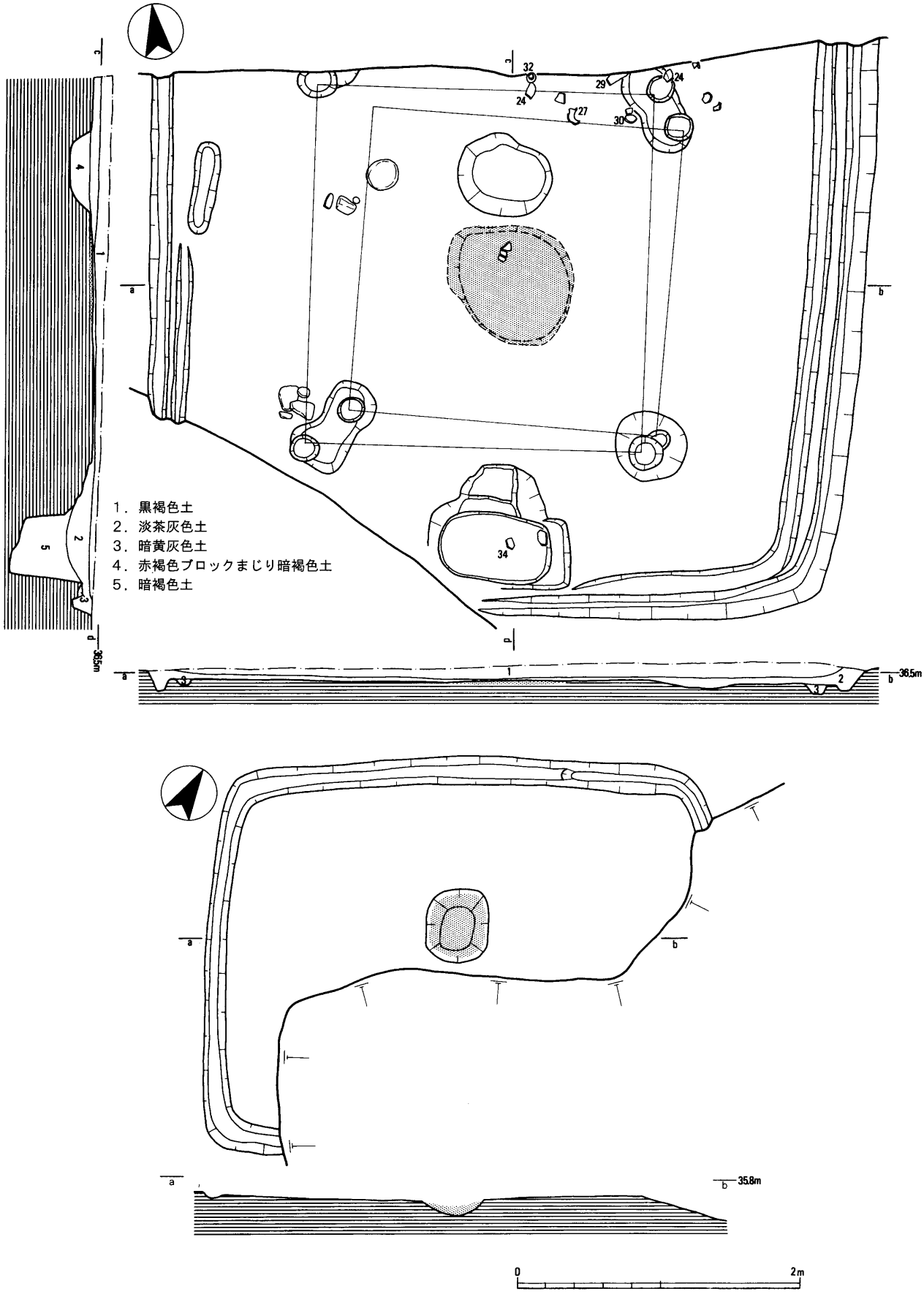


fig.9　竪穴住居ＳＨ22（上段）ＳＨ40（下段）平面・断面図（１：40）

寄りで検出した遺構である。方形の竪穴住居跡で、北辺は調査区外にある。遺構の上部には土塁ＳＺ１があった。また、南西隅はＳＤ２で破壊されている。東西は約5.2mである。

１回の建て替えがあり、壁周溝も２重になって検出した。検出時の状態としては、内側の周溝埋土が比較的硬質であったため、建て替え時に拡張しているものと考えられる。主柱穴もそれに対応しているが、建て替え後の主柱穴のうち、北西のピットは確認できなかった。主柱穴の前後関係については、焼土粒の混入する、南西側に広がるまとまりが建て替え前のものと判断される。

中央部には、炉と想定される場所が２カ所確認できた。北側のものは土坑状になり、埋められていたことから、建て替え前のものと判断される。南側のものは数cmほどの高まりとなるものである。

南壁際のほぼ中央に貯蔵穴と想定される土坑を確認している。隅丸の長方形で、建物中央に向かって階段状の遺構が取り付く。壁周溝は、貯蔵穴に接続しないように掘削されているようである。

床面全体に貼床がなされているが、拡張を伴った長期の建物であるためか、硬質・軟質の区分は明瞭でない。

埋土中には、破片ながら比較的多くの土器を含んでいた。後期中葉頃のものを中心としている。

竪穴住居ＳＨ36（fig.８）　調査区東側中央部で検出した遺構である。竪穴住居ＳＨ14と重なっている。検出面からも数cm程度の残存が確認された程度である。土層の状況からは、ＳＨ14に先行するものと考えられる。不定形な形状であるが、南北約4.8m、東西約4.0mの規模と考えられる。壁周溝は確認されず、また、炉に相当する部分もＳＨ14の構築により破壊されているため、不明である。埋土中に見られた土器からは、後期前葉頃の遺構と考えられる。

竪穴住居ＳＨ40（fig.９）　調査区中央やや東寄りで検出した遺構である。遺構確認時には壁周溝のみが認められたような状態で、かなりの削平がなされている。２号墳の墳丘内に取り込まれており、南東側を近年の攪乱穴で破壊されている。東西に長い長方形で、南北約2.8m、東西約3.5mである。確認範囲内では壁周溝が全周する。主柱穴は確認できなかった。中央やや北寄りにはピット状の遺構があり、その中に灰や焼土を含んだ土が認められたことから、炉に相当するものと考えられる。少量の土器が壁周溝内から出土した程度で、所属時期の判断は難しいが、上述の特徴から、弥生時代のものと考えて大過なかろう。

竪穴住居ＳＨ43（fig.10）　調査区南端中央で検出した遺構である。北部は現道下のため、調査していない。東西約5.3m、南北約5.1mの、ほぼ正方形の建物である。建物中央は、後世の攪乱によって削平されている。

壁周溝が部分的に巡るが、検出時の輪郭の内側から確認されているため、この建物についても立て替えがあるものと考えられる。ただし、確認された主柱穴は３カ所（４本柱と想定される）のみであった。壁周溝は、貯蔵穴には接続しないように掘削されている。

南壁際のほぼ中央に貯蔵穴と考えられる土坑がある。ＳＨ22と同様、建物中心部に向かって階段状の突出部が接続している。この貯蔵穴に倒れ込むようにして高杯（41）が出土している。

炉は、建物中央部が攪乱穴により破壊されているため、喪失したものと考えられる。ただし、建物東隅で比較的まとまりのある焼土塊を検出している。奈良時代頃の竪穴住居跡であればカマドの痕跡としたいところであるが、弥生時代のものであるため、一応、埋土中に何らかの契機により混入したものとしておく。

遺物は、埋土中に若干認められる。貯蔵穴付近から出土した高杯の形態から、建物の時期としては後期前葉頃とすることができよう。

竪穴住居ＳＨ45（fig.11）　調査区西部で検出した遺構である。古墳群に囲まれており、かなりの削平をうけていたため、検出時には既に壁周溝の巡りと貼床が確認されていた。

壁周溝の最大長から推定される建物の規模は、東西約5.2mである。ただし、この内側に壁周溝の曲がりが確認できるため、１回程度の建て替えを行っているものと推定される。西壁の周溝内からは、小ピットが数個検出できた。

主柱穴は３カ所（４本柱と想定される）確認した

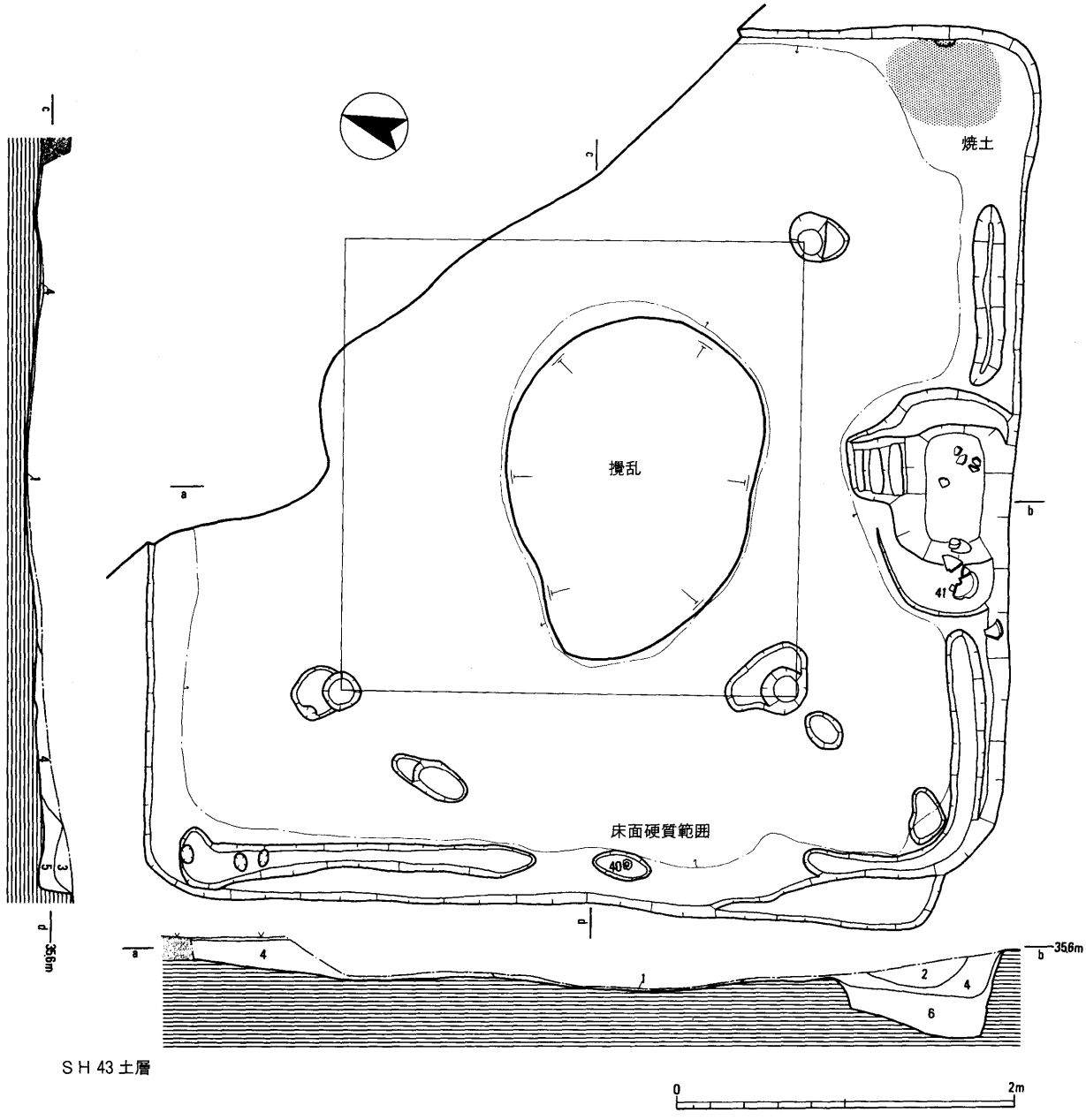


fig.10　竪穴住居ＳＨ43　平面・断面図（１：40）

が、その東側にも同様の並びのピットがある。共に東壁の間際に検出したものであるため、あるいは東側が切妻状になる形態を想定できるのかも知れない。

中央付近に浅い土坑状の遺構を確認した。内部から焼土や灰を検出しているため、炉に相当するものと考えられる。

床面は、部分的に貼床が認められるが、削平を考慮すれば、本来は全面にあったものと考えられる。

出土遺物は壁周溝内からわずかであり、時期の特定は難しい。炉が中央にあることや、壁周溝内から出土したわずかな土器片から、後期の範疇で把握できそうである。

竪穴住居ＳＨ59（fig.12）　調査区東側の中央付近で検出した遺構である。建物の中央を溝ＳＤ２が走り、大部分破壊されている。また、東壁部は攪乱穴で破壊されている。このような状況から、遺構の掘り込みが確認できたのは北壁部分のみであった。規模は、東西が約4.6m、南北は、主柱穴の位置から

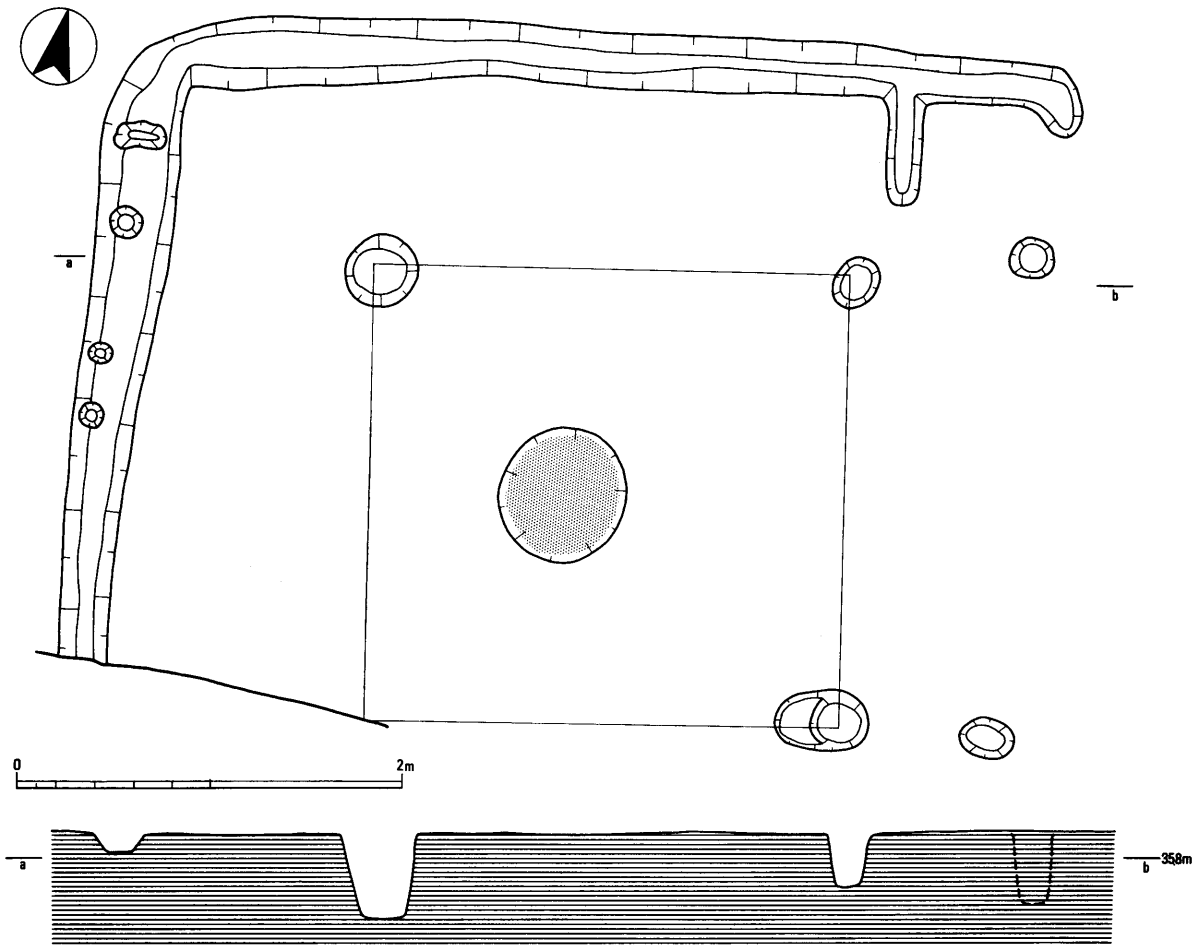


fig.11　竪穴住居ＳＨ45平面・断面図（１：40）

復元すると、約4.5mとなり、ほぼ正方形の平面形と考えられる。壁周溝は明確に確認できなかったが、西壁南寄りでわずかながらその痕跡があり、本来は部分的に存在していた可能性がある。

主柱穴は４カ所確認でき、４本柱になるものと考えられる。中央西寄りに小土坑があり、焼土や灰を含む埋土があったため、炉に相当すると考えられる。破壊で明確ではないが、東壁付近に深い土坑があり、貯蔵穴に相当すると考えられる。

出土遺物はわずかであるが、出土した土器の形態は後期前葉頃のものと考えられる。

竪穴住居ＳＨ63（fig.13）　調査区東端中央部で検出した遺構である。東半部は調査区外に及ぶ。西壁は全体が確認でき、南北約3.9mの方形の平面形である。茶灰色系土を下層、黒色系埋土を上層とし、上層には多くの土器片を含む。遺構検出面からの深さは約0.4mで、今回確認できた竪穴住居のなかでも最も保存状態のよいものである。

壁周溝はほぼ全面に巡るようであるが、北壁では少し途切れる。検出部のほぼ中央に深いピットがあり、これを主柱穴と考えると、２本柱の建物が想定できる。中央やや北寄りに浅い土坑があり、底部に被熱が認められるため、炉と考えられる。この土坑の南肩部には被熱部のある石があり、炉の縁石の可能性もある。

この竪穴住居で特筆されるのは、床面に密着した土器群のあることである。炉の北側には、壺（65）・甕（72）・小形甕（70）が、西壁中央やや南寄りの周溝内縁にも甕（71）が、それぞれ倒立状態で並んでいた。また、炉内にも器台（66）が、やはり床面に立てられていた。これらの土器群は、床面と土器との間に間層が全く存在しないことから、住居廃絶時の状態を保っているものと考えてよい。なお床面の土器は、倒立状態であることと、体部下半が認められないことから、据えられた状態が、その土器を用いていた状態を示すものなのか、あるいは破損した

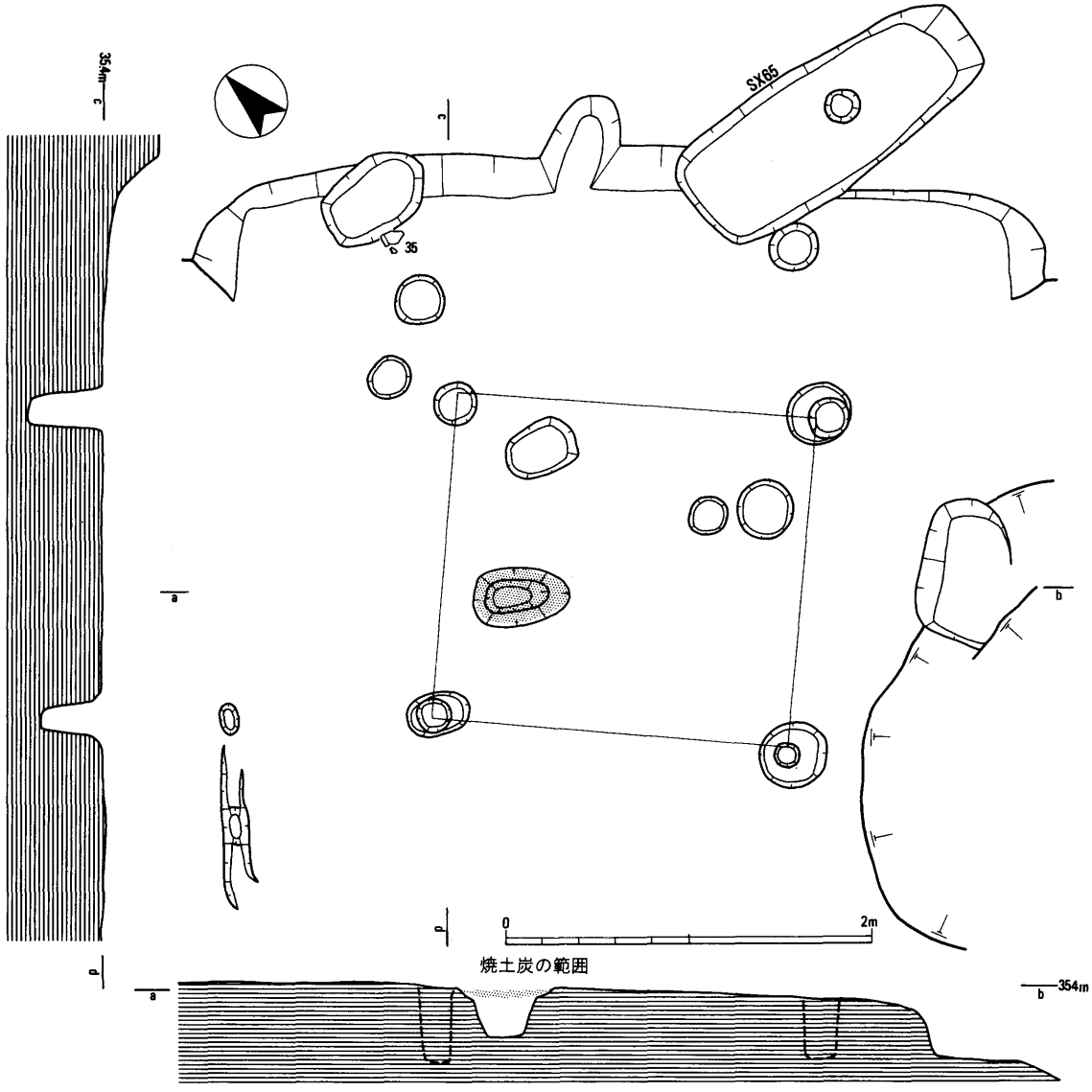


fig.12　竪穴住居ＳＨ59　平面・断面図（１：40）

土器を器台代わりに用いていたのかは、どちらとも言い難い。それでも、同時性を物語る一括資料として、さらに、住居内での土器の用いられ方を推察し得る資料として、重要である。

この住居の時期は、出土土器からは後期前葉頃に求めることができる。

b　古墳時代の遺構

この時期の遺構には、古墳６基、土器棺墓１基、土壙墓２基がある。時期的には、古墳時代前期初頭、中期、後期のものに大別される。

なお、ここで記述する古墳の規模は、墳丘に相当する部分を計測している。

１号墳（fig.15）　調査区中央やや東寄りで検出した遺構である。当初、埋葬施設に相当するＳＸ29のみを確認したのであるが、調査の進展に伴ってこの墓壙の周囲に方形の区画溝を見出したため、区画も含め１号墳と把握する。

この区画は周溝の一種と把握できる。南北長は明確でないものの、東西は約5.6mで、ほぼ正方形になるものと思われる。溝は、検出の状態で幅約0.2m、深さ約0.1mと極めて浅く、不完全に見えるものである。盛土は確認できなかった。また、この周溝内からの出土遺物はなかった。

埋葬施設は、東西約2.2m、南北約0.6mの東西に長い長方形状を呈し、中に長さ約1.8m、幅約0.4mの木棺痕跡を確認した。墓壙の深さは約0.2mで、すでにかなりの削平が想定できる。

木棺の東木口外側には須恵器の蓋杯(86)が置かれ

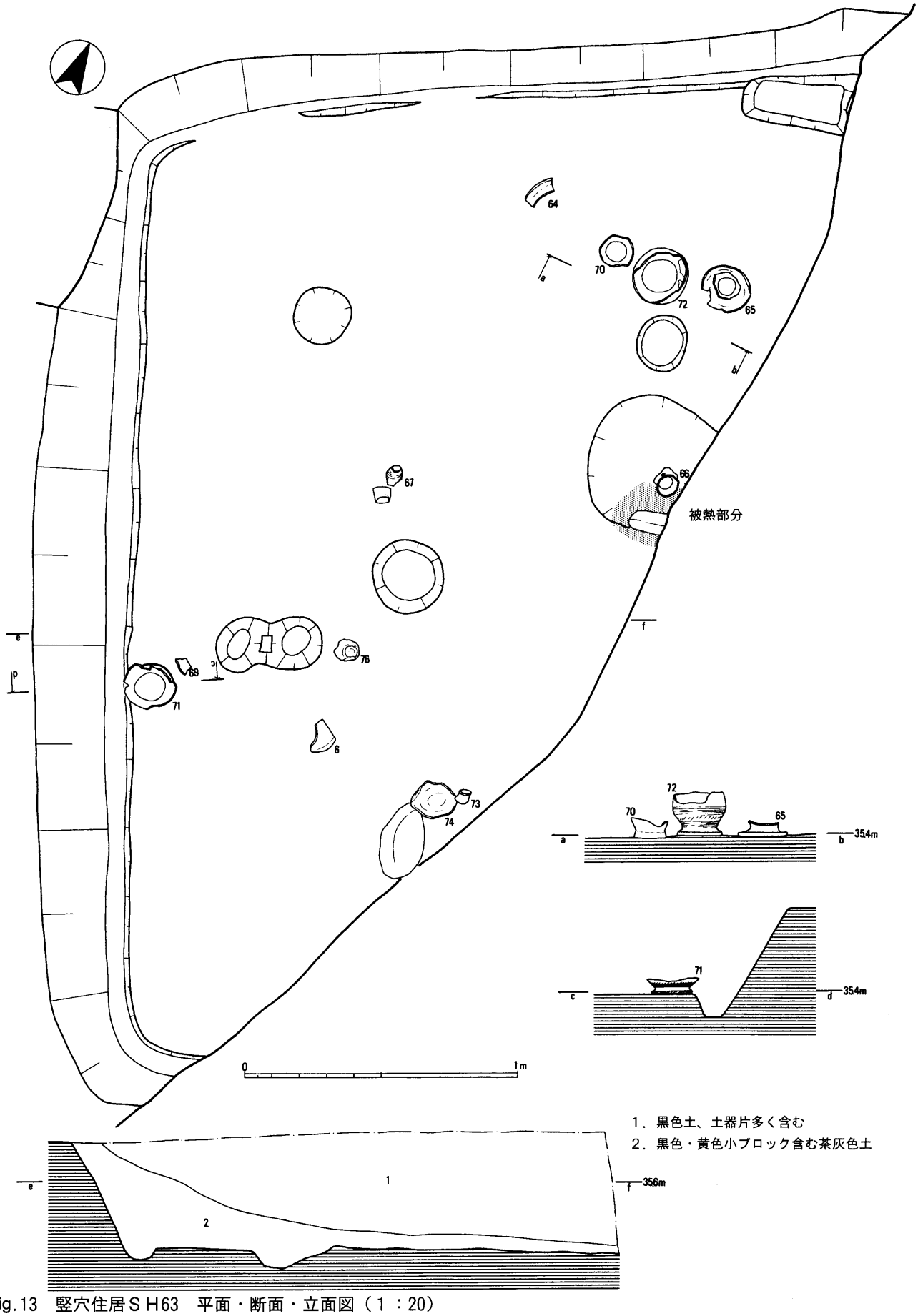


fig.13　竪穴住居ＳＨ63　平面・断面・立面図（１：20）

ていたが、杯蓋は破片であった。木棺内の中央付近には鉄製刀子(85)が副葬されていた。木棺内の埋土は、全て篩にかけたが、玉類等の遺物はなかった。

この古墳の所属時期は、須恵器の形態から、７世紀前葉と考えられる。

２号墳（fig.16）　調査区中央南東寄りで検出した遺構である。中央部に後世の攪乱穴があり、現道も走っているので、全体は検出していない。

東西約10.8m、南北約10.6mの方墳である。周溝は全周するものと想定される。周溝の掘削は、外側の傾斜がきつく、内側が緩いものである。盛土は、ｋ10グリット付近やｉ12グリット付近で若干認められた。特に、ｋ10グリット付近では、この盛土の高まりを利用して中世墓（ＳＸ47）が構築されている。

この古墳に伴うような遺物は、周溝内からは出土しなかった。ただし、ｋ11グリットの盛土上部から５世紀代と考えられる須恵器甕（87）が出土しており、この古墳の時期を示す遺物とみてよかろう。

３号墳（fig.17）　調査区中央やや西寄りで検出した遺構である。墳丘の南東隅付近は中世墓（集石群３）に利用されており、この古墳へも影響を与えている。また、南端は現道（来年度以降調査）が走っている。

東西約8.6m、南北約7.0mの長方形部を主墳部とし、その南辺に接続部幅約2.7m、裾約4.5m（推定）、長さ約2.8mの突出部が接続する。突出部を含めた全長は約9.5mである。突出部の東辺は、中世墓によって破壊されている。突出部の全面を区画する溝の存在も想定されるが、それは現道の下にあるものと考えられる。

周溝の掘削は、溝中央部は深く、コーナー部分で浅くなる方法である。この方法は、特に東・西周溝で顕著である。また、墳丘側を比較的直線的に掘削するのに対し、外側は不定形で歪である。埋葬施設は、削平のためか確認できなかった。

墳丘の形態や周溝の掘削方法に見られるこのような特徴は、いわゆる「前方後方形周溝墓」に相当するものである。しかし、出土遺物には、周溝埋土上層部に６世紀後葉から７世紀前葉頃の須恵器蓋（88）や同じ頃かと考えられる土師器杯を含んでいるため、決定的な要素に欠ける。この古墳の時期については、構築方法を重視して、前期初頭頃としておくが、上述のような状況であるため、決定的ではない。

４号墳（fig.18）　調査区西端で検出した遺構である。方形墳であることに間違いないが、東辺と北辺の一部しか検出していない（西辺部は来年度以降調査）ため、方墳なのか、あるいは３号墳のような形態をなすのかは判らない。ただし、周溝の掘削方法は３号墳と類似している。南辺に相当する部分は、現道の設置により、破壊されているものと考えられる。

出土遺物は細片の土器のみで、所属時期は判然としない。３号墳との類似から、一応、前期初頭頃と考えておく。

５号墳（fig.18）　調査区西端部付近で検出した遺構である。直径約6.5mの円墳と考えられ、周溝は標高の高い北側にのみ馬蹄形に確認できた。

周溝は検出時の状態で幅約0.5から0.8m、深さ約0.2mの細くて狭いものであるが、断面形は逆台形をなす明確なものである。

墳丘分の中央を精査したが、埋葬施設に相当するものは確認できなかった。

出土遺物には竪穴住居ＳＨ14で確認された44の壺と類似したものがあるが、小片のため、紛れ込みと見るべきであろう。それ以外に明確なものはない。３・４号墳の間に築造されていることから、それに前後する時期が想定できるのみである。

６号墳（fig.19）　調査区中央部、２号墳と３号墳との間に確認された遺構である。当初、土壙墓（ＳＸ51）と溝（ＳＤ58）とを別個に考えていたが、両者を一連のものと考え、６号墳として扱う。周溝が円弧を描くことから円墳と見なし、その復元径は約6.6mと認識しておく。ただし、周溝の残存部が極めて少ないため、断定は避ける。

埋葬施設では、東西約2.6m、南北約1.1mの隅丸長方形の墓壙に、長さ約2.3m、幅約0.6mの木棺痕跡が確認された。木棺痕跡は、断面形がやや丸みを帯びることから、割竹形木棺の可能性が考えられる。東木口部は、棺身部よりも外に突出する形状が確認された。この中から副葬品と考えられるような遺物は出土しなかった。

周溝は、黒色系土を埋土とし、断面U字形をなす。

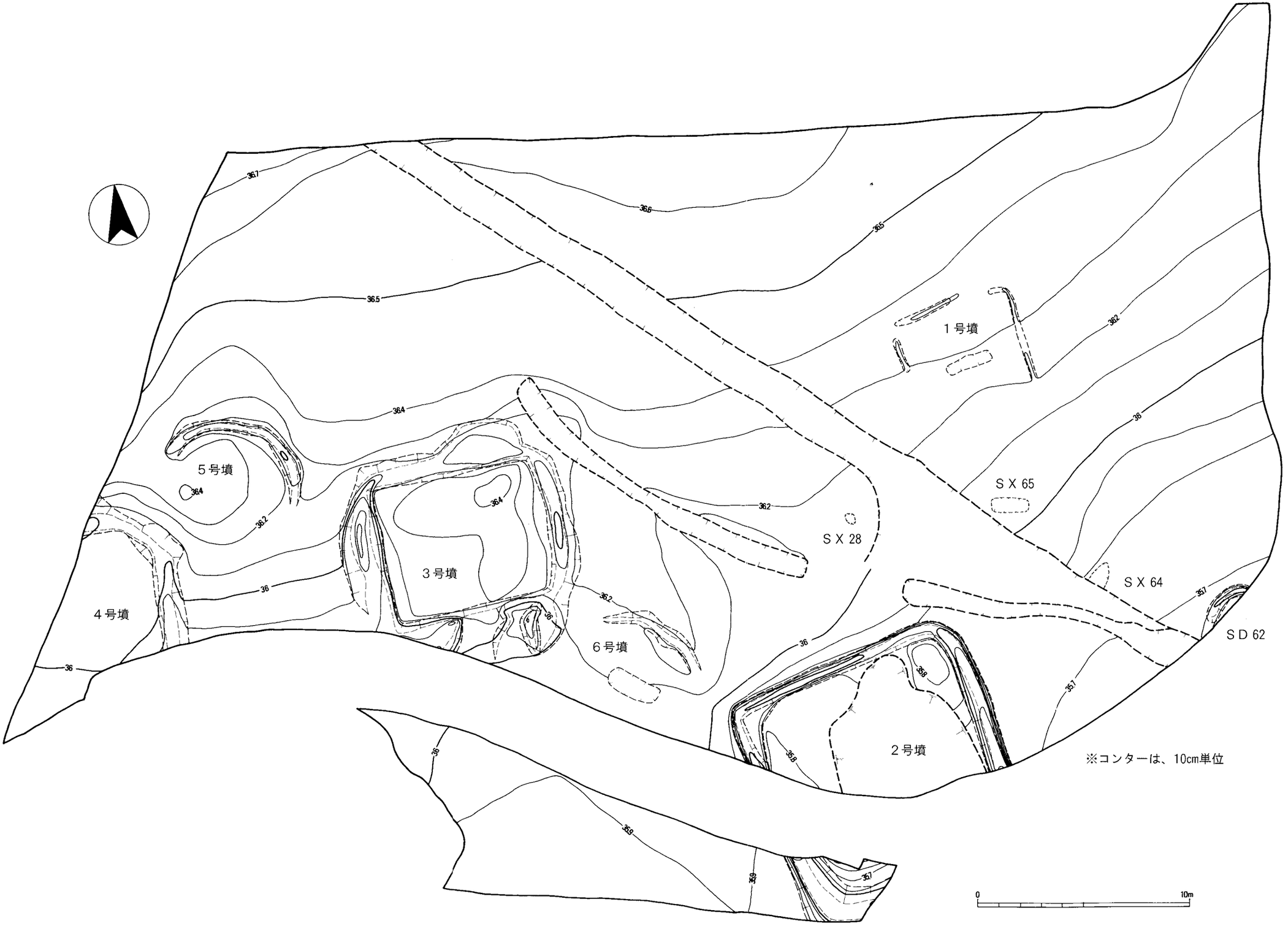


fig.14　古墳群関連遺溝測量図（1：200）

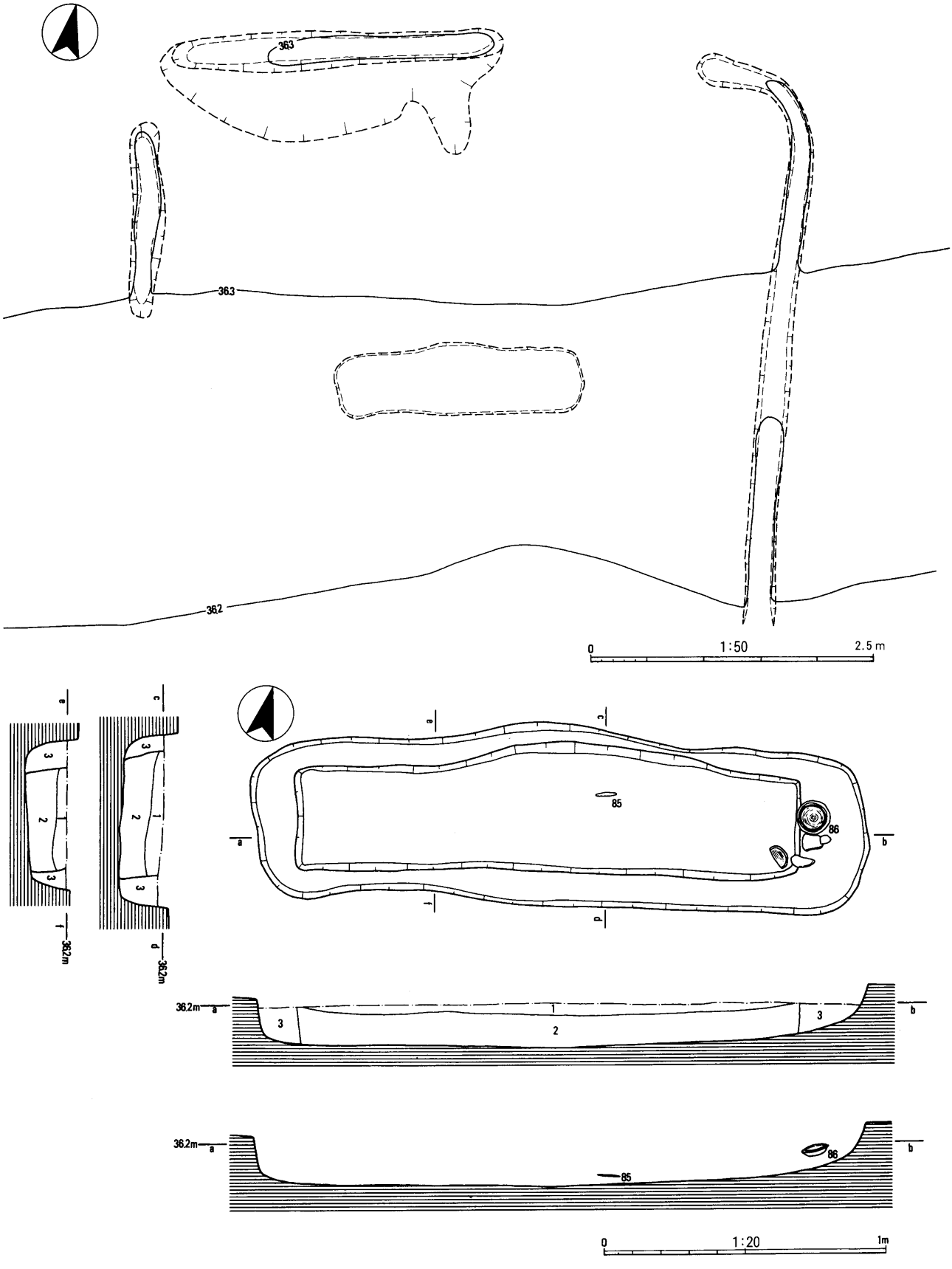
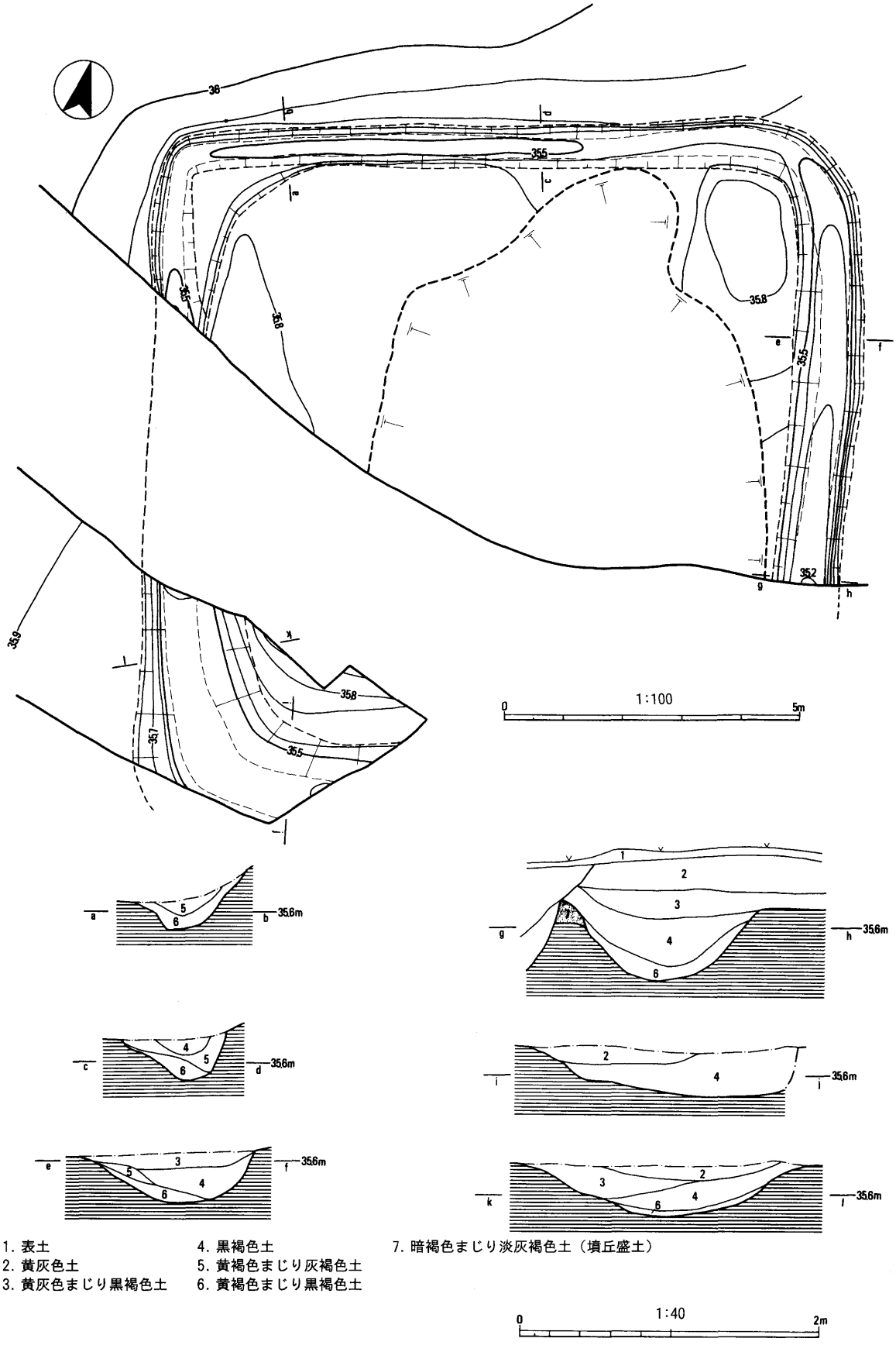


fig.15　1号墳平面図及び埋葬施設平面・立面図



1. 表土
2. 黄灰色土
3. 黄灰色まじり黒褐色土
4. 黒褐色土
5. 黄褐色まじり灰褐色土
6. 黄褐色まじり黒褐色土
7. 暗褐色まじり淡灰褐色土（墳丘盛土）

fig.16　２号墳　平面（１：100）・断面（１：40）図

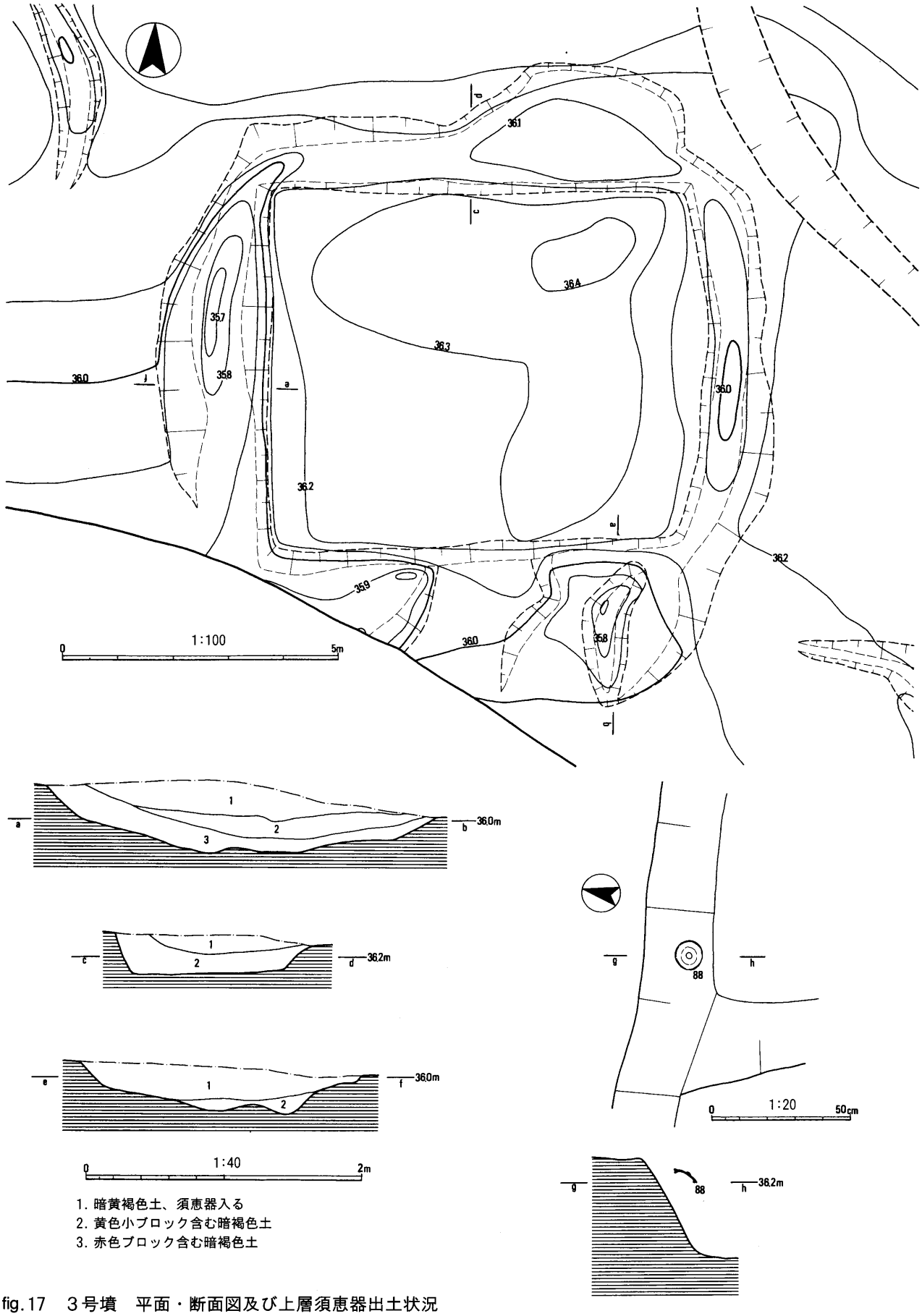


fig.17　３号墳　平面・断面図及び上層須恵器出土状況

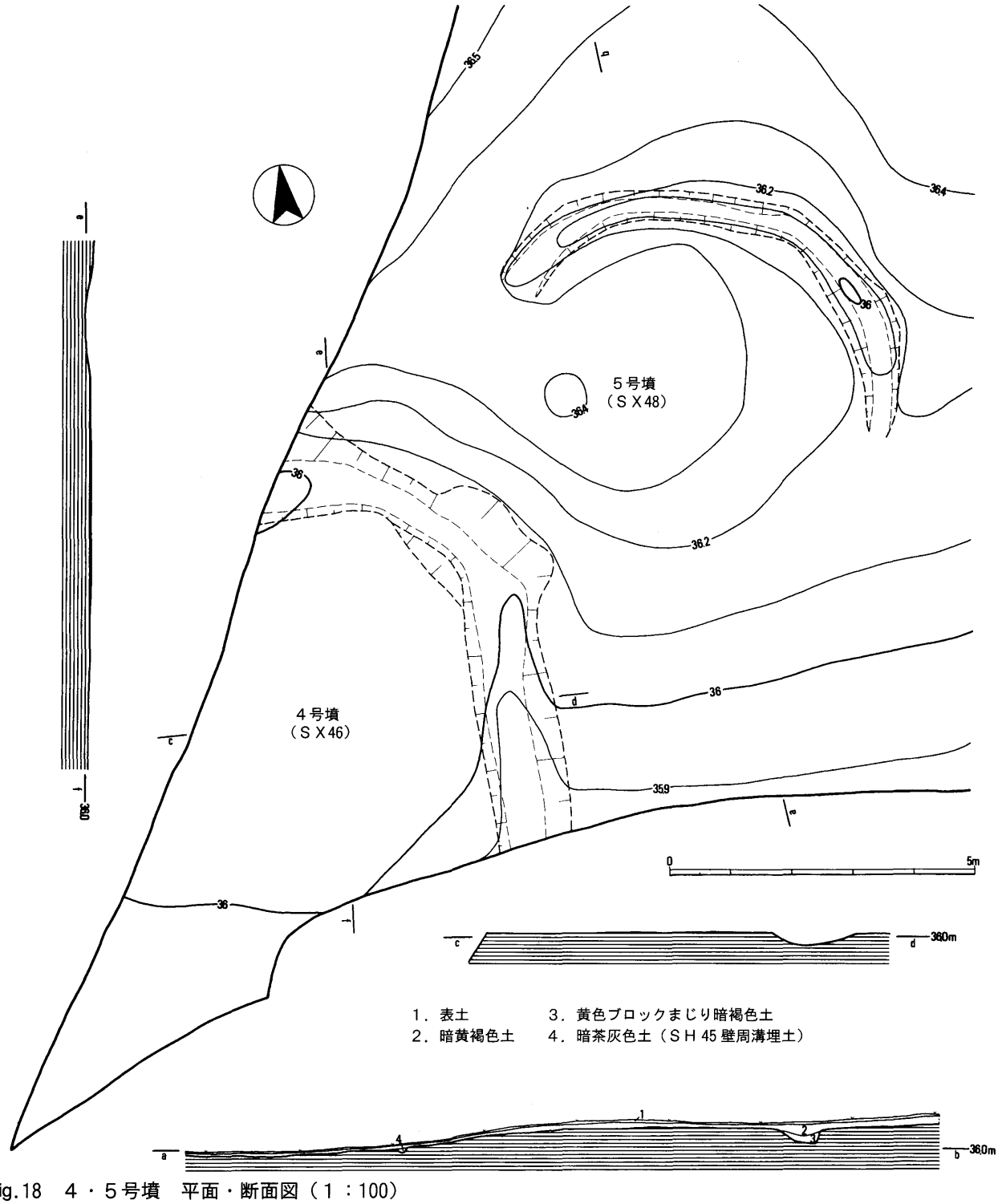


fig.18　4・5号墳　平面・断面図（1：100）

出土遺物は少ない。

6号墳の所属時期は、出土遺物が少ないため、確定的なことは何も言えない。周溝掘削の方法は2号墳よりは3・5号墳に類似することから、これらの時期に含めて考えるべきであろう。

溝ＳＤ62　調査区東端中央やや南寄りで検出した遺構である。大部分が調査区外にあたる。時期を示すような出土遺物はないが、5号墳の周溝との類似から、古墳の可能性を考えておきたい。

土壙墓ＳＸ64（fig.20）　調査区東部中央付近で検出した遺構である。南半は溝ＳＤ2で破壊されている。

黒色系土を埋土とする。墓壙内には長さ1.0m以上、幅約0.5mの木棺痕跡がある。南木口の内側に須恵器

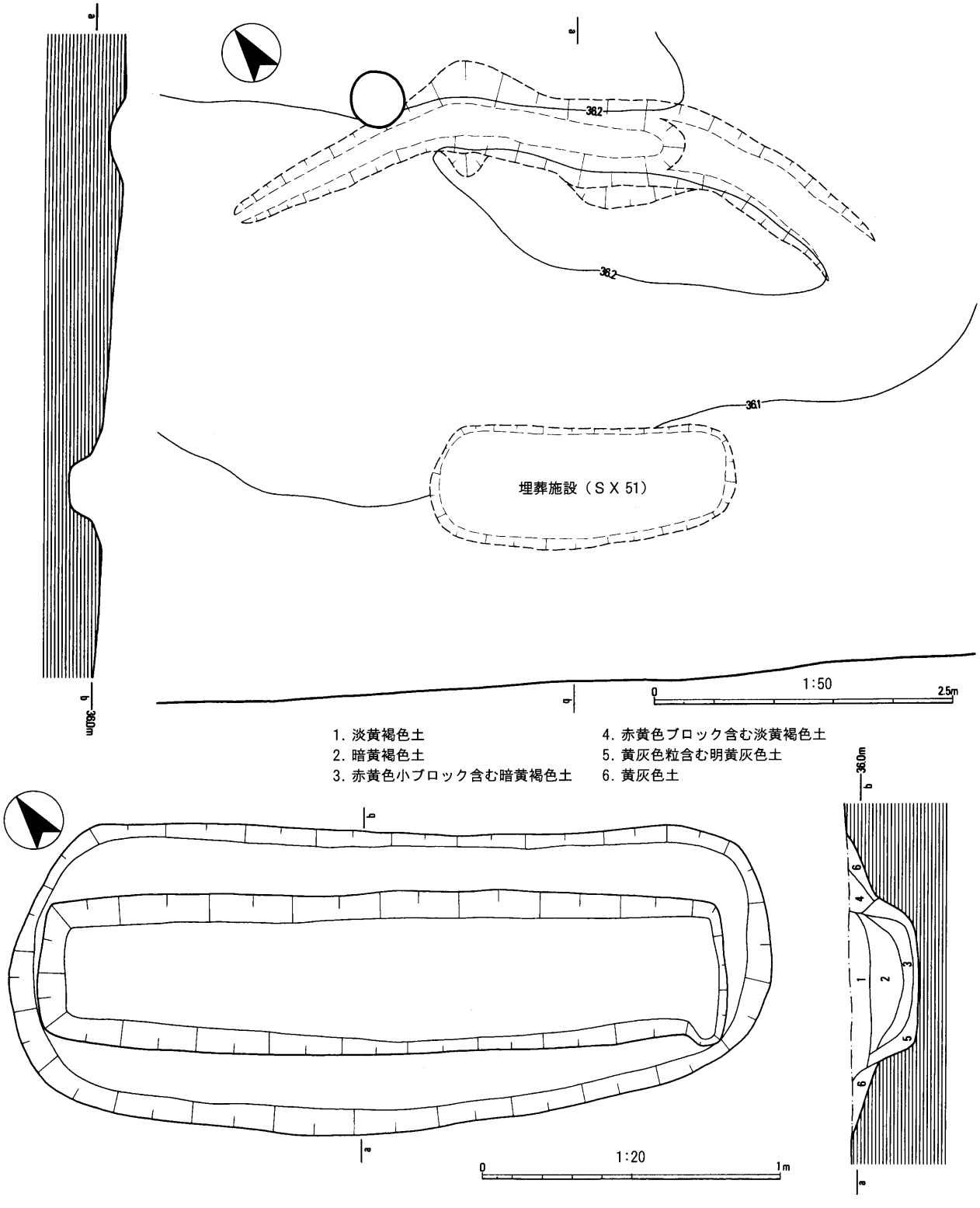


fig.19　６号墳　平面・断面図及び埋葬施設（ＳＸ51）平面・断面図

杯身（93）が置かれていた。この須恵器は、木棺痕跡底面よりもかなり浮いた状態のため、本来は木棺の上に置かれていたものと推察される。木棺内からはその他の副葬品は出土しなかった。

埋土の状況、須恵器の設置など、１号墳埋葬施設と類似する。出土した須恵器から、７世紀前葉頃の築造と考えられる。

土壙墓ＳＸ65（fig.12）　調査区東部中央付近で検出した遺構である。１号墳の南約６ｍにある。東西約1.8m、南北約0.7mの隅丸長方形の墓壙である。

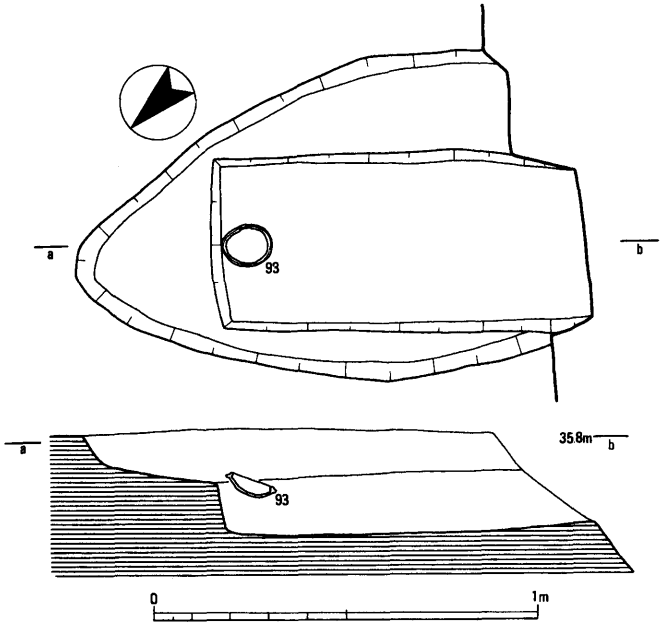


fig.20　土壙墓ＳＸ64　平面・断面図（１：20）

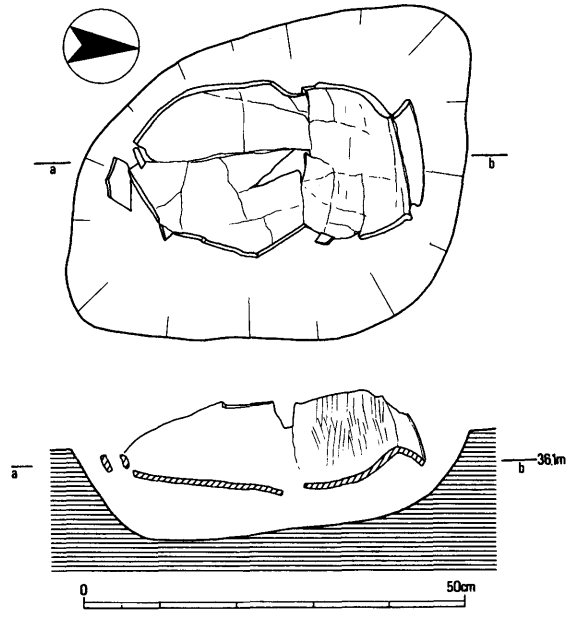


fig.21　土器棺墓ＳＸ28　平面・断面図（１：10）

埋土は黒色系土である。

内部からは、木棺痕跡は確認されなかった。また、副葬品に相当するようなものも全く見られなかった。したがって、土壙墓とは断定できないものの、弥生時代の竪穴住居ＳＨ59を切り込んでいること、そして中世以降の埋土とは明らかに異なること、などから、古墳時代の土壙墓と考えておく。

土器棺墓ＳＸ28（fig.21）　調査区中央付近で検出した遺構である。南北約0.5m、東西約0.4mの小土坑に、土師器長胴甕の単棺による土器棺を、口縁部を北に向けて据えている。墓壙は、土器棺以上に深く掘られており、やや埋め戻して、水平を意識して設置しているようである。

検出時には、土器はすでに半分ほどになっており、土塁や溝ＳＤ２の掘削時にかなり削平を受けているようである。

土器の形態からは、７世紀前葉以降のものと考えられる。

c　奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には、竪穴住居７棟のほか、土坑、及び落ち込みがある。また、いくつかのピットがあり、掘立柱建物の存在も想定できるが、今回は明確にすることはできなかった。

落ち込みＳＺ３　調査区東端部で検出したものである。黒色系土を埋土とする。当初は溝かと考えたが、全体的に緩やかな落ち込みとなっており、人為的な掘削を伴わない自然の落ち込みの可能性が高いと判断した。

この黒色系土の面的な広がりは、今回の調査区ではこの東端部のみであり、この部分を境として遺構のあり方に変化が見られる可能性もあるので、今後の調査で注意したい。

土坑ＳＫ５　調査区東端北部で検出した遺構である。今回の調査区で確認できたのは西側の一部と見られ、大部分は東側の調査区外に及ぶ。埋土は黒色系土である。遺構底面は比較的平坦で、竪穴住居の可能性もある。

竪穴住居ＳＨ10　調査区北端部東寄りで検出した遺構である。南壁と西壁の一部が調査区内に及んでいた程度であるため、規模は不明である。

平面形は方形で、南壁沿いには壁周溝が認められる。今回の調査区内の当該期の建物としては、最も北に位置するものである。

竪穴住居ＳＨ30（fig.22）　調査区東端部中央付近で検出した遺構である。平面長方形で、東西約3.4m、南北約2.6mである。南壁から建物中央にかけて竪穴住居ＳＨ33が重なる。土層の観察からは、ＳＨ33よりも先行する建物と考えられる。

ＳＨ33の重なりのため、南壁については不明であ

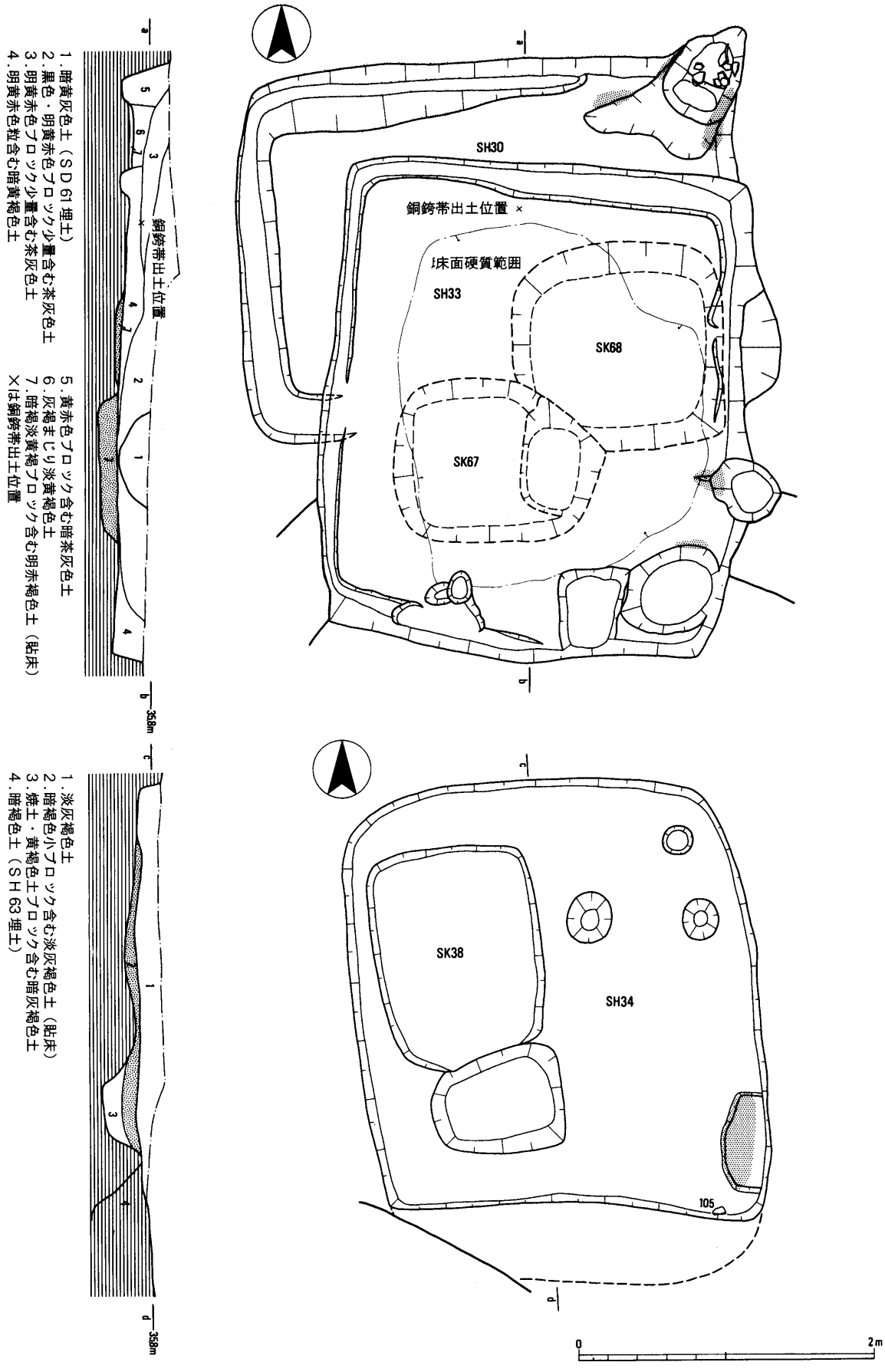


fig.22　竪穴住居ＳＨ30・33・34　平面・断面図

るが、壁周溝は全周するものと考えられる。ただし、北東隅に設置されたカマドには接続させていない。壁周溝建物内部側の肩はかなり緩やかに造られている。主柱穴は確認できなかった。

北東隅にはカマドがある。壁を刳り抜き、底面も若干掘り窪める半地下式の構造で、袖部には若干の盛土が見られる。開口方向は建物の中央を向く。前庭部に相当する部分が浅く窪み、若干の傾斜をもって煙出し部の方向に抜けている。煙出し部の被熱は弱い。カマド内では、薪等を燃焼する部分の底にあたる場所はあまり火を受けておらず、側壁に相当する部分の被熱が激しかった。

床面には全面に貼床がなされている。この貼床を除去すると、南東隅に土坑が確認された（ＳＫ68）。土坑は貼床下からの深さで約0.2mの浅いものである。土坑内埋土は、貼床の土と全く同じであり、建物築造時に掘削され、貼床を行う段階では埋められているという、極めて短期間のものと考えられる。

出土遺物は、カマド内埋土に土師器杯・長胴甕などが出土している。床面上の遺物は、明確にはなかった。

竪穴住居ＳＨ32（fig.23）　調査区東端部中央付近で検出した遺構である。平面隅丸長方形で、東西約3.2m、南北約2.6mである。

壁周溝に相当するものは認められなかった。また、主柱穴に相当するものも認められなかった。

建物東壁南隅にはカマドがある。このカマドは、まず東壁を突き抜けるようにして土坑（fig.23の破線）を掘り、その上に馬蹄形に盛土を行うことによって築造する半地下式のものである。馬蹄形盛土の部分はやはり馬蹄形の被熱部が認められるが、概して弱いものである。なお、この馬蹄形盛土内には、焼土・炭のほか、土器片も含まれていることから、建物構築当初に設置されたものではなく、それが破損した段階で再構築したものと考えることができる。

床面には貼床が全面に施されている。貼床を除去すると、北西隅に小土坑が確認された。機能的にはＳＨ30の土坑と同様と思われる。

出土遺物は、カマドの部材（芯材）として用いられた土師器片を中心に、少量の土師器がある。

竪穴住居ＳＨ33（fig.22）　調査区東端部中央付近で検出した遺構である。平面長方形で、東西約2.9m、南北約3.5mである。北半部には竪穴住居ＳＨ30が重なる。また、南半部には溝ＳＤ61が重なっている。土層の観察からは、ＳＨ30に後出し、ＳＤ61よりも先行する建物と考えられる。

ＳＨ30およびＳＤ61との重なりのため、不明な点が多いが、壁周溝については全周するものと考えられる。ただし、南東隅にある貯蔵穴と推定される小土坑やＳＤ61の下で確認された被熱部分（カマド）には設定されていない。主柱穴に相当するものも確認できなかった。

カマドは、上述のように、ＳＤ61の下で確認できた被熱部分がその一部と想定される。他に被熱部分が見当たらないことから、この建物のカマドの位置は東壁南寄りと見てよい。掘り込みを伴わず、床面上に造られる構造と考えられる。

床面には貼床が全面に施されている。貼床を除去すると、中央やや西寄りに小土坑（ＳＫ67）が確認された。機能的にはＳＨ30の土坑と同様と思われる。

出土遺物は土師器類が中心であるが、特筆されるには銅銙帯の出土である。銅銙帯は建物北壁近くの埋土中、第４層上面から出土している（fig.22）。土層の状況からは、ＳＨ33の廃絶後、建物の崩壊がかなり進んだ段階での混入と考えるのが妥当である。しかし、なぜ銅銙帯のようなものが、竪穴住居から出土するのかは問題として残る。

竪穴住居ＳＨ34（fig.22）　調査区東端部中央付近で検出した遺構である。平面隅丸長方形で、東西約2.8m、南北約3.6mである。南端部には溝ＳＤ61が重なる。また、この遺構の下には弥生時代の竪穴住居ＳＨ63がある。土層の観察からは、ＳＨ63に後出し、ＳＤ61よりも先行する建物である。

壁周溝は認められなかった。また、内部に若干のピットはあるものの、主柱穴に相当するものも確認できなかった。

建物東壁南寄りに焼土塊が確認されたため、それがカマドに相当するものと考えられる。床面に掘り込みを伴わない構造と考えられる。かなり崩壊が進んでおり、形態等は不明である。

床面には貼床が全面に施されている。貼床を除去すると、西半部に土坑が２基確認された（ＳＫ38ほ

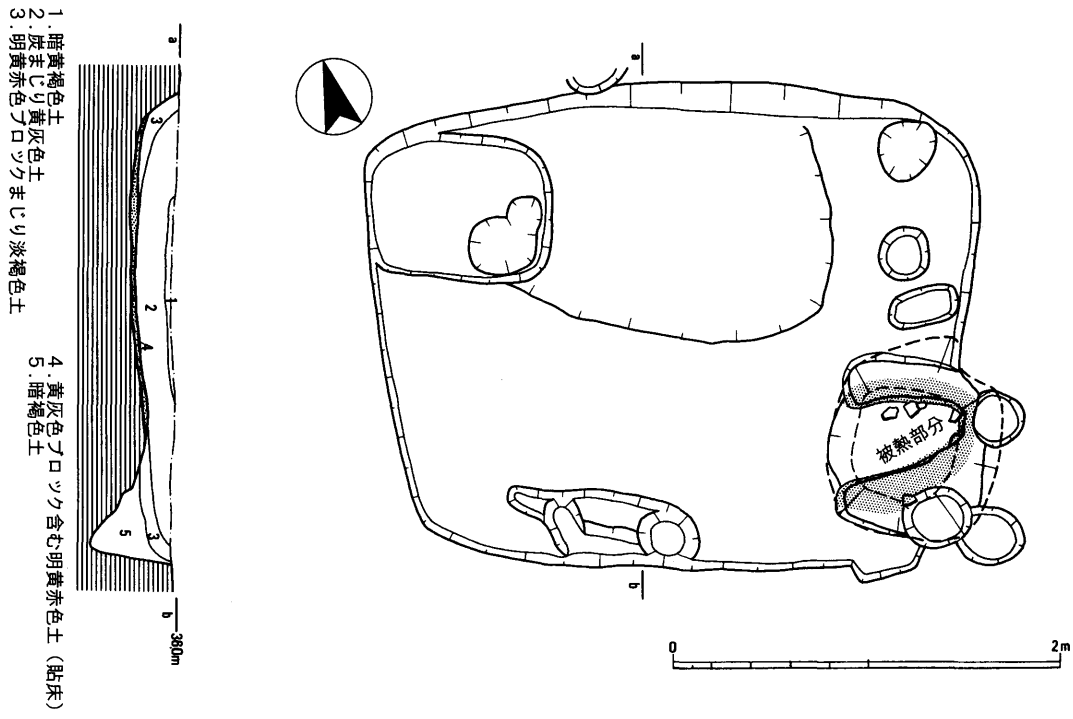


fig.23　竪穴住居ＳＨ32　平面・断面図（１：40）

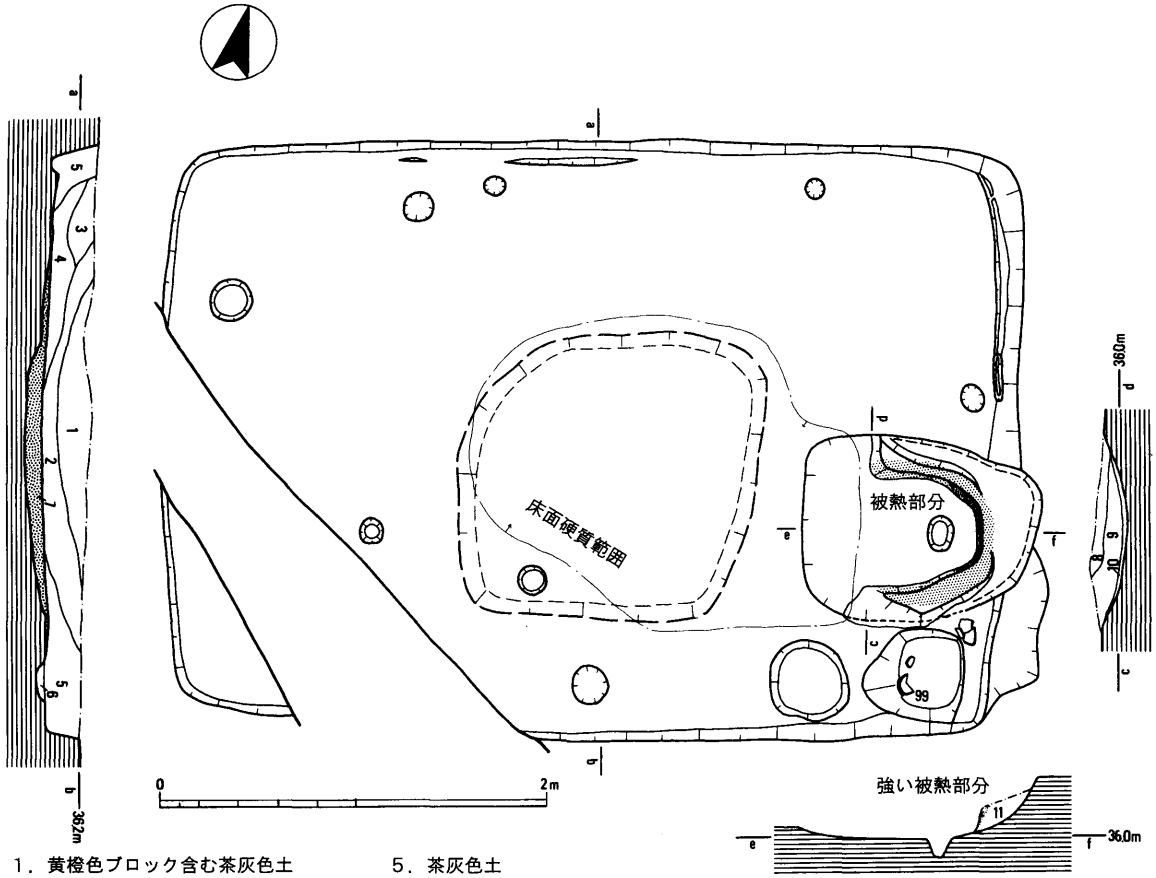


fig.24　竪穴住居ＳＨ35　平面・断面図（１：40）

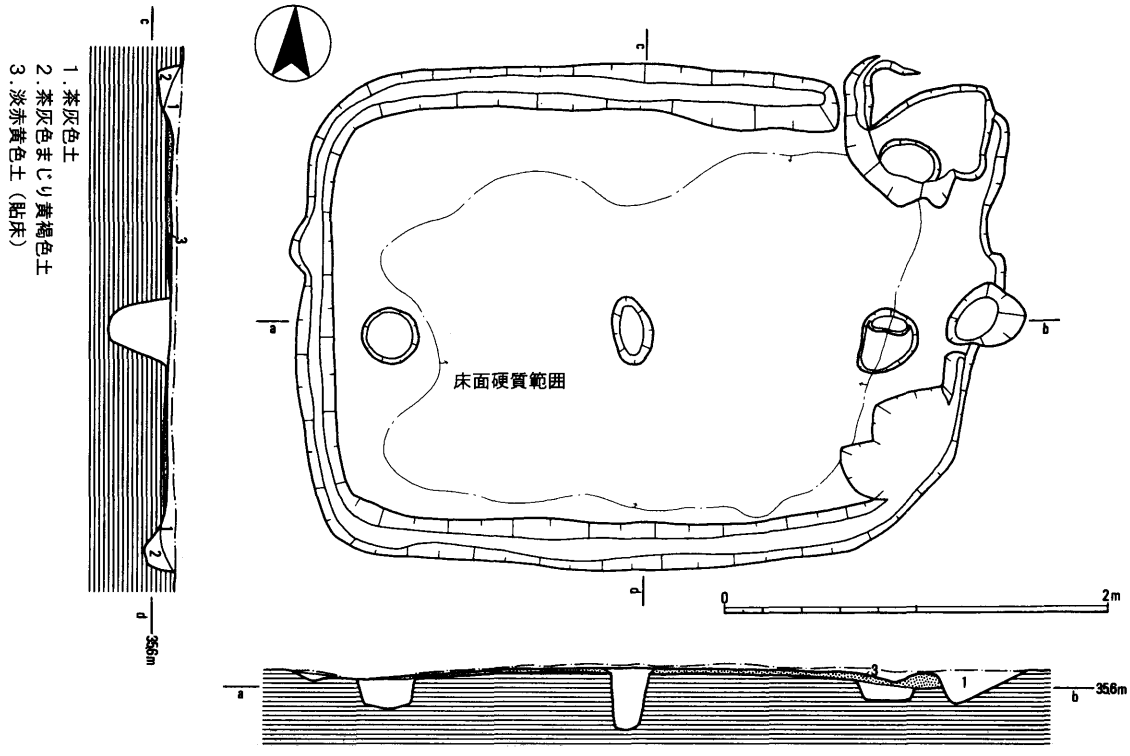


fig.25　竪穴住居ＳＨ37　平面・断面図（１：40）

か)。機能的にはＳＨ30等の土坑と同様と思われる。

出土遺物は、土師器類が若干ある程度である。

竪穴住居ＳＨ35（fig.24）　調査区のほぼ中央で検出した遺構である。平面長方形で、東西約4.5m、南北約3.2mである。南端部には溝ＳＤ23によって破壊されている。

壁周溝は、部分的に認められるもので、全周しない。また、床面にはいくつかのピットが確認されたが、主柱穴に相当するものは認められなかった。

カマドは東壁南寄りに設置されている。ＳＨ32と同様、東壁を突き抜けるように土坑を掘り、その中に馬蹄形に盛土を行うことによって構築する、半地下式のものである。被熱は、特に奥壁側が強く、側壁は弱い。また、底部の被熱は認められなかったが、支柱石痕と考えられる小ピットを中央で検出した。前庭部には炭・灰層が堆積していた。なお、カマドの基礎に用いられている盛土には、焼土・炭のほか土器片も含まれており、確認されたカマドが当初のものではないことを物語っている。

カマドの南、建物南東隅に当たる部分には貯蔵穴と考えられる小土坑がある。底からは、割れて重ねられた土師器杯（99）が１個体分出土している。

床面には貼床が全面に施されている。貼床を除去すると、中央に土坑が確認された。機能的にはＳＨ30等の土坑と同様と思われる。

出土遺物は、貯蔵穴から出土した土師器杯以外は、カマドの構築部材として用いられていたものを中心に少量である。

竪穴住居ＳＨ37（fig.25）　調査区東部南寄りで検出した遺構である。平面隅丸長方形で、東西約3.6m、南北約2.6mである。２号墳の東脇に当たる。また、かなりの削平を受けており、検出時に既に壁周溝の巡りと貼床が確認されていた。

壁周溝は、北東隅にあるカマドに至る手前で止められているものの、原則的に全周させている。

主柱穴に相当するものは、中軸に沿って３カ所確認できた。中央のものは深く、両端の２カ所は浅い。

カマドは、北壁の北東隅に設置されている。床面を若干掘り込んで盛土を行う、半地下式のものである。後世の破壊が著しく、基礎の部分が確認された程度である。

床面には貼床が全面に施されている。貼床の下からは、他の当該期の建物に見られたような土坑は確認できなかった。

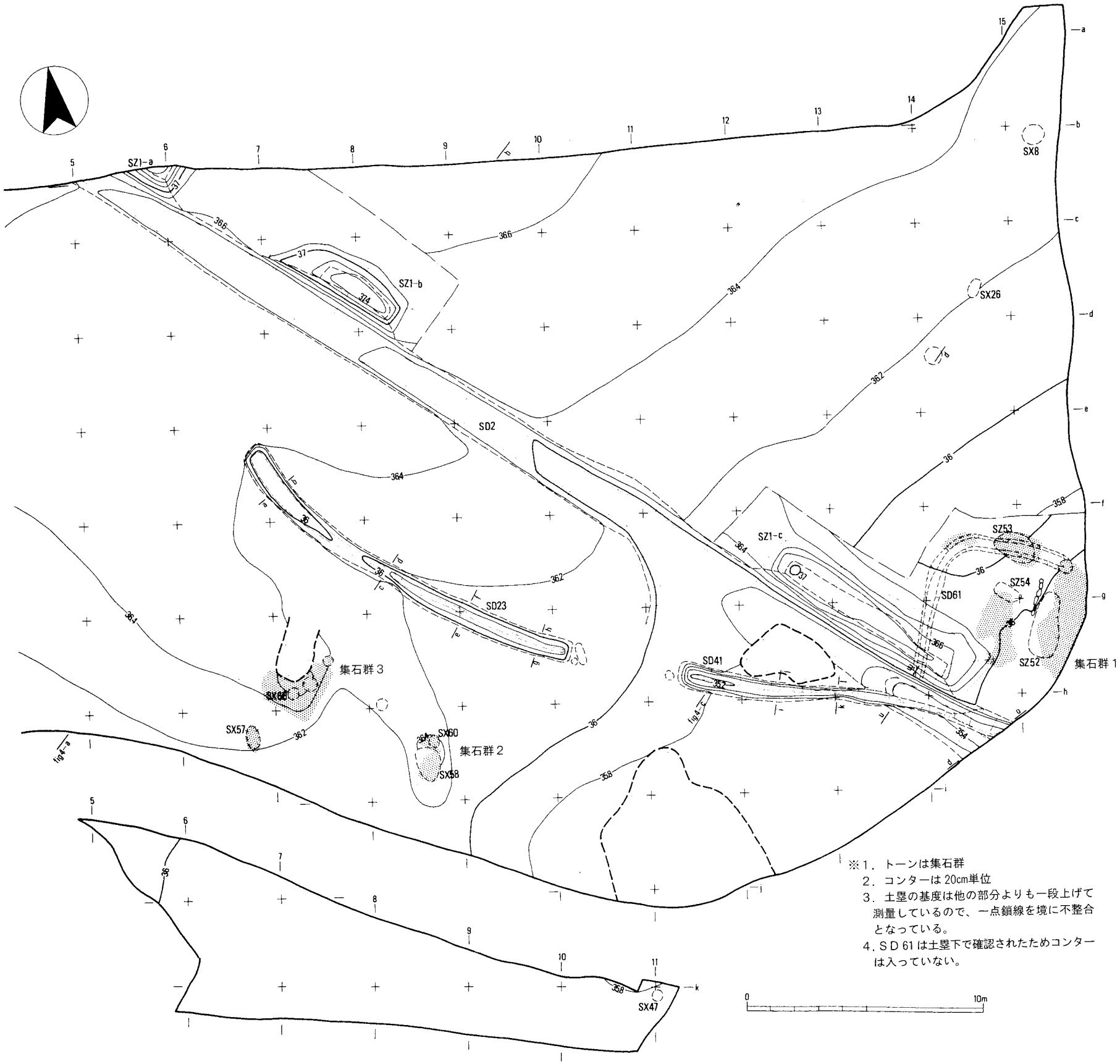


fig.26　中～近世遺溝平面図（1：200）

出土遺物は、カマド内から確認された土師器類を中心に少量である。

d　中～近世の遺構

今回の調査の最大の関心事は、調査前からその存在が認識されていた土塁（ＳＺ１）と溝（ＳＤ２）と、天花寺城跡との関連であった。調査の結果、これ以外にも、中世の溝や中世墓群が確認されたとともに、ＳＺ１とＳＤ２については、近世以降の造営の可能性が高くなった。

天花寺城関連遺構

確実に天花寺城関連遺構として認識できるのは、溝とそれに付随すると見られるピットである。

溝ＳＤ23・41（fig.26･27）　調査区の中央を東西に横断する遺構である。ＳＤ23は総延長約16.8m、ＳＤ41は確認長約14.4mで調査区外へと延びる。両者は別個の遺構番号を付けているが、一連のもので、両者の間が入口等の施設になるものと考えられる。

ＳＤ23は、東半部は断面Ｖ字形、西半部は断面Ｕ字形を呈する。東端部では検出面から約0.4mであるが、中央部で0.2mほどになり、西端部では0.3mほどと、やや深くなる。東半部は直線的に延びるが、ＳＨ35と重なるf8グリット付近から西にかけては南側に向かって緩い円弧を描いている。埋土は小ブロックを含む淡黄灰～暗茶灰色系土で、上下２層に分かれる。このうち、上層では礫の混入が多く見られた。礫群に混じって、五輪塔の破片も含まれている。

ＳＤ41は、全体的に断面Ｖ字形を呈している。深さはほぼ均一である。調査区東壁の土層図で見ると、当初の掘り込みは0.6mほどはあった模様である。g13グリット付近からＳＤ２と重なり合うのでよく判らない部分もあるが、この付近以西が直線的なのに対し、この付近以東はＳＤ23とは逆に北側に向かって緩い円弧を描く模様である。埋土の状況はＳＤ23と同様で、上層にはやはり礫の混入が目立つ。集石群１付近では、五輪塔の破片も転落している状況が観察される。

ＳＤ23とＳＤ41との間は、両者を一連のものと把握できることから、何らかの入口に相当する部分と考えることができる。この部分では、それぞれの溝端寄りに、検出面からの深さで0.5m内外の深いピットが穿たれている。これと対をなすようなピットは検出できなかったものの、入口に設置された木戸状遺構を構成する一部であると考えられる。

出土遺物は、ＳＤ23・41ともに少なく、明確でない。わずかに、ＳＤ41から出土した土師器皿から、この溝の所属時期の一端が15世紀後半に求められるのみである。

なお、ＳＤ41については、調査区の南に隣接する堀切（全長約50m、幅約13m、深さ約５m）とほぼ並行の関係になることを付け加えておく。

溝ＳＤ61（fig.28）　ＳＤ41の北側で検出した遺構である。土塁ＳＺ１－ｃの除去後に検出した。確認された形状はＬ字状で、東端は途切れ、南端はＳＤ２によって破壊されている。したがって、ＳＤ41と接続していたのかどうかは判らないが、ＳＤ41に直行することは重要である。この溝の上層埋土に、後述する集石群１内の落ち込みＳＺ53が相当する。断面形はＵ字に近いＶ字形である。

集石群１に認められる列石とも直行・平行の関係であり、集石群１の区画溝の可能性もある。いずれにしても、集石群１の形成当初は、天花寺城関連遺構とさほどの時間的隔たりはなく、一連のものとして認識するのが最も正確であろう。

出土遺物は細片のみで、時期を示すようなものは見出せなかった。

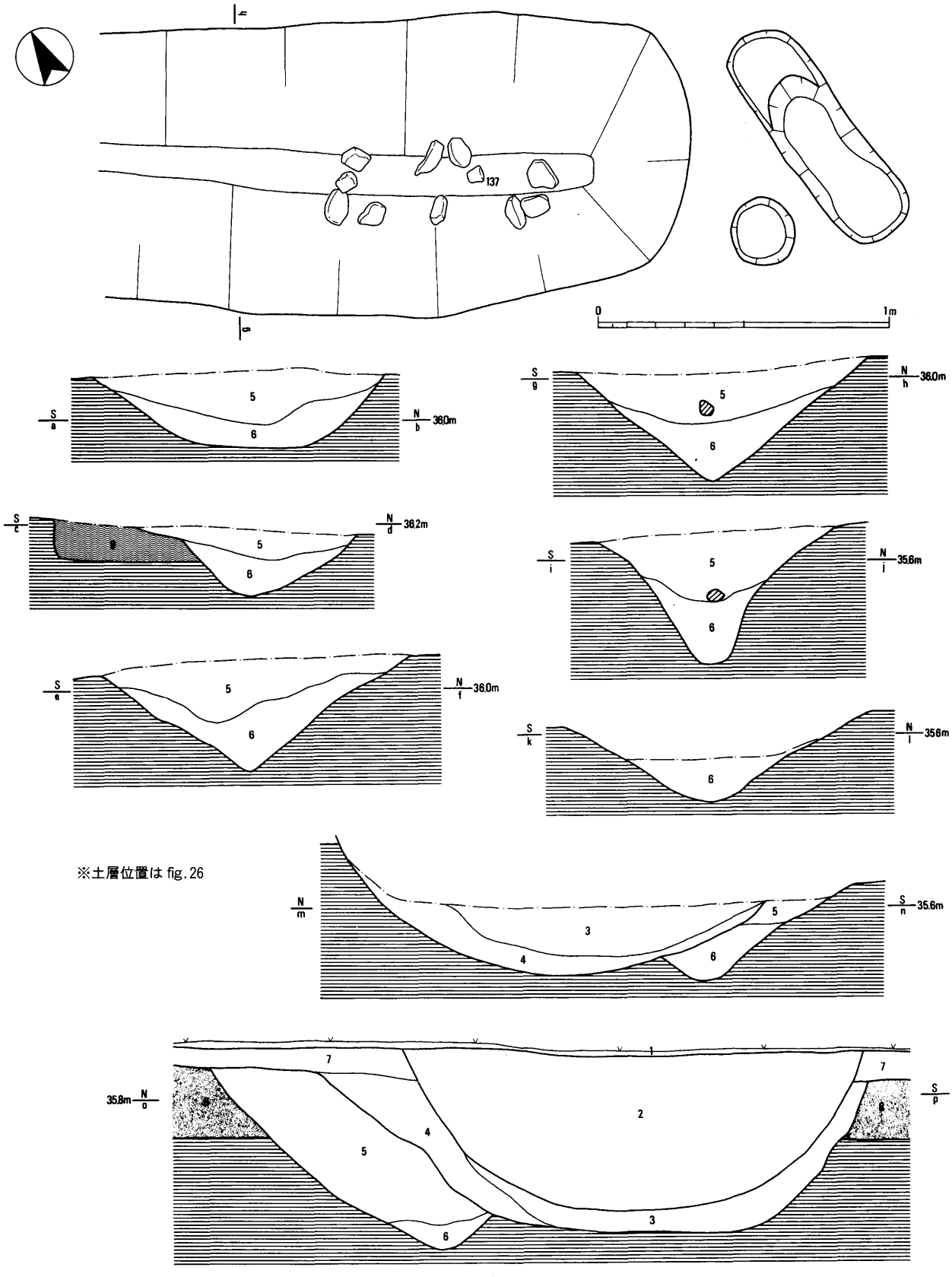
中～近世墓群

今回の調査区内には、中世を中心とした集石群が３カ所と、単独の墓が数基認められる。なお、このうちのいくつかは近世に造営されたものも含まれている模様である。

中世墓のいくつかは、天花寺城の機能時期と重なるものも認められる。したがって、中世墓群と天花寺城とは、ある意味で一体のものと見なすことができる状態である。

なお、今回の調査で確認された墓は、全て別の場所で火葬され、人骨のみを当地へ埋葬したものである。ここで呼称する「火葬墓」とは、このような墓を指していることを明記しておく。

火葬墓ＳＸ８　調査区東部北端で検出した遺構



1. 表土
2. 礫・近世陶器片含む暗灰褐色土
3. 灰褐色まじり黄灰色土
4. 黄灰色土
5. 灰褐小ブロック・礫含む淡黄灰色土
6. 赤色小ブロック含む暗茶灰色土
7. 暗黄灰色土
8. 暗褐色土
9. 暗褐色土（SH35 埋土）

fig.27　溝ＳＤ23礫・五輪塔出土状況及びＳＤ２・23・41各部土層（１：20）

である。直径約1.0mの円形で、検出面からの深さは約0.2mである。土壙内には、炭とともに多くの火葬人骨が埋納されていた。

土壙内からは、火葬人骨に混じって土師器小皿が出土しているが、完形ではない。土器の形態からは、近世墓と考えられる。

火葬墓ＳＸ26（fig.30）　調査区の東部北寄りで検出した遺構である。平面隅丸長方形で、東西約0.5m、南北約0.8mである。土壙内に自然石を２個配しており、その周辺部に特に多くの炭・焼土・火葬人骨が見られた。炭は、断面図（fig.30）に表現したように、土壙の底面ではなく、若干上方の一定の高さ以上の場所で確認されている。炭や焼土と共に火葬人骨を入れた袋を石の上に置いたのであろうか。

出土遺物は、上記以外は全くない。

火葬墓ＳＸ47（fig.30）　調査区南端東端で検出した遺構である。２号墳盛土を利用して造営されている模様である。直径約0.3mの小土壙に、土師器鍋を蔵骨器として埋納している。蔵骨器内には少量の炭とともに、多量の火葬人骨が見られた。また、蔵骨器の体部下半には、水抜きと思われる小孔が１カ所穿たれている。

土器の形態から、14世紀後半頃に所属時期が求められる。

集石墓ＳＸ57（fig.30）　調査区中央やや西寄りで検出した遺構である。集石群３の南側で、３号墳の突出部東側にあたり、この遺構によって３号墳の一部が破壊されている状況となる。

上部に拳大程度の円礫を中心とした集石があり、下部には人頭大ほどの礫を集石している。人骨・遺物等は認められなかったが、中世墓に含めてよかろう。

集石群１と関連遺構（fig.28･29）　土塁ＳＺ１ーｃの北側で確認した遺構である。この部分は、調査前測量時点から、土塁に接続するように北側へ突出した形状で認識されていた。

表土直下から拳大以下の円礫を用いた集石が認められた。それは、落ち込みＳＺ54付近の比較的高い部分（ａ群）と、落ち込みＳＺ52付近の低い部分（ｂ群）、落ち込みＳＺ53付近の一群（ｃ群）とに大きく区分される。ａ・ｂ群間には、人工的に並べられた石列が存在していた。なお、小礫については、礫石経の可能性も考えたため、ほとんどのものを水洗いして観察したが、墨書は一切認められなかった。

ａ群は、拳大以下の小礫を中心に構成されている。南部は大木の存在によって破壊されている。五輪塔の破片や、蔵骨器の一部かと思われる土器、さらに16世紀代ではないかと思われる土師器小皿の小片が出土している。下部に明確な墓壙はなかった。

ｂ群では、拳大以上人頭大以下の礫を用いて造成されている。比較的良好なまとまりのように思われたが、蔵骨器や明確な墓壙は確認されなかった。15世紀前葉頃かと考えられる土師器小皿のほか、五輪塔の破片が多数出土した。

ｃ群は、礫群のまとまりとしては観察されるものの、溝ＳＤ61の項でも指摘したように、ＳＤ61への転落として認識されるものである。落ち込みＳＺ53も、ＳＤ61の上層埋土として認識されるべきものである。

これらの集石群のほか、ＳＸ69がある。この遺構はＳＤ61の埋没後に設置されているもので、おそらく墓の一種と考えられるものである。

さて、集石群１と土塁ＳＺ１ーｃとの関係を土層図（fig.29）で確認しておく。この土層図を見ると、奈良時代以前の遺構が埋没した後にＳＤ61が掘削され、その後、土塁や集石群１の盛土がなされていることが確認された。このうち、ＳＤ61に取り囲まれた部分は明らかに中世の段階と認識され、その上層埋土中に五輪塔が混入するため、ＳＤ61の機能は、五輪塔が実際に林立していた時期あたりにまで求めることは可能である。ただし、土塁上に施される盛土（土層１）にａ群を中心とした礫群が認められ、ＳＸ69も原則的にはこの層の上から掘削されているものである。

このように見ると、ＳＤ61と石列とに囲まれた部分が中世の段階で墓として利用されていたとしても、その後の土塁、あるいは盛土の新たな造作に伴い、近世の段階でも再度墓空間として利用されていることが認識できる。出土遺物中にも、中世と近世のものが混在する理由も、その辺りに求めることができるのではなかろうか。

集石群２と関連遺構（fig.30）　調査区中央やや

南寄りで検出した遺構である。６号墳の上部に構築されている。集石は表土直下から認められた。

集石は小規模であるが、ＳＸ58とＳＸ60の上部２カ所に区分できる。集石そのものに企画性は見出し難い。

ＳＸ58は浅い土壙であるが、15世紀中～後葉頃の土師器皿と、少量の火葬人骨が出土している。ＳＸ60には、多量の火葬人骨が埋納されていた。

集石群３と関連遺構（fig.31）　調査区中央やや西寄りで検出した遺構である。３号墳主墳部南東隅を利用して造営されている。やはり、表土直下から集石が確認された。

北西部は後世の攪乱を受けているが、南から東にかけて、人頭大程度の礫を用いた直線的な列石が認められた。この列石内部に集石の集中が見られるが、これの規則性は見出し難い。

fig.28　集石群１　平面図（１：40）

列石内部を中心に精査を繰り返したが、これに直接伴うような蔵骨器等は認められず、わずかに、その一部と思われる陶器壺片が、北西側の攪乱部から出土したに止まる。

付随すると考えられる墓壙は２基確認した。そのうちＳＸ66からは多量の火葬人骨が認められた。

天花寺城廃絶前後の遺構

調査前の踏査時点からその存在が認識されていた土塁ＳＺ１と溝ＳＤ２については、前述の中世遺構との関連を総合すると、城の廃絶後に造営されたものである可能性が高い。ただし、後述するように、16世紀代のものである可能性までは否定できない。

土塁ＳＺ１と溝ＳＤ２（fig.32）　天花寺城廃絶後に造営された遺構として、土塁ＳＺ１と、それに付随する溝ＳＤ２がある。調査区の中央やや北寄りを東西に縦断しているもので、調査前から確認されていたものである。

土塁ＳＺ１は、調査区内では３カ所に別れ、西からａ～ｃと呼称している。ＳＺ１－ａは調査区外にさらに延長する。また、溝ＳＤ２も東西それぞれの調査区外に続きが認められる。

土塁と溝の土層は、２カ所で確認を行った。これを見ると、旧表土層に相当する黄褐色系土を切り込むようにして溝ＳＤ２が掘削され、その掘削土を順次積み上げることによって土塁を構築している状況が観察される。土塁は、ＳＤ２肩部分から盛りはじめ、一定の高さが揃った段階でさらに上部へと積み上げている。盛土そのものの叩き締めはあまり顕著ではない。このような作業の結果、土塁は、旧地表面からで約0.7m、溝底からの比高で約1.3mとなっている。

この旧地表面との整合を考えた場合、ＳＤ２の南には旧地表面をなす層がなく、0.2mほど土塁側よりも低くなっている。前述のように、古墳時代のＳＸ28に用いられていた土器棺の上半部が欠損していることからも、いずれかの時点での削平を考慮せねばならない。ＳＤ２の場合、近年まで地境として利用されていたため、その削平時期については古墳時代以降、最近までの時期幅で考える必要がある。しかし、土塁の構築に用いられた盛土の量としては、永

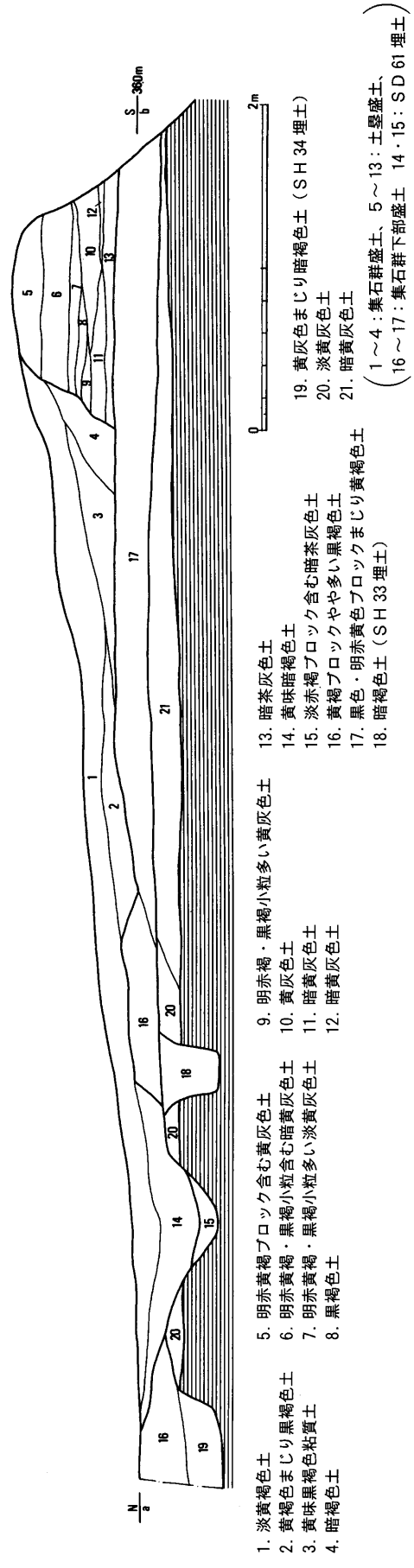


fig.29　集石群１関係　土層図（土層位置は fig.28）

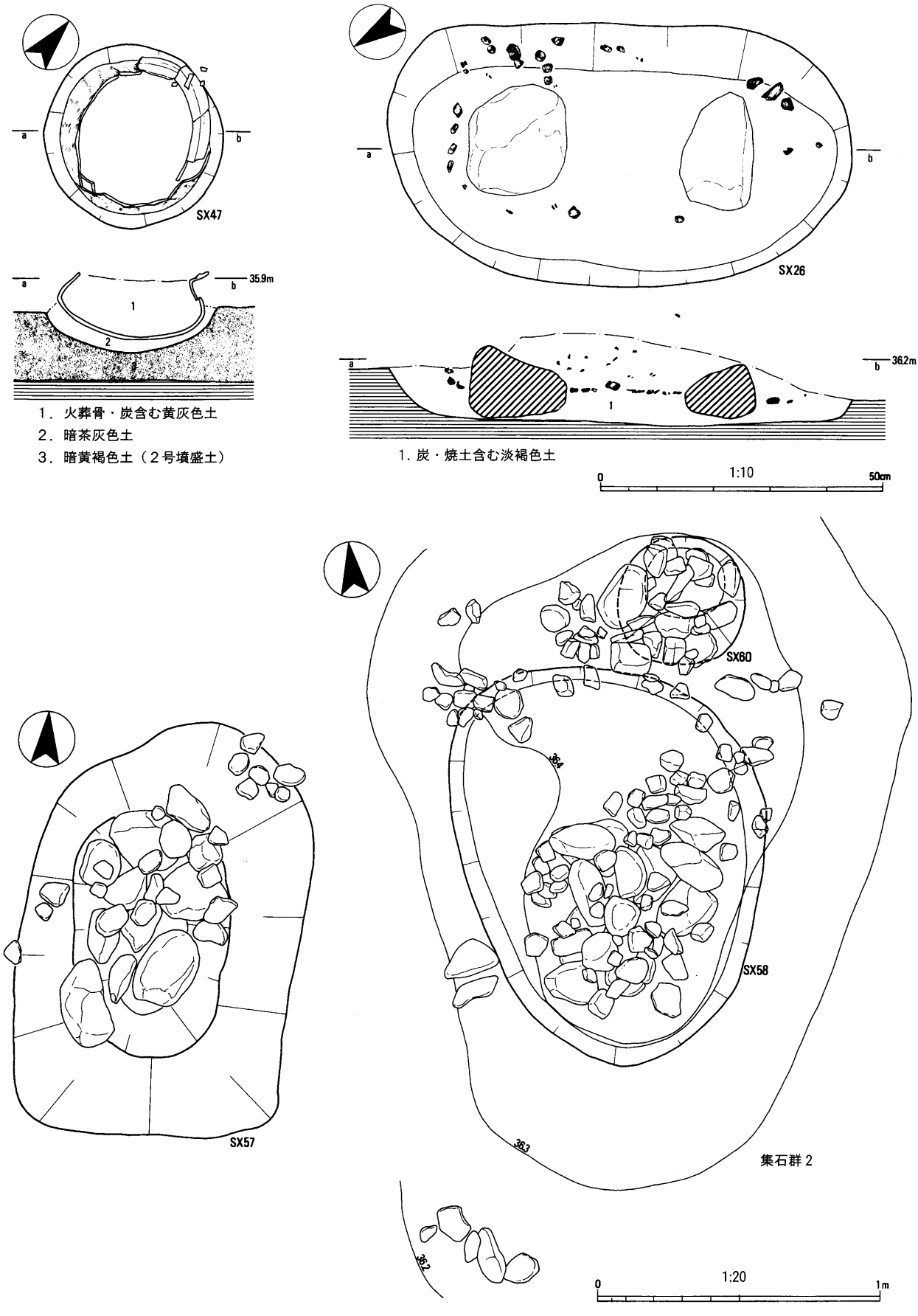


fig.30　中世墓関係実測図（上段は1：10，下段は1：20）

fig.31　集石群３　平面図（１：20）

年の風雪による流出を考慮に入れても、旧表土層がＳＤ２以南にも存在していたにしては少な過ぎる。したがって、この土塁と溝が構築される以前にはこのような削平がなされていたと考えておくのが妥当であろう。

ＳＺ１の盛土内からは、弥生土器や奈良時代の土師器などが含まれていたものの、中世以降の遺物はなかった。ＳＤ２から出土した土器は、いくらかの混入遺物と考えられるものを除くと、江戸時代頃の国産陶磁器しかない。したがって、溝の機能時期としては近世にその一端を求めることができる。ただし、溝は「溝さらえ」などの行為を伴うものであり、単純な断定はできない。

今回の調査結果で言えるのは、①溝ＳＤ41の上に土塁があることから、15世紀後半以降であること、②集石群１を区画する溝ＳＤ61の上に土塁があることから、それ以降であること、の２点のみである。

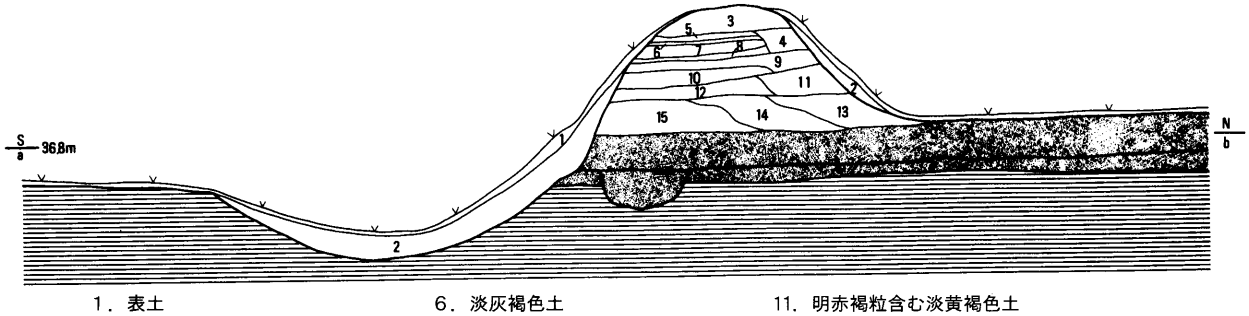
e　時期不明の遺構

時期不明の遺構は、ＳＺ１以北に認められる多数のピットのほか、土坑等がある。

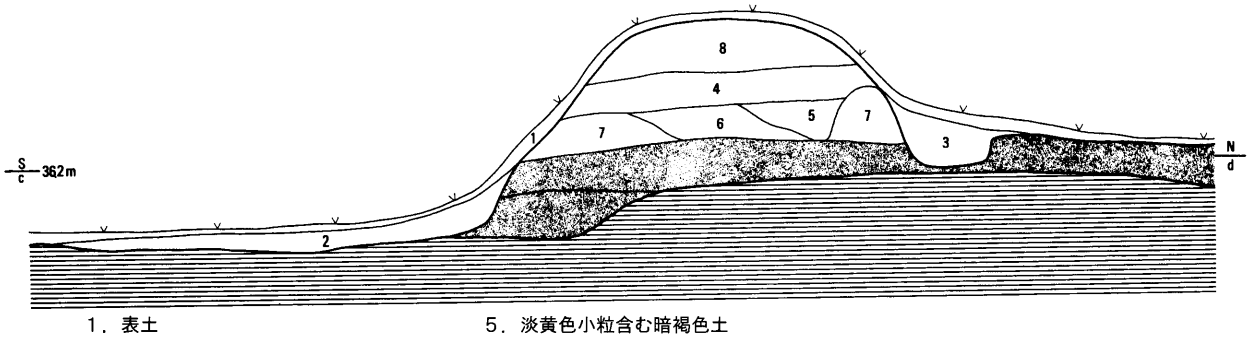
土坑ＳＫ50（fig.33）　調査区南端で検出した遺

構である。一応は土坑と認識するが、別の性格であることも充分考えられる。倒木痕とも考えたが、埋土が安定しており、何らかの目的で人為的に掘削されたものと考えておく。埋土中には少量の土器片を含む程度で時期は判らない。

その他の遺構　弥生時代の竪穴住居ＳＨ43の西にある土坑も、ＳＫ50と同様なものである。この遺構は、ＳＨ43に先行することが切り合い関係から窺うことができる。あるいは、ＳＫ50とは一連のものである可能性も考えられる。



1．表土
2．淡黄灰色土（ＳＤ２埋土）
3．明赤褐色土
4．褐色まじり黄灰色土
5．明赤褐ブロックまじり淡褐色土
6．淡灰褐色土
7．灰褐小粒まじり淡赤褐色土
8．淡赤褐色粒まじり淡灰褐色土
9．明赤褐ブロック含む淡黄褐色土
10．黒褐・明赤褐小粒まじり黄褐色土
11．明赤褐粒含む淡黄褐色土
12．明赤褐小ブロック含む黄褐色土
13．暗黄灰色土
14．明赤褐小ブロック含む暗黄褐色土
15．黄褐小粒含む暗褐色土

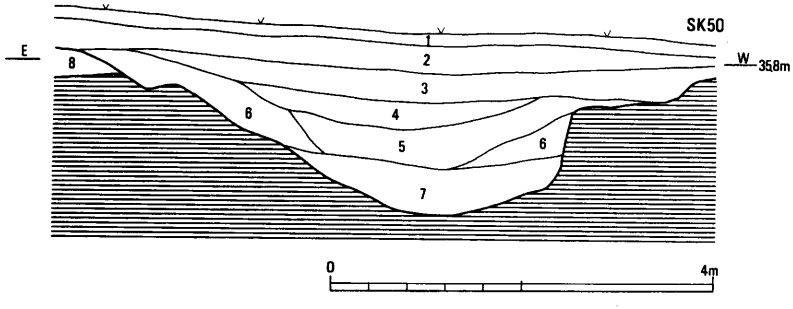


1．表土
2．淡黄灰色土（ＳＤ２埋土）
3．淡黄・明黄赤色ブロック含む茶灰色土
4．黄灰色ブロック含む暗褐色土
5．淡黄色小粒含む暗褐色土
6．暗褐小ブロック含む暗黄褐色土
7．淡黄灰色ブロック含む淡褐色土

0　2m

＝土塁構築以前に形成された堆積土

fig.32　土塁ＳＺ１及び溝ＳＤ２　土層断面図（１：40）位置はfig.３と対応



ＳＫ50土層
1．表土
2．礫少量含む淡黄褐色砂質土
3．暗黄褐色土
4．暗褐色土
5．黄色ブロック礫含む暗黄灰色土
6．暗黄褐色土
7．暗灰褐色土
8．淡茶灰色土

fig.33　土坑ＳＫ50　土層断面図（１：40）

遺溝番号	性　格	時　期	小地区・現場記号	特　　徴・形　　状・計測数値など
ＳＺ１	土塁	近世	ｂ５～ｇ１４	盛土の高さ約0.7m、溝ＳＤ２底からの比高約1.3m
ＳＤ２	土塁外溝	近世	ｂ５～ｈ１４	幅約2.0m
ＳＺ３	落ち込み	奈良	ｂ１５～	人為的な掘削を伴わない
ＳＺ４	落ち込み		ａ～ｂ１５	
ＳＫ５	土坑	奈良	ａ１５	
ＳＫ６	土坑		ａ１４	
ＳＫ７	土坑	弥生後期	ｃ１４	
ＳＸ８	火葬墓	近世	ｂ１５	円形、火葬骨片多量
ＳＺ９	落ち込み		ｃ１４－ＳＫ９	
ＳＨ１０	竪穴住居	奈良	ｂ１３	方形、壁周溝
ＳＨ１１	竪穴住居	弥生後期	ｂ１２	長方形、東西約4.9m、南北約4.2m（推定）、貯蔵穴、炉、壁周溝、貼床
ＳＫ１２	土坑	弥生後期	ｃ１３	
ＳＨ１４	竪穴住居	弥生後期	ｄ１４	正方形　ＳＨ３６と重複、東西約3.8m、南北約3.6m、貯蔵穴、炉、貼床
ＳＫ１５	小土坑		ｂ１３	
ＳＨ１６	竪穴住居	弥生後期？	ｄ１５	方形、石鏃
ＳＫ１７	土坑	弥生後期	ｃ１１	ＳＨ１１と直交の関係
ＳＫ１８	土坑	近世	ｃ１１	
ＳＨ１９	竪穴住居	弥生後期	ｂ９	方形、貯蔵穴、壁周溝、貼床
ＳＫ２０	溝状土坑	弥生後期	ｂ８	ＳＨ１９と並行の関係
ＳＫ２１	溝状土坑	弥生後期	ｃ８	ＳＨ１９と並行の関係
ＳＨ２２	竪穴住居	弥生後期	ｂ７	方形、東西約5.2m、南北約5.0m（推定）、建替有、貯蔵穴、炉、壁周溝、貼床
ＳＤ２３	溝	中世後期	ｅ７～	断面Ｖ字形、五輪塔片含む、ＳＤ４１と一連
ＳＸ２４	３号墳	古墳初頭？	ｅ６～	主墳部は南北約7.0m、東西約8.9m、全長約9.5m、前方後方形
ＳＫ２５	土坑	弥生？	ｃ６	長方形
ＳＸ２６	火葬墓	中～近世	ｃ１４	楕円形
ＳＫ２７	倒木痕	弥生中期	ｅ１３	弥生中期前葉～中葉の土器含む
ＳＸ２８	土器棺墓	奈良	ｆ１０	土師器長胴甕の単棺による
ＳＸ２９	１号墳	飛鳥前葉	ｅ１２	正方形、東西約5.6m、埋葬施設に刀子を副葬、須恵器
ＳＨ３０	竪穴住居	奈良	ｆ１４	長方形、東西約3.4m、南北約2.6m、カマド、壁周溝、貼床下に土坑ＳＫ６８
ＳＫ３１	落ち込み	弥生？	ｅ１１	不定形
ＳＨ３２	竪穴住居	奈良	ｆ１３	隅丸長方形、東西約3.2m、南北約2.6m、カマド、貼床下に土坑
ＳＨ３３	竪穴住居	奈良	ｆ１４	長方形、東西約2.9m、南北約3.5m、カマド、貼床下に土坑ＳＫ６７、壁周溝、銅銙帯
ＳＨ３４	竪穴住居	奈良	ｅ１４	隅丸長方形、東西約2.8m、南北約3.6m、カマド、貼床下に土坑ＳＫ３８
ＳＨ３５	竪穴住居	奈良初期	ｆ８	長方形、東西約4.5m、南北約3.2m、カマド、貯蔵穴、壁周溝、貼床下に土坑
ＳＨ３６	竪穴住居	弥生後期	ｄ１４	方形？
ＳＨ３７	竪穴住居	奈良	ｈ１２	隅丸長方形、東西約3.6m、南北約2.6m、主柱穴３本、カマド、壁周溝

tab.1　**遺溝一覧表(1)**

遺溝番号	性　格	時　期	小地区・現場記号	特　　徴・形　　状・計測数値など
ＳＫ３８	土坑	奈良	ｅ１５	竪穴住居ＳＨ３４の貼床下から検出
ＳＸ３９	２号墳	古墳中期	ｈ１２～	方墳、東西約10.8m、南北約10.6m、
ＳＨ４０	竪穴住居	弥生後期？	ｉ１０	長方形、東西約3.5m、南北約2.8m、炉、壁周溝
ＳＤ４１	溝	中世後期	ｇ１１～	断面Ｖ字形、ＳＤ２３と一連、調査区東端でＳＤ２に切られる
ＳＺ４２	落ち込み		ｉ１３	チャート片
ＳＨ４３	竪穴住居	弥生後期	ｊ７	方形、東西約5.3m、南北約5.1m、貯蔵穴、壁周溝、建替有
ＳＤ４４	溝		ｆ～ｇ９	
ＳＨ４５	竪穴住居	弥生後期	ｇ～ｈ３～４	長方形、東西約5.2m、炉、壁周溝、建替有
ＳＸ４６	４号墳	古墳初頭？	ｆ～ｈ１～２	方墳？南北６ｍ以上
ＳＫ４７	中世墓	中世後期	ｋ１０～１１	ピット状の土坑に火葬骨を多量に入れた土師器鍋を埋納
ＳＸ４８	５号墳	古墳	ｅ～ｆ２～４	円墳直径約6.5m、標高の高い北側にのみ周溝残る
ＳＺ４９	落ち込み	弥生後期	ｆ９－ＳＨ４９	竪穴住居の可能性もある
ＳＫ５０	土坑		ｋ９	不定形
ＳＫ５１	６号墳	古墳	ｈ８	６号墳埋葬施設、割竹形木棺か？遺物なし
ＳＺ５２	落ち込み	中～近世	ｇ１５	集石群１内の盛土単位
ＳＺ５３	落ち込み	中～近世	ｆ１５	集石群１内、ＳＤ６１の上層埋土
ＳＺ５４	落ち込み	中～近世	ｆ１４	集石群１内の盛土単位
ＳＫ５５	土坑		ｋ６	断面Ｕ字形
ＳＤ５６	６号墳周溝	古墳	ｈ８	円墳、直径約6.6m
ＳＸ５７	集石墓	中世	ｈ６	平面楕円形
ＳＸ５８	中世墓	中世後期	ｈ８	集石群２下部、土器片少量、火葬骨
ＳＨ５９	竪穴住居	弥生後期	ｆ１１～１２	方形、東西約4.6m、南北約4.5m、主柱穴４本、貯蔵穴、炉
ＳＸ６０	火葬墓	中世	ｈ８	集石群２下部、火葬骨
ＳＤ６１	溝	中世後期	ｅ～ｆ１４～１５	Ｌ字状、ＳＤ４１と直交・平行の関係
ＳＤ６２	古墳周溝？	古墳？	ｇ１５	古墳の可能性有
ＳＨ６３	竪穴住居	弥生後期	ｆ１５	方形、南北約3.9m、主柱穴１か所（２本柱か？）、炉、壁周溝、貼床、床面上に良好な一括資料
ＳＸ６４	土壙墓	飛鳥前葉	ｇ１３	南半部はＳＤ２による破壊、須恵器杯身、１号墳埋葬施設と類似
ＳＸ６５	土壙墓		ｆ１２	土壙墓と思われる
ＳＸ６６	火葬墓	中世	ｇ７	集石群３下部、ピット状土坑内に火葬骨多量
ＳＫ６７	土坑	奈良	ｆ１４	ＳＨ３３の貼床下で確認、ＳＨ３３に伴う
ＳＫ６８	土坑	奈良	ｆ１４	ＳＨ３０の貼床下で確認、ＳＨ３０に伴う
ＳＸ６９	土壙墓	近世？	ｆ１５	集石群１下部、ＳＤ６１の埋没後に掘削
集石群１	集石群	中～近世	ｆ１４～ｇ１５	土塁ＳＺ１の北裾、五輪塔多数、溝ＳＤ６１による区画を利用
集石群２	集石群	中世後期	ｈ８	下部に土坑（ＳＸ５８・６０）有
集石群３	集石群	中世後期	ｇ７	３号墳を利用、方形区画、下部に土坑（ＳＸ６６）有

tab.2　遺溝一覧表(2)

Ⅳ　調査の成果　～出土遺物～

出土した遺物は、整理箱に換算して約59箱である。縄文時代から近世までのものがある。以下、出土遺物の概略を記述する。個々の遺物の詳細については出土遺物観察表（tab.３～６）を参照されたい。

１　縄文時代の遺物（fig.34）

縄文時代に相当するものは、石製品類のみである。遺構に伴っているはいるものの、紛れ込みと考えられるものばかりである。チャート製の石器（２）と玦状耳飾がある。玦状耳飾(1)は、滑石ないしは蝋石製である。円形を基本とした形態で、断面形は長楕円形を呈する。中央は削り込んで穿孔する。前期頃のものと思われる[1]。

２　弥生時代の遺物（fig.35・36）

弥生時代の遺物には石器類（３～６）と土器類（７～84）がある。土器類は、中期のもの（７～９）と後期のもの（10～84）に区分できる。

中期では、前葉の壺（７・８）と中葉頃の高杯（９）がある。７と８の色調は異なるものの、同一個体と考えられる。９は口縁端部に２個一対の突起を４箇所ほど付け、外面に櫛描直線文施文の後山形文を施すものである。類似資料は管見に及ばない。共に倒木痕ＳＺ27からの出土である。

後期の土器は、竪穴住居跡や土坑などから出土しているが、出土量は多くない。後期前葉を中心としているＳＨ14・19・43・59・63出土の資料と、後期中葉頃のＳＨ22の資料とに大きく区分できる。

壺では、直口・広口壺に相当するものが主体となる。ＳＨ22出土の壺(29)は、円形浮文を施したもので、時期的には少し遡るものであろう。また、ＳＨ14出土の壺(44)も、退化した流水文を付けることや、口縁部と頸部との境が不明瞭な点など、中期的な様相を示している。

同じようなことは壺あるいは甕の底部についても観察でき、ＳＨ19では21のような後期的な底部と22・23のような中期的な底部とが見られる。

高杯では、直線的に開く杯下部から少し外反して短く開く41のような形態が、今回確認された後期の高杯の中で最も古い形態と見られ、それが35→24・25の形態へと変化するものと考えられる。

今回注目できるのは、甕のあり方である。一瞥し

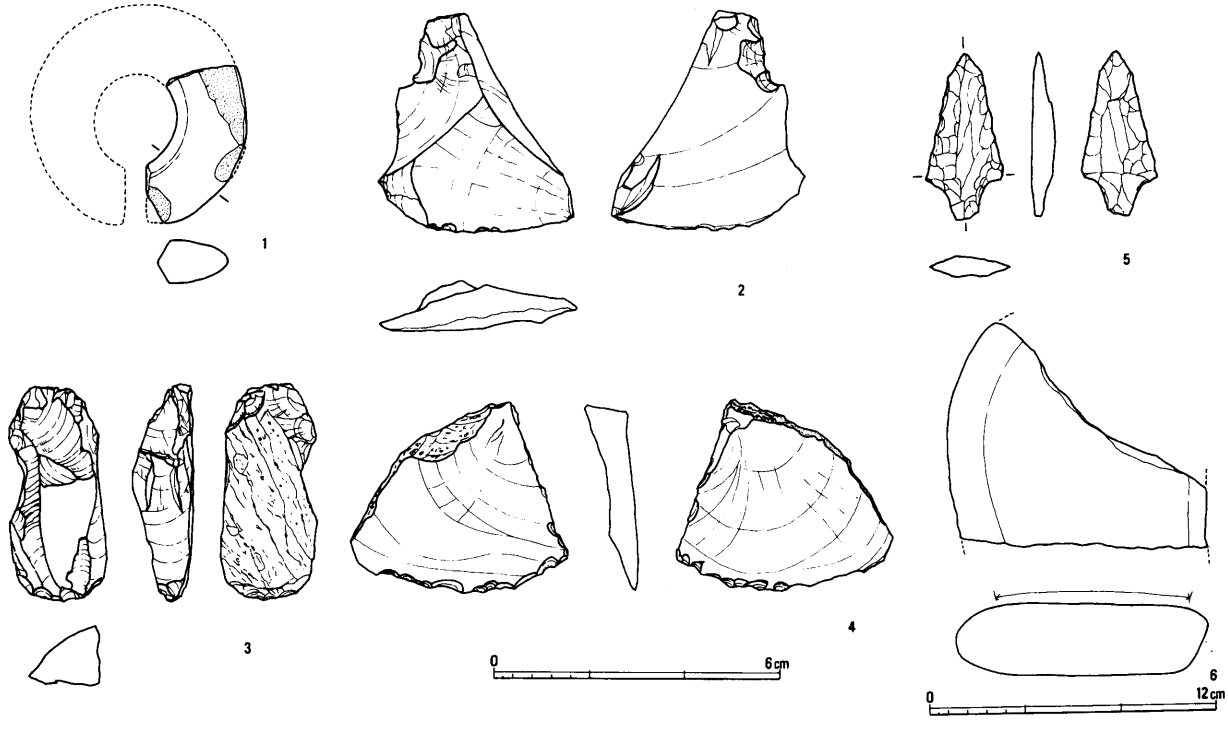


fig.34　出土遺物実測図(1)　石器類　（１～５は２：３，６は１：３）

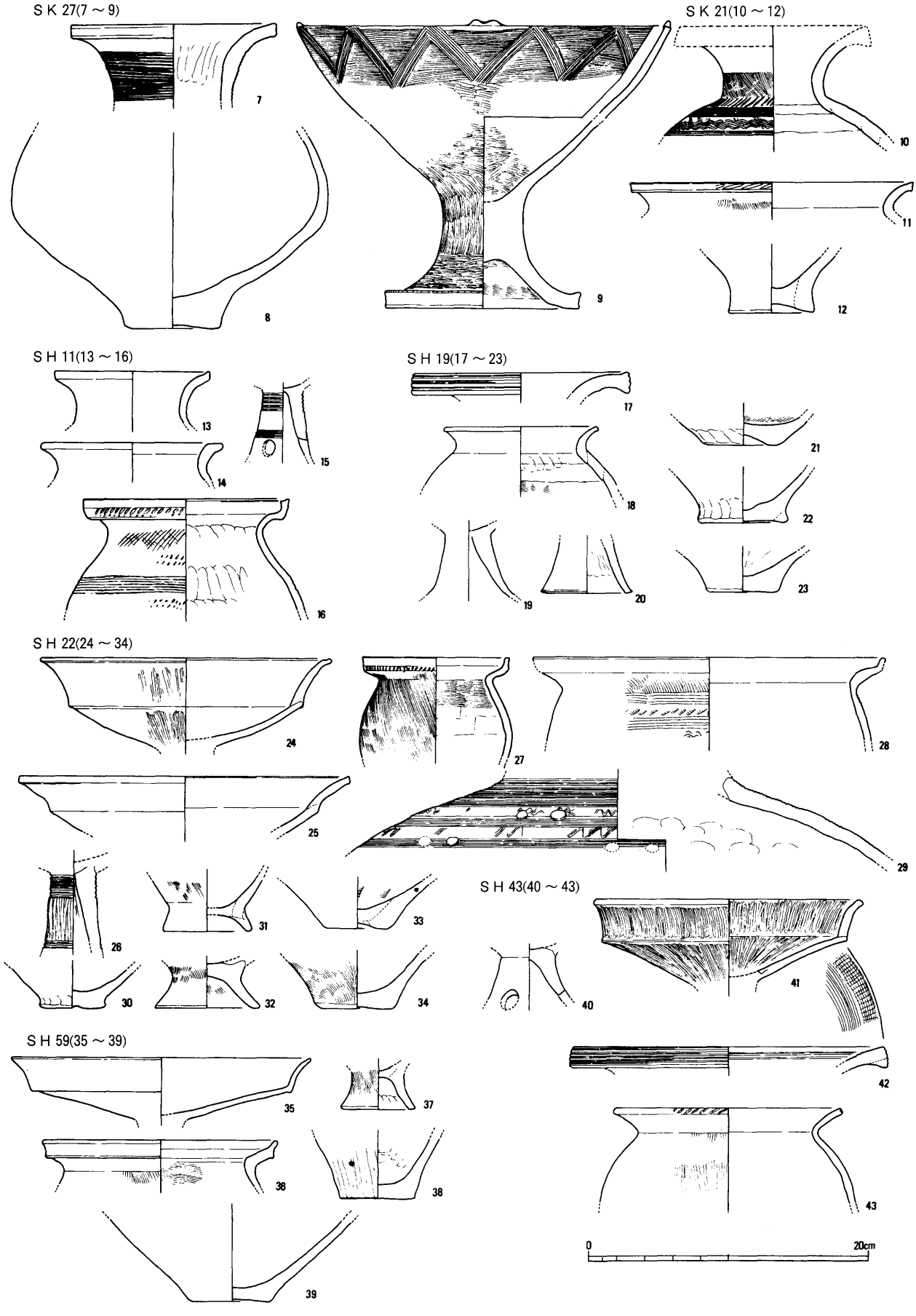


fig.35　出土遺物実測図(2)　弥生土器１（１：４）

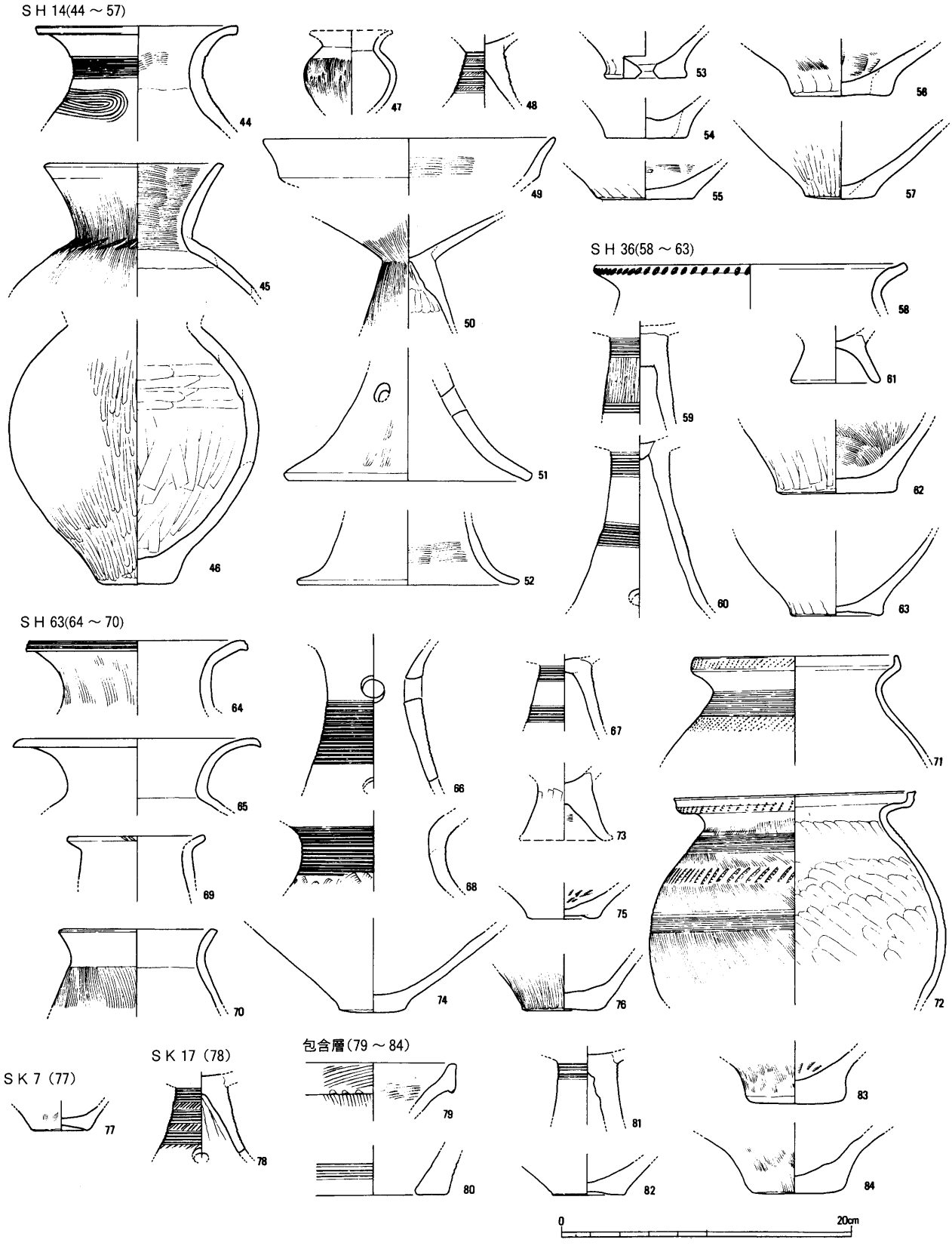


fig.36　出土遺物実測図(3)　弥生土器２（１：４）

て判るように、受口状の口縁部を持つ、いわゆる「近江系」甕の出土が目立ち、主体といって差し支えない。これには、形態的に見て、近江地域の資料との関係が強いもの（16・71・72）と、当地におけるアレンジを想定できるもの（27・36）とがある。また、受口状は呈さなくても、口縁端部下方に列点文を有するという類似現象が見られるものとして43・58などを挙げることができる。このように、当調査区で出土した甕は、いわゆる「近江系」甕との関連が強いことを注意したい。

これらの土器を近畿地方との並行関係で見れば、後期前葉としたものが西ノ辻E式段階、後期中葉としたものが上六万寺式段階に相当しよう。[2]

3　古墳時代の遺物 (fig.37)

古墳群に関した遺構から出土した遺物で、鉄器・土師器・須恵器がある。

1号墳からは鉄製の刀子 (85) と須恵器杯身 (86) がある。須恵器杯蓋もあるが、脆弱で図示し得なかった。須恵器杯身は、田辺昭三氏による編年（以下、田辺編年）[3]のTK217型式に相当しよう。

2号墳出土とした須恵器壺 (87) は、第Ⅲ章でも触れたとおり、厳密には埋土内ではない。しかし、それに相応しい遺構が付近に認められないことから、この土器をもって所属時期と考えてよかろう。断面がいわゆる「セピア色」を呈し、内面の当具痕は丁寧に磨り消されていることなどから、田辺編年のTK23型式以前と考えられる。

3号墳出土としたものは、その多くが混入と考えられるものである。88の須恵器蓋は上層からの出土で、周溝がかなり埋没してからの混入である。90は口縁端部に若干の肥厚を持つことから、欠山期新相あるいは元屋敷期古相と考えられる[4]が、細片のため断言できない。その他の土器については、混入と考えられる。

SX64出土の須恵器 (96) についても、田辺編年のTK217型式の範疇で把握できよう。

SX28に用いられていた甕 (94) は、長胴甕である。時期的には、7世紀でも後半であろう。

4　奈良時代の遺物（fig.38）

金属製品類、土師器、須恵器のほか、瓦がある。

金属製品　SH33の埋土中から出土した銅銙帯の鉈尾部分（98）がある。幅2.1cm、長さ2.2cmである。表側から側辺部が巻き込むようにして連続成形される。その裏からは3カ所の鋲が出され、裏板に相当する部分と接合されている。表面に漆や金箔などの痕跡は観察されなかった。

土師器類　土師器類では、杯・蓋・皿・甕のほか、移動式カマドの一部（121）がある。99の杯は精緻な暗文が施されるが、畿内からの搬入品ではない。

須恵器類　須恵器には、杯・蓋類がある。このうち、112の蓋は、天上部に吊紐を結ぶためであろうか、平面方形の紐が取り付くものである。

瓦類　丸瓦 (122) と平瓦 (123・124) がある。124の凸面には格子目叩きが施されるが、この種のものは丘陵下の天花寺廃寺で確認されている。[5]これらの瓦は、今回の調査区内での出土が少量であることから、何らかの目的で天花寺廃寺あるいは天花寺瓦窯跡から運ばれてきたものと思われる。

5　中～近世の遺物（fig.39）

中～近世の遺物には土師器類、陶器類、磁器類、および石製品がある。

土器類　中世に相当する土器類は125～129、133～135であり、予想していた以上に少ない。図示した以外では、集石群1から出土した16世紀代かと思われる土師器皿の破片がある。

125は土師器の小皿、126・127は土師器の皿である。125は集石群1、126は集石群2、127はSD41から出土した。いずれも南伊勢系の範疇で把握される。この器形の特徴は、14世紀中葉から15世紀中葉までのものである。[6]

128は常滑産と考えられる甕の底部である。SD23から出土している。

129は土師器の鍋で、南伊勢系のものである。形態的な特徴から南伊勢系鍋の第3段階a型式に相当し、14世紀中葉頃のものと考えられる。

133は瀬戸産陶器の壺で、大窯期[7]のものである可能性が高い。集石群1からの出土で、蔵骨器の可能性がある。

134・135は陶器の壺で、素地の雰囲気からは常滑産かと思われる。134が集石群３、135が集石群１から出土しており、共に蔵骨器の可能性がある。

近世のものには、130～132がある。

130はＳＸ８から出土した土師器皿である。口縁部外面をヨコナデする手法は、12世紀末頃から16世紀代までの土器には見られない特徴[8]で、江戸時代のものと考えてよい。131は瀬戸産、132は肥前産と考えられる陶磁器である。131はＳＤ２から、132は集石群１から出土した。ともに18世紀代頃と思われる。136は平瓦片を使った加工円盤である。

石製品類　五輪塔と碑がある。これらは集石群１に伴って出土しているものが大部分であるが、ＳＤ23から出土したもの(137)もある。

五輪塔は、組合式のものでは、空風輪（141～145）・火輪（147・148）・地輪（150）がある。一石五輪塔には138～140、146、149がある。いずれも砂岩質で、一志町井関で産出される、いわゆる“井関石”に相当するものと考えられる。149の外面には何か刻まれているが、小片のため、よく判らない。これらは、中世後期、多くが16世紀代に相当するものと考えてよかろう。

碑に相当するものは１点ある(151)。文字の刻まれた痕跡があるが、破片のためよく判らない。ＳＤ２の上層埋土中から出土しており、近世のものと考えられる。

註

(1) 水谷芳春氏（桑名市教育委員会）の御教示による。
(2) 井藤暁子「近畿」（『弥生土器Ｉ』ニュー・サイエンス社　1983）
(3) 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981）
(4) 伊藤裕偉「伊勢・伊賀の弥生後期から古墳前期の土器」（『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会　1991）
(5) 山田猛「天花寺廃寺」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県教育委員会　1981）
(6) 伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1996）
(7) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』　1986）
(8) 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993）

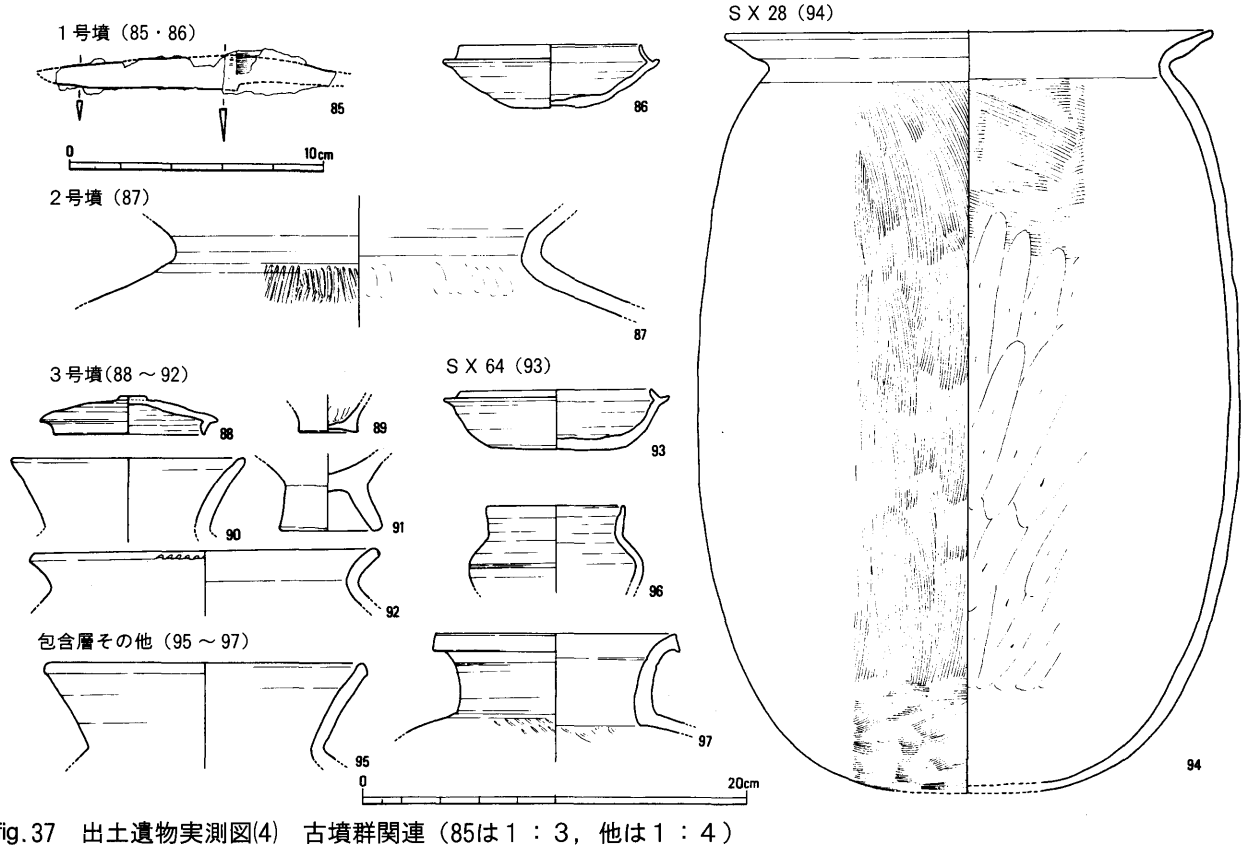


fig.37　出土遺物実測図(4)　古墳群関連（85は１：３，他は１：４）

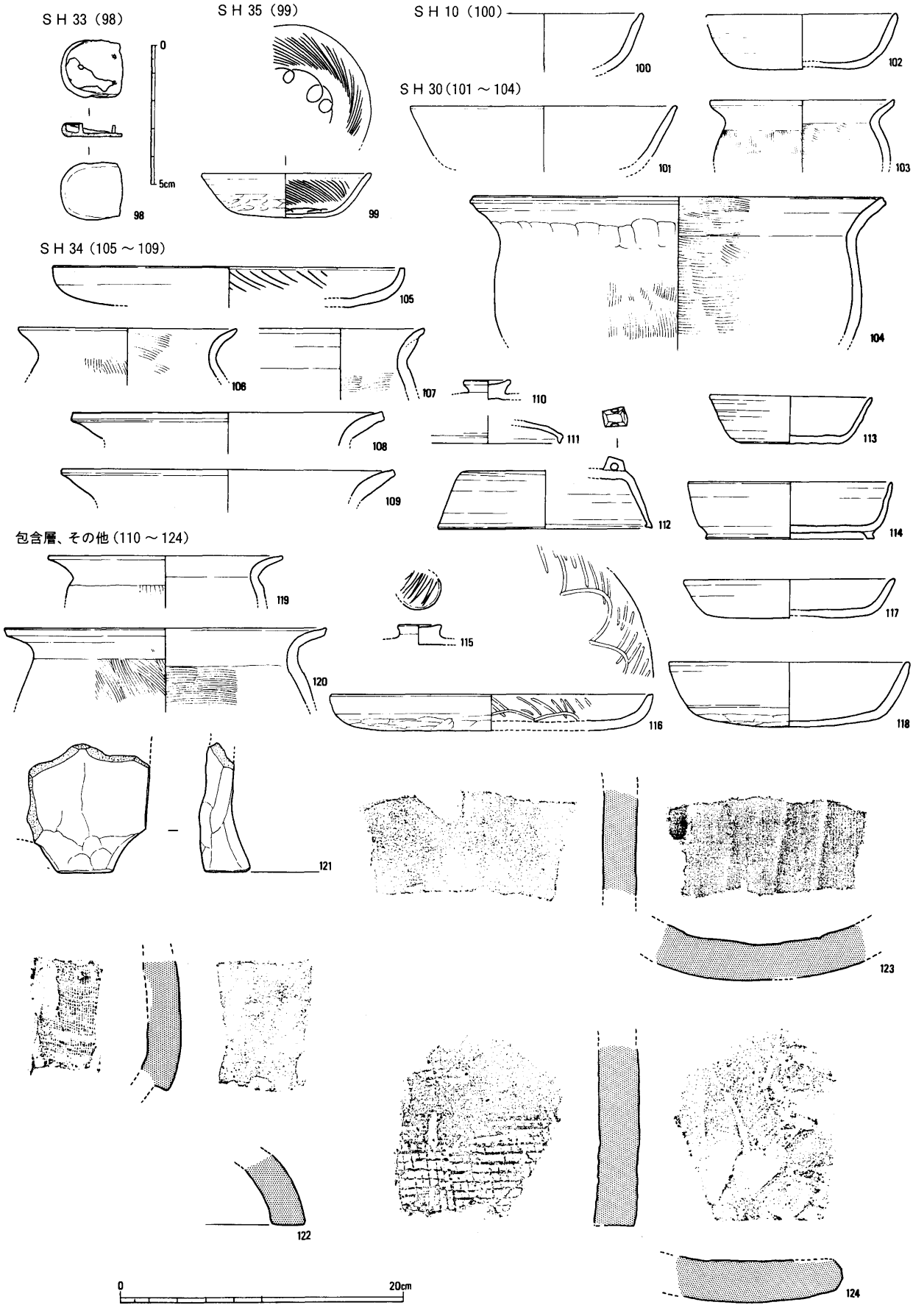


fig.38　出土遺物実測図(5)　奈良時代（98は１：２，他は１：４）

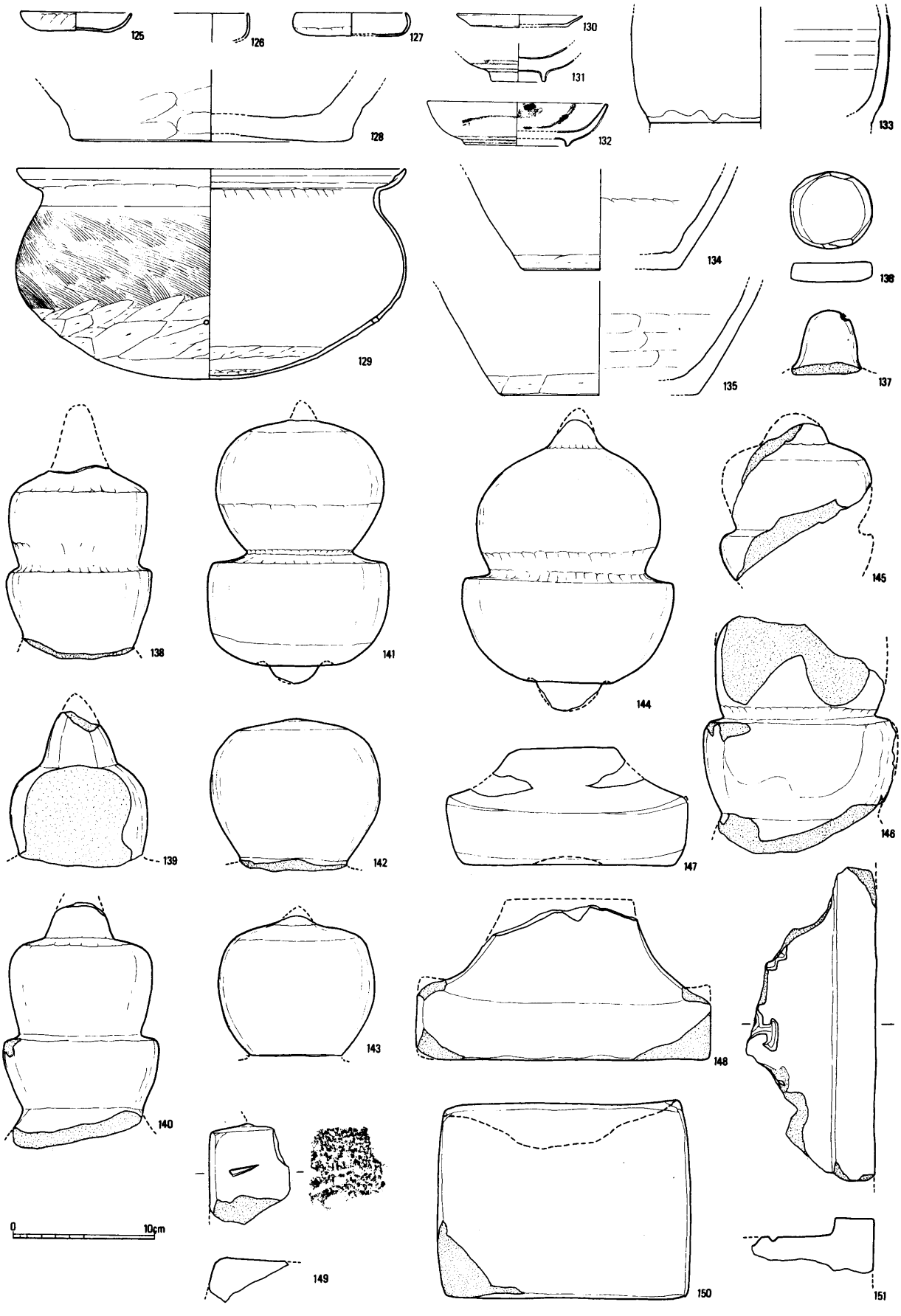


fig.39　出土遺物実測図(6)　中～近世（１：４）

番号	実測番号	器種等	出土グリッド	遺構・層名・取り上げ番号など	法　量	調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色調	残存度	備　考
1	1-3	石製品 玦状耳飾	g 4	淡褐土	(厚) 0.8	研磨のち両面からの穿孔とケズリ	－	－		1/3	蝋石あるいは滑石製
2	24-1	チャート製 RF	i 13	SZ42	(長)4.35 (厚)0.9		－	－		完存	
3	42-1	サヌカイト製 楔形石器	h 8	SH43 B区	(長) 4.3 (厚) 1.2		－	－		完存	
4	34-1	サヌカイト製 RF	f 15	SH63 A区下層	(長) 3.8 (厚) 0.9		－	－		完存	
5	1-4	サヌカイト製 鏃	d 15	SH16	(長) 3.3 (厚) 0.4		－	－		完存	
6	34-2	砂岩製 砥石？	f 15	SH63 s 1	(幅)10.0 (厚) 3.3		－	－			
7	4-2	弥生土器 壺	e 13	SK27 p 1	(口)14.8	外；櫛描直線文（3単位）→ヨコナデ　内；オサエ→ヨコナデ	粗0.5～5㎜の小石	やや軟	赤褐	口縁1/4	
8	6-1	弥生土器 壺	e 13	SK27 p 1	(底) 6.9	外；ナデ 内；ナデ	粗0.5～5㎜の石	やや軟	橙褐	底部完存	7と同一個体？
9	2-1	弥生土器 高杯	e 13	SK27 p 3	(口)27.1 (高)20.8	外；ヘラミガキ→櫛描直線文→櫛描鋸歯文（杯）・刻目文（脚裾）	粗0.5～3㎜の小石	良好	赤褐	口縁1/3 脚部完存	口縁端部に山状突起4対 直線文と鋸歯文は同一原体
10	1-1	弥生土器 壺	b 8	SK21 p 1	(頸) 7.2	外；ハケメ→櫛描直線文・波状文・刺突文	粗0.5～4㎜の小石	良好	橙灰	頸部完存	施文は全て同一原体
11	14-5	弥生土器 甕	c 8	SK21	(口)20.5	外；ハケメ→ヨコナデ→口縁端部部に列点文　内；ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	橙	口縁1/10	外面に煤付着
12	14-4	弥生土器 甕	c 8	SK21	(底) 6.2	外；ナデ 内；ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	橙	底部1/3	内面は赤変する
13	11-5	弥生土器 壺	b 12	SH11 貯蔵穴	(口)11.2	外；剥離 内；剥離	粗0.5～2㎜の小石	やや軟	淡黄	口縁1/8	
14	11-2	弥生土器 甕	b 11	SH11 C区	(口)12.6	外；ヨコナデ→刻み目文 内；ヨコナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	暗橙	口縁1/4	
15	10-4	弥生土器 高杯	b 12	SH11 貯蔵穴	(脚柱) 3.0	外；ヘラミガキ→櫛描直線文・透孔（3方）　内；ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡黄	脚柱上部完存	
16	4-1	弥生土器 甕	b 12	SH11 貯蔵穴	(口)14.8	外；ハケメ→櫛描直線文・刺突文 内；オサエ・ナデ	粗0.5～3㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁1/5	近江系 外面に煤付着
17	11-3	弥生土器 壺	b 9	SH19上	(口)15.6	外；擬凹線文 内；ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	黄橙	口縁1/4	
18	11-6	弥生土器 甕	b 8	SH19上	(口)11.2	外；ナデ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密0.5～1㎜の小石	良好	淡黄	口縁1/8	
19	10-5	弥生土器 高杯	b 9	SH19北区 暗褐土	(脚柱) 3.3	外；ヘラミガキ 内；シボリ目→ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	明黄褐	脚柱完存	
20	10-7	弥生土器 台付甕	b 9	SH19上	(台裾) 6.6	外；ナデ 内；オサエ・ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡橙	台部1/4	
21	9-8	弥生土器 壺	b 9	SH19上	(底) 5.1	外；オサエ・ナデ 内；ハケメ	粗0.5～3㎜の小石	良好	明黄褐	底部完存	
22	9-5	弥生土器 甕？	b 8	SH19上	(底) 6.4	外；オサエ・ナデ 内；オサエ・ナデ	粗0.5～3㎜の小石	良好	淡橙	底部1/2	
23	9-3	弥生土器 壺	b 9	SH19 B区	(底) 5.2	外；ナデ 内；板ナデ	粗0.5～4㎜の小石	良好	橙	底部3/4	
24	35-1 ・2	弥生土器 高杯	b 7	SH22 p 4・10	(口)22.0	外；ヘラミガキ 内；ヘラミガキ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	
25	12-2	弥生土器 高杯	b 7	SH22 B区	(口)24.0	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁1/5	
26	11-1	弥生土器 高杯	b 7	SH22 B区	(脚柱) 3.4	外；ヘラミガキ→櫛描直線文 内；シボリメ→ナデ	密0.5～1㎜の小石	良好	淡黄橙	脚柱上部完存	
27	33-3	弥生土器 甕	b 7	SH22 p 7	(口)10.8	外；ハケメ→ヨコナデ→刻目文 内；ナデ→ハケメ	密0.5～3㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁1/3	外面に煤、内面に炭化物付着
28	40-3	弥生土器 甕	c 6	SH22 貯蔵穴	(口)25.4	外；ハケメ→櫛描直線文・櫛描波状文・刺突文　　内；ナデ	密0.5～4㎜の小石、角閃石	軟	淡橙	口縁1/4	2片を図上復元 波状文と刺突文は同一原体か？
29	37-1 10	弥生土器 壺	b 7	SH22 p 5	(頸)16.8	外；櫛描直線文・櫛描波状文→円形浮文　　内；ナデ	密0.5～2㎜の小石	やや軟	黄橙	頸部1/8	
30	39-3	弥生土器 甕	b 7	SH22 p 6	(底) 4.8	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	密0.5～3㎜の小石	良好	淡黄褐	底部完存	外面に煤、内面に炭化物付着
31	12-3	弥生土器 台付甕	c 6	SH22 貯蔵穴	(台裾) 6.2	外；ナデ・ハケメ 内；ナデ	粗0.5～3㎜の小石	良好	淡黄橙	台部1/4	外面は一部赤変
32	3-6	弥生土器 台付甕	b 7	SH22 p 9	(台裾) 7.6	外；ナデ・ハケメ 内；ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	台部完存	
33	9-4	弥生土器 壺	b 6	SH22 C区	(底) 5.0	外；オサエ・ナデ 内；ハケメ	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	底部1/2	
34	33-7	弥生土器 壺	c 7	SH22 p 13	(底) 5.8	外；ハケメ 内；ハケメ	粗0.5～1㎜の小石	良好	淡黄橙	底部完存	
35	38-5	弥生土器 高杯	f 12	SH59 p 1	(口)21.6	外；剥離 内；剥離	粗0.5～2㎜の小石	軟	橙	杯下部 1/3	
36	14-6	弥生土器 甕	f 12	SH59	(口)17.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	明黄褐	口縁1/6	外面に煤付着
37	14-3	弥生土器 台付甕	f 12	SH59	(台裾) 5.3	外；ハケメ 内；ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	台裾1/4	
38	14-2	弥生土器 甕	f 12	SH59	(底) 5.4	外；ケズリ 内；板ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡橙	底部2/5	外面に煤付着、一部赤変
39	14-1	弥生土器 壺	f 12	SH59	(底) 6.2	外；剥離 内；剥離	粗0.5～2㎜の小石、赤色粒	良好	淡黄橙	底部2/3	
40	13-4	弥生土器 高杯	j 7	SH43 p 8	(脚柱) 3.9	外；剥離、透孔3方向 内；ナデ	粗0.5～4㎜の小石	良好	橙	脚柱完存	
41	13-1	弥生土器 高杯	j 7	SH43 p 1～4	(口)19.5	外；ヘラミガキ 内；ヘラミガキ	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁1/3	
42	13-3	弥生土器 壺	j 7	SH43 D区	(口)23.0	外；擬凹線 内；櫛描文・簾状文	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁1/10	
43	13-2	弥生土器 甕	j 7	SH43 C区	(口)16.5	外；ハケメ→ヨコナデ→刻目文 内；ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	橙	口縁1/4	外面に煤付着
44	4-3	弥生土器 壺	e 13	SH14 p 13	(口)14.1	外；櫛描直線文・流水文 内；ハケメ・ナデ	粗0.5～3㎜の小石	やや軟	淡橙	口縁1/3	2片
45	8-2	弥生土器 壺	e 13	SH14 p 19	(口)12.4	外；ハケメ→刺突文 内；ハケメ	粗0.5～4㎜の小石	やや軟	淡黄橙	口縁 ほぼ完存	

tab.3　出土遺物観察表(1)

番号	実測番号	器種等	出土グリッド	遺構・層名・取り上げ番号など	法　量	調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色調	残存度	備　考
46	7-1	弥生土器 壺	e 13	ＳＨ14 ｐ８	(底) 5.6	外；ヘラミガキ 内；ナデ・板ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	橙	体部1/3	
47	7-4	弥生土器 小形壺	e 14	ＳＨ14 ｐ24	(体) 6.3	外；ヘラミガキ→ヨコナデ 内；オサエ→ヨコナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	灰黄	体部上半完存	口縁端部は調査中には残っていたが、不注意により欠損。
48	10-6	弥生土器 高杯	e 13	ＳＨ14 Ｃ区	(脚柱) 2.8	外；櫛描直線文・刺突文 内；ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	橙	脚柱完存	
49	8-4	弥生土器 高杯	d 14	ＳＨ14	(口)20.2	外；ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密0.5～3㎜の小石	良好	褐灰	口縁1/10	
50	7-3	弥生土器 高杯	e 14	ＳＨ14 ｐ26	(脚柱) 3.6	外；ハケメ 内；オサエ・ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	脚柱完存	
51	10-2	弥生土器 高杯	e 14	ＳＨ14 ｐ30	(脚裾) 17.2	外；ヘラミガキ 内；ナデ	密0.5～1㎜の小石	良好	淡黄橙	脚裾1/6	
52	11-4	弥生土器 高杯	e 13	ＳＨ14上	(脚裾) 15.4	外；ナデ 内；ハケメ・ナデ	粗0.5～1㎜の小石	良好	淡黄	脚裾1/8	
53	9-8	弥生土器 甑	e 13	ＳＨ14 Ｃ区	(底) 5.6	外；ナデ 内；ナデ	粗0.5～4㎜の小石	良好	淡橙	底部2/3	底部の穿孔は焼成前
54	9-2	弥生土器 壺	e 13	ＳＨ14 ｐ９	(底) 5.6	外；ナデ 内；ハケメ	粗0.5～2㎜の小石	良好	橙	底部1/3	
55	9-7	弥生土器 壺	d 14	ＳＨ14上	(底) 6.8	外；ナデ 内；ハケメ	粗0.5～2㎜の小石	良好	橙	底部完存	
56	9-1	弥生土器	e 13	ＳＨ14 ｐ12	(底) 7.1	外；ナデ・ハケメ 内；ハケメ	粗0.5～3㎜の小石	良好	橙	底部1/4	
57	10-1	弥生土器 壺	d 14	ＳＨ14上	(底) 4.8	外；ヘラミガキ 内；ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	底部3/4	
58	8-1	弥生土器 甕	e 13	ＳＨ36 ｐ５	(口)21.8	外；ヨコナデ→刻目文 内；ヨコナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	磨滅強い
59	10-3	弥生土器 高杯	e 13	ＳＨ36 ｐ１	(脚柱)	外；ヘラミガキ→櫛描直線文 内；ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	脚柱完存	
60	8-3	弥生土器 高杯	e 14	ＳＨ36 ｐ31	(脚柱)	外；櫛描直線文・透孔（４方向） 内；ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	脚柱上部完存	
61	6-3	弥生土器 台付甕	e 13	ＳＨ36 ｐ２	(台裾) 6.2	外；剥離 内；剥離	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	台部1/4	
62	7-2	弥生土器 壺	e 13	ＳＨ36 ｐ21	(底) 8.3	外；板ナデ 内；ハケメ	密0.5～4㎜の小石	良好	淡橙	底部完存	
63	6-3	弥生土器 壺	e 13	ＳＨ36 ｐ23	(底) 6.6	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	底部4/5	
64	33-2	弥生土器 壺	f 15	ＳＨ63 ｐ４	(口)15.4	外；ハケメ・擬凹線 内；磨滅	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁1/3	
65	36-1	弥生土器 壺	f 15	ＳＨ63 ｐ１	(口)17.1	外；磨滅 内；磨滅	密0.5～2㎜の小石	やや軟	淡黄白	口縁完存	床面倒立密着
66	38-1	弥生土器 器台	f 15	ＳＨ63 ｐ５	(体) 6.9	外；櫛描直線文（５単位） 内；ナデ	粗0.5～3㎜の小石	良好	赤褐	体部完存	炉内床面密着
67	38-2	弥生土器 高杯	f 15	ＳＨ63 ｐ６	(脚柱) 3.7	外；櫛描直線文 内；ナデ	密0.5～1㎜の小石	良好	淡黄橙	脚柱完存	
68	38-4	弥生土器 壺	f 15	ＳＨ63 Ａ区	(頸)10.1	外；櫛描直線文（２単位）・扇状文 内；ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡橙	頸部1/4	
69	33-5	弥生土器 小形甕	f 15	ＳＨ63 ｐ11	(口) 8.8	外；剥離・口縁部刻目文 内；剥離	密0.5～2㎜の小石	軟	淡橙	口縁1/8	床面密着
70	33-1	弥生土器 小形甕	f 15	ＳＨ63 ｐ３	(口)11.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁完存	床面倒立密着 外面に煤付着
71	36-2	弥生土器 甕	f 15	ＳＨ63 ｐ７	(口)14.8	外；櫛描直線文・刻目文 内；ナデ	粗0.5～1㎜の小石	良好	淡黄	口縁完存	床面倒立密着 近江系
72	27-1	弥生土器 甕	f 15	ＳＨ63 ｐ２	(口)16.8	外；ハケメ→櫛描直線文・刻目文 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗0.5～3㎜の小石	良好	灰黄褐	口縁～体部上完存	床面倒立密着 近江系　外面に煤付着
73	33-4	弥生土器 台付甕	f 15	ＳＨ63 ｐ10	(台上) 3.8	外；磨滅 内；ナデ・ハケメ	粗0.5～2㎜の小石	軟	淡黄橙	台上部完存	
74	36-3	弥生土器 壺	f 15	ＳＨ63 ｐ９	(底) 4.6	外；剥離 内；剥離	密0.5～5㎜の小石	良好	淡黄橙	底部完存	内面に炭化物付着
75	38-3	弥生土器 壺	f 15	ＳＨ63 Ａ区	(底) 5.2	外；ハケメ 内；ハケメ	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	底部3/4	
76	33-8	弥生土器 壺	f 15	ＳＨ63 ｐ８	(底) 5.4	外；ヘラミガキ 内；ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	明黄褐	底部完存	
77	15-4	弥生土器 甕	c 14	ＳＫ７	(底) 4.4	外；ハケメ 内；ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	橙	底部3/5	
78	15-5	弥生土器 高杯	c 11	ＳＫ17	(脚柱) 3.8	外；櫛描直線文・刻目文→透孔（４方向）　内；シボリメ	密0.5～2㎜の小石	良好	明赤褐	脚柱完存	櫛描直線文３単位は同一原体
79	15-8	弥生土器 壺	g 14	ＳＺ１－ｃ 盛土	(口) －	外；ハケメ→刻目 内；ハケメ	粗0.5～2㎜の小石	良好	橙	口縁部片	
80	15-3	弥生土器 無頸壺	i 8	集石群１下 淡褐土	(台裾)－	外；沈線状の凹線文 内；剥離	粗0.5～4㎜の小石	良好	淡橙	脚台部片	
81	15-1	弥生土器 高杯	h 15	ＳＺ１－ｃ 盛土	(脚柱) 4.2	外；櫛描直線文 内；ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡橙	脚柱上部完存	
82	15-2	弥生土器 壺	h 15	ＳＺ１－ｃ 盛土	(底) 5.2	外；ナデ 内；ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡褐	底部2/3	
83	15-7	弥生土器 壺	c 11	黒褐色土	(底) 7.0	外；ハケメ 内；ハケメ	密0.5～6㎜の小石	良好	淡黄橙	底部完存	
84	13-5	弥生土器 壺	f 12	ＳＺ１－ｃ 盛土	(底) 6.9	外；ハケメ 内；剥離	粗0.5～5㎜の小石	良好	淡橙	底部完存	
85	5-5	鉄製品 刀子	d 12	１号墳 埋葬施設ｉ１	(残長) 11.1	柄部に木質痕あり	－	－		先尻を欠損	
86	2-2	須恵器 杯身	d 12	１号墳 埋葬施設ｐ１	(口) 9.8	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密0.5～4㎜の小石	堅緻	淡灰橙	完存	
87	17-1	須恵器 甕	k 10	２号墳上	(頸)19.2	外；タタキメ→ヨコナデ 内；タタキメ磨消し→ヨコナデ	密0.5～1㎜の小石	堅緻	灰	頸部1/4	
88	16-3	須恵器 蓋	g 6	３号墳 周溝埋土上層	(口) 8.1 (高) 2.1	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密0.5～1㎜の小石	堅緻	灰白	完存	
89	40-5	弥生土器 小形甕	f 7	３号墳 周溝埋土	(底) 3.2	外；ナデ 内；ナデ	粗0.5～2㎜の小石	良好	橙橙	底部完存	
90	40-1	土器 壺	h 6	３号墳 周溝埋土下層	(口)12.2	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗0.5～3㎜の小石、赤色粒	やや軟	淡黄橙	口縁1/5	

tab.4　出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	器種等	出土グリッド	遺構・層名・取り上げ番号など	法　量	調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色調	残存度	備　考
91	40-4	弥生土器 台付甕	g 6	3号墳 周溝埋土	(台裾) 5.4	外；剥離 内；剥離	粗0.5～5㎜の 小石	軟	橙	脚台1/2	
92	40-2	弥生土器 甕	h 6	3号墳 周溝埋土	(口)18.3	外；口縁端部に刻目文 内；ヨコナデ	粗0.5～2㎜の 小石	良好	明黄褐	口縁1/8	
93	16-2	須恵器 杯身	g 13	SX64 p 1	(口)10.2 (高) 3.3	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密0.5～2㎜の 小石	堅緻	灰	ほぼ完存	歪み大きい
94	32-1	土師器 長胴甕	f 10	SX28	(口)25.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	粗0.5～3㎜の 小石	やや軟	淡黄灰	口縁1/3	
95	12-1	土師器 壺	i 12	淡褐土	(口)17.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗0.5～2㎜の 小石	良好	淡黄褐	口縁1/8	
96	16-4	須恵器 小形壺	f 13	表土	(口) 7.4	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密0.5～1㎜の 小石	堅緻	灰	口縁1/6	
97	3-1	須恵器 壺	c 9	pit 1	(口)13.0	外；タタキメ→回転ナデ 内；タタキメ→回転ナデ	密0.5～1㎜の 小石	堅緻	白灰	口縁3/4	
98	5-4	銅製品 銙帯	e 14	SH33 埋土	(長) 2.2 (厚) 0.5	表になる部分の周囲を曲げ、側面とする　裏は1枚板　3個の鋲	－			鉈尾部分 完存	
99	19-1	土師器 杯	f 9	SH35 貯蔵穴p 1	(口)12.1 (高) 3.2	外；ケズリ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→螺旋・放射状暗文	密0.5～1㎜の小 石、赤色粒	良好	明橙	完存	
100	18-4	土師器 杯	b 13	SH10	(口) －	外；磨滅 内；磨滅	密0.5～1㎜の小 石、赤色粒	良好	橙	口縁部片	
101	18-2	土師器 杯	f 14	SH30	(口)19.2	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	密0.5～1㎜の小 石、赤色粒	良好	橙	口縁1/6	
102	35-3	土師器 杯	e 14	SH30 カマドp 1	(口)13.8 (高) 4.0	外；オサエ→ヨコナデ 内；ナデ	密0.5～1㎜の 小石	良好	淡黄橙	口縁1/3	被熱により赤変
103	39-3	土師器 甕	f14	SH30 西	(口)13.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗0.5～2㎜の 小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	内面に炭化物
104	39-1	土師器 甕	e 14	SH30 カマドp 4	(口)29.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗0.5～4㎜の 小石	良好	淡黄橙	口縁1/6	
105	39-4	土師器 皿	f 15	SH34 p 1	(口)25.1	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→放射状暗文	密0.5～2㎜の 小石	良好	橙	口縁1/8	
106	18-3	土師器 甕	f 15	SH34上	(口)15.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗0.5～2㎜の 小石	良好	明黄褐	口縁1/8	
107	17-4	土師器 甕	e 15	SH34貼床下 SK38	(口) －	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗0.5～2㎜の 小石	良好	淡黄橙	口縁部片	
108	17-3	土師器 甕	e 14	SH34	(口)22.3	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	密0.5～2㎜の 小石	良好	淡黄橙	口縁1/10	
109	18-1	土師器 甕	f 15	SH34	(口)23.8	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗0.5～2㎜の 小石	良好	淡黄橙	口縁1/10	
110	21-4	須恵器 杯蓋	f 14	表土	(摘) 3.4	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	密0.5～2㎜の 小石	堅緻	灰	摘部完存	
111	16-5	須恵器 杯蓋	a 15	SK 5	(口) －	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密0.5～1㎜の 小石	堅緻	灰	口縁部片	
112	16-1	須恵器 蓋	f 15	集石群1下 淡褐土	(口)15.2	外；回転ナデ→方形の吊紐状突起（円孔有）　内；回転ナデ	密0.5～1㎜の 小石	堅緻	灰	口縁1/6	吊紐状突起は2個1対か？
113	2-3	須恵器 杯身	c 15	SZ 3	(口)11.6 (高) 3.5	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密0.5～1㎜の 小石	堅緻	灰	口縁1/4	外面底部に墨書（読めず）
114	20-2	須恵器 杯身	e 14	黒色土	(口)14.4 (高) 4.1	外；回転ナデ→高台にヨコナデ 内；回転ナデ	密0.5～2㎜の 小石	良好	灰	杯部1/4	焼成不良
115	19-3	土師器 杯蓋	c 15	黒褐土	(摘) 3.2	外；ヨコナデ→暗文 内；ヨコナデ	密0.5～1㎜の 小石	良好	橙	摘部完存	
116	21-1	土師器 皿	d 15	褐土	(口)23.1	外；ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→放射状・螺旋状暗文	密0.5～1㎜の 小石	良好	橙	口縁1/8	
117	19-2	土師器 杯	d 10	pit 2	(口)15.0 (高) 2.8	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密0.5～2㎜の 小石	良好	橙	口縁1/8	
118	1-2	土師器 杯	d 15	pit 3	(口)17.2 (高) 4.7	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；剥離	粗0.5～2㎜の 小石	軟	淡黄橙	3/4	
119	15-6	土師器 甕	i 12	淡褐土	(口)16.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗0.5～3㎜の 小石	良好	淡黄橙	口縁1/8	
120	17-2	土師器 甕	f 14	表土	(口)23.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗0.5～2㎜の 小石	良好	橙	口縁1/8	外面に煤付着
121	21-5	土師器 竈	g 15	集石群1下		外；オサエ→ケズリ 内；オサエ	粗0.5～2㎜の 小石	良好	淡黄橙	部分	竈形土器の袖部分下端と思われる
122	23-2	丸瓦	f 11	SD 2	(厚) 2.3	凹面；布目 凸面；ナデ	粗0.5～2㎜の 小石	堅緻	暗灰		玉縁部付近
123	23-1	平瓦	f 14	淡褐土	(厚) 2.4	凹面；布目 凸面；ナデ	密0.5～4㎜の 小石	堅緻	灰		
124	22-1	平瓦	f 14	集石群1 r 1	(厚) 2.9	凹面；布目→ケズリ 凸面；格子目タタキ	粗0.5～4㎜の 小石	良好	灰白		
125	4-4	土師器 小皿	g 15	集石群1 黄褐土	(口) 7.9 (高) 1.4	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	密0.5～1㎜の 小石	良好	淡茶灰	口縁1/5	南伊勢系
126	5-3	土師器 皿	h 8	集石群2 下部	(口) －	外；ナデ 内；ナデ	密0.5～1㎜の 小石	良好	淡茶灰	口縁部片	南伊勢系
127	5-1	土師器 皿	h 14	SD41上層	(口) 8.0 (高) 1.7	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	密0.5～2㎜の 小石（多）	良好	淡白茶	口縁1/4	南伊勢系
128	20-1	陶器 甕	e 6	SD23	(底)20.0	外；オサエ・ナデ 内；ナデ（自然釉）	密0.5～3㎜の 小石	堅緻	暗黄橙	底部1/8	常滑産
129	41-1	土師器 鍋	k 10	SX47	(口)27.5 (高)15.1	外；ナデ・ハケメ→ヨコナデ・ケズリ　内；ナデ→ヨコナデ・ケズリ	粗0.5～3㎜の 小石	良好	淡黄灰	体部完存	南伊勢系 体部下部に焼成後の穿孔あり
130	5-2	土師器 小皿	b 15	SX 8	(口) 9.0 (高) 0.9	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗0.5～1㎜の 小石	良好	明橙	口縁1/6	
131	31-2	陶器 椀	g 13	SD2下層	(高台) 4.0	外；染付→施釉 内；施釉	密0.5～4㎜の 小石	堅緻	淡灰橙	高台1/2	瀬戸産染付椀？
132	31-1	磁器 椀	e 10	SD 2	(口)13.0 (高) 3.1	外；染付→施釉 内；染付→施釉	密0.5～1㎜の 小石	堅緻	灰白	口縁1/8	肥前産染付椀？
133	21-2	陶器 壺？	f 14	集石群1 p 1	(体)18.4	外；ロクロナデ→施釉 内；ロクロナデ	密0.5～1㎜の 小石	堅緻	釉 黒褐	体部1/5	瀬戸産？
134	20-3	陶器 壺	g 7	集石群3 表土	(底)11.2	外；ナデ→ケズリ 内；タタキメ（当具痕）	粗0.5～4㎜の 小石	堅緻	淡赤褐	底部1/4	常滑産？
135	20-4	陶器 壺	f 15	集石群1 p 4	(底)14.2	外；ナデ→ケズリ 内；ナデ	粗0.5～4㎜の 小石	堅緻	淡黄橙	底部1/8	常滑産？

tab.5　出土遺物観察表(3)

V　調査のまとめと検討

今回の調査では、縄文時代から近世に至るまでの多種多様な遺構・遺物を確認することになった。これは、とりもなおさず人間の活動における天花寺丘陵の重要性を物語るものに他ならない。

しかし、当該調査の発端となった道路改良工事は、今回の調査区以外にも、今後多くの調査を必要としていくことになる。すなわち、今回の調査とは、その先鞭的な位置を占めるに過ぎず、今後さらに継続する調査によって数多の事実が明らかになることと考えられる。

したがって、当報告において結論的なことを提示することは、ほとんど不可能かつ無意味である。したがってここでは、今回の調査で得た事実と、今後の調査で解決しなければならない問題点を抽出することに徹する。

1　弥生時代の遺構と遺物について

a　竪穴住居について

弥生時代の遺構として重要なのは、竪穴住居跡である。今回の調査区内からは11棟の竪穴住居跡が確認でき、全て後期の範疇で把握できるものであった。これらの竪穴住居のうち、それを構成する各々の要素別に傾向を見ていこう。

平面形態　方形を基本とし、長方形のものも正方形のものもある。規模は、４ｍから５ｍ程度のものであり、特別大形といえるようなものはない。

壁周溝　巡らされているものとそうでないものとがある。巡らされているものでは、貯蔵穴とは重ならないように設定されている状況が確認できた。

主柱穴　確認できたものとできなかったものがある。確認できたものでは４本柱が圧倒的に多いが、ＳＨ63については２本柱の可能性が考えられる。

ＳＨ45については、東側の柱列が気にかかる。拡張後の柱列が内側の列に相当すると考えると問題なく解決するが、外側の柱列の説明が不可能である。拡張後の柱列を外側の列とすると、拡張前後とも、東壁沿いに柱を設定したことになる。このように考えると、主柱穴の説明は過不足なくできるのであるが、果たして、このような建物が想定可能かどうかである。類例が管見に及ばない現在では、上記２通りの案を提示するに留めたい。

貯蔵穴　確認されたものでは、東あるいは南の壁に設置されている。多くが、壁の中央に設置されていると見なされるが、ＳＨ11のみ、ややずれている。ＳＨ11・14・19の貯蔵穴の周囲には、若干の土堤状の高まりを観察できた。このような傾向は、この付近では、同じ天花寺丘陵内に所在する馬ノ瀬遺跡竪穴住居８（弥生中期後葉）で既に認められる[(1)]ものであり、同地域の同一傾向と見なすことができる。また、壁に接するものとそうでないものという違いもある。時期差かも知れない。

炉　概略、住居内床面の中央付近に認められるようである。ただし、厳密に中央といえるものはない。ＳＨ59やＳＨ22の拡張前では、貯蔵穴の設定される壁とは反対側の主柱穴列寄りに設定されている。また、ＳＨ40やＳＨ59では、掘り窪められたピット状のものを炉として用いている状況が確認される。

弥生時代の竪穴住居の地域色を検討された都出比呂志氏の成果によれば、建物内の炉の設置場所に偏りが認められるのは東日本的なあり方で「地床炉」として認識されている。逆に、炉をピット状の掘り込みとして用いるのは西日本的なあり方と認識でき、「灰穴炉」と認識されている[(2)]。これに拠れば、小谷赤坂遺跡の竪穴住居跡には西日本的なあり方と東日本的なあり方を示すものが混在していることになる。当該時期の土器のあり方とも含め、この地域の時期的、地域的な特色を示す可能性があり、今後注意が必要である。

その他　ＳＨ11とＳＨ19には、建物に直交あるいは平行の関係になる土坑が付近にある。時期的にも明らかな相違はなく、住居の機能時期にこのような土坑が伴っていたことはまず間違いなさそうだ。性格については不明とせざるを得ないが、ＳＨ19に平行するＳＫ20・21のようなものについては、周堤帯に関する遺構の可能性もあろうか。

また、ＳＨ11の貯蔵穴脇で確認した小溝は、「間仕

切溝」の可能性もある。今後の調査でも類似資料の検出が期待される。

b　弥生土器について

今回出土した弥生土器は、ＳＺ27出土の土器を除いて弥生後期前葉から中葉にかけての時期にあたる。伊勢において、この時期前後に相当する土器群は、現在までのところあまり多くなく、良好な資料としては松阪市・川原表Ｂ遺跡[3]の資料くらいである。また、この付近では、一志町・鳥居本遺跡（昭和48年度調査）のＳＤ９・ＳＫ16[4]がある。今回の資料は良好な一括遺物にはさほど恵まれていないため、厳密な編年には適さないかも知れない。しかし、この地域では数少ない後期前葉の資料という点で、充分に資料価値はあろう。

数少ない資料の中で、ＳＨ63の遺物は特筆に値する。ここでは、倒立させるなどして床面上に置かれた土器が、現状では５点ある。この竪穴住居の東半は同一開発事業地内であり、近々に調査がなされる。その時点の成果次第では、床面上で居住者がどのような土器配置を行っていたかを窺うことができる。

さて、これら後期前～中葉における土器の中で、いわゆる「近江系」とされる甕の出土量は注意が必要である。これまで、この地域～伊勢中央部～での弥生後期集落を調査する機会に恵まれなかったこともあって、当該地域における「近江系」甕のあり方は、さほど際だったものという認識はなかった。しかし、今回の調査成果は、伊勢中央部における「近江系」甕が、予想以上に多いことを示唆する。今回図示し得た後期の甕類のなかでも、受口甕は6/11と過半数を越え、小型のものを除去すればその割合はさらに高くなる[5]。

「近江系」甕については、弥生時代から古墳時代にかけての過渡期に出現する、Ｓ字状口縁台付甕（以下、「Ｓ字甕」と呼称）を生み出すための重要な意味を有したものとして理解されている[6]。この意味で、後にＳ字甕を煮沸用具として用いることとなるこの地域に、その前段階でこういった状況が見出されるという事実は、Ｓ字甕の発生、ひいては古墳時代前期の動向も含め、重要な意味を持つこととなろう。

２　古墳群について

今回の調査では、６基の古墳あるいは古墳に相当しそうな遺構を確認した。また、土壙墓・土器棺墓も確認している。天花寺丘陵内には、墳丘として確認できる古墳として88基が存在しているのであるが、嬉野町教育委員会の調査で確認された清水谷古墳群５基のほかにも、墳丘の消滅している古墳がさらに多く存在していることが確認されるに至った。

今回確認された古墳は、弥生時代末頃の墳丘墓の系統下に相当するものや、盛土をほとんど持たないような７世紀代のものなど、時期的、あるいは形態的に古墳の範疇に含めてしまうには少し抵抗のあるものが多い。古墳として扱うことに問題を感じないものは、具体的には２号墳のみと言っても過言でなはい。

しかし、今回確認された「古墳」は、それぞれでの切り合い関係があるわけではない。また、方形の墳丘を有するものについては、若干の相違こそあれ、一定の方向を向いているという特徴は看過できない事実である。

古墳群、あるいは群集墳とされているものについては、一定の共通項で結ばれた被葬者像（同一集団ないしは擬制的な同族関係にある集団[7]）を想定して認識しているのが、暗黙の了解事項である。この点から言えば、古墳時代初現期から終末期に及んでいる当古墳群は、果たして一定の共通項で結ばれた被葬者が想定できるのかどうか、怪しい。しかし、墳丘が一定方向を向くという事実、そして何よりも前代の墳丘を破壊することなく造墓している事実から、被葬者の認識はともかく、当該地が、それぞれの墳墓構築時には、常々“墓域”として認識されていたことは疑いない。

したがって、このような群集状況を持つものについても、今のところ古墳群の一例として認識しておきたい。

前方後方形を呈する墳丘墓について　今回確認された「墳丘を持つ墓」のうち、３号墳はいわゆる「前方後方形墳丘墓」とされるものの可能性が高いものである。詳細については第Ⅲ章で述べたとおりであり、所属時期の決定が難しい。

方形の主墳部に突出部が付設する形態の墳墓とし

ては、鈴鹿市・寺谷15号墳がある。鈴鹿市教育委員会の調査で確認されたもので、出土土器から６世紀前葉頃に比定されている[8]ものである。寺谷15号墳と今回確認した３号墳とを比較すると、突出部の形態や周溝の掘削方法が異なっており、同列に扱うことはできないように思われる。しかし、このような平面形態をなすものが古墳時代初頭に限られるものではないことは、寺谷15号墳によって確認できる。

今回確認した３号墳は、各種の要素から古墳時代初期に構築されたものと考えたが、時期的に下る可能性も否定しきれない。

１号墳について　今回確認した１号墳は、出土須恵器から７世紀前葉頃のものと考えられる。また、周囲に浅い溝を有している。この溝は、盛土を確保するための古墳の周溝と考えるよりは、埋葬施設を周囲から区画することを目的とした溝と考えられるのが適切である。してがって、１号墳は「区画」を目的とした古墳といえる。

このような墓はこれまでに類例もなく、位置づけは難しい。しかし、天花寺丘陵と地続きとなる天保古墳群３・７号墳では、埋葬施設は小石室と無袖の横穴式石室ながら、明確な墳丘を持つ古墳が形成されている。近隣にこのような古墳が存在することを前提とすれば、今回確認された１号墳は、区画という行為のみを辛うじて行うことのできた、権力的な基盤の極めて弱い被葬者像を想定できようか。

３　奈良時代の遺構と遺物について

今回は、竪穴住居を中心とした遺構を確認している。集落の全体的な検討については、今後継続する調査成果を待つこととし、ここでは今回確認された事実と、新たに見出された問題点を指摘しておく。

ａ　竪穴住居のカマドに関する問題点

今回確認した７棟の竪穴住居のうち、６棟からカマドを検出している。これらのカマドは、東壁南寄りに設定されるものと、北東隅に設定されるもの、の２者に区分される。これらの位置と、建物の長辺か短辺かとの関連はあまりなさそうで、方向重視の設定と見なせそうである。

斜めに穿つカマドについて　北東隅に設定されるカマドには、ＳＨ37のように東辺に平行させるものと、ＳＨ30のように斜めに設定するものがある。斜めに設定するものは、三重県内ではあまり明確でない[9]。古墳時代での類例は、福岡県・山口県・広島県・京都府・奈良県・滋賀県・岐阜県・東京都と、全国各地に及んでいる[10]が、数量的には決して多くない。古くは、福岡県福岡市・西新町遺跡で畿内布留期古相にまで遡るものもある[11]。また、滋賀県甲良町・下之郷遺跡[12]では、７世紀代のものも確認されている。三重県では、それらしいものもある[13]が、報告された確実な例としてははじめてのものであろう。

カマドの構築方法としても、袖部を盛土によって構築している他のカマドとは異なり、このカマドは掘り抜きによって構築されている。カマドの構築方法が、地域色を表出するような比較的保守的なものと見る[14]のであれば、このような手法を用いることは、その居住者の当地における特殊性を物語る可能性も想定し得る。滋賀県での資料との類似性と直結させることは現状では無理があるものの、今後注意が必要なものといえる。

カマドの構築方法について　今回確認された構築方法は、先述のＳＨ30に見られる掘抜式のもののほか、竪穴住居設定時と思われる段階にカマド相当部分に土坑を穿ち、その周囲に盛土を施して構築する方法（半地下式；ＳＨ32・33・35・37）や、建物床面にそのまま盛土を施す方法（地上式；ＳＨ34）のものが認められた。半地下式のものは、ＳＨ35に代表されるように、掘込部を前庭部ないしは燃焼部として利用するものと思われる。

さて、今回カマドの調査を行うなかで、カマドの袖土に相当する部分には、被熱の影響というだけでなく、もともと中に焼土や炭あるいは土器片を含有していたものがいくつかある。土器片を除き、このようなものが含まれるためには、それ以前の燃焼行為が必然となる。よって、調査で我々が確認するカマドは、その建物が廃絶した直前の状況をこそ示すものではあるが、カマドが構築された当初の形状とは必ずしも言えない。したがって、我々が調査で確認するカマドは、数回の補修の後の形状である可能性をも当然想定するべきである。このことを看過すれば、焼土・炭や土器片の含まれた袖土を、堆積土として除去してしまい、カマドの形態を把握する前

に破壊してしまう恐れがある。今回の調査でも、ＳＨ37のカマドはその認識のないまま調査を行ってしまった。自省として、今後注意したい。

なお、今回確認されたカマドのうち、燃焼部に相当する床面が被熱で赤変しているものはなかった。これは、底面に灰などの堆積物があるという理由が想定できるが、本当にそれだけなのか、火廻りのあり方も含め、注意深い検討が必要と感じる。

貼床下土坑について　今回の調査で全体を確認した当該期の竪穴住居のうち、ＳＨ11・37を除く全ての建物から、貼床下土坑を確認した。これは、居住者の踏みしめによって硬質化した貼床を、調査のダメ押しとして除去してはじめて確認できたという性格のものである。遺構は、貼床と同質の埋土が入ること、土坑内から出土した土器が竪穴住居埋土から出土した土器とは明らかな時期差を見出し難いことから、同時存在と考えられる。そして、貼床が施される段階では既に埋まっているため、ほとんど機能時期のない土坑だといえる。

このような土坑は、場所については様々で、建物中央にあるもの（ＳＨ33・35）、一方の壁に寄るもの（ＳＨ30・32・34）がある。特別な規則性は見出せない。

県内の調査例でも類似する遺構を持つものは多くあるが、それが竪穴住居に伴うものと評価できるのかどうかが不明なものが多い。しかし、一志町・片野遺跡や明和町・斎宮跡の報告書中では、竪穴住居に伴うこのような遺構に対する注意喚起がなされており[15]、当遺跡以外にもこのような遺構の存在は明らかである。

今回の調査のうち、弥生時代後期に相当する竪穴住居跡では、このような遺構は認められなかった。上記で不明なものも含めて三重県内の同様な遺構を見てみると、時期的には古墳時代後期から平安時代前葉頃までの竪穴住居跡に見出されるようで、県内ではカマドが確認されている時期以降にこのような遺構が出現することが窺われる。

遺構の性格についてはよく判らないというのが正直なところであるが、壁周溝を巡らす竪穴住居にも存在している以上、排水行為にそれを求めることはできない。他に考えられる性格としては、ある種の地鎮行為や、カマドとの関連でいえば、カマド用土の採取、ということなどが挙げられる。しかし、いずれにしても根拠はない。

竪穴住居の設定・掘削から貼床までという、極めて限定された短い期間内に存在していた土坑のため、その性格は究明しにくい。今後は、意識的に貼床下の調査を行い、資料の充実を図る必要がある。

ｂ　出土遺物について

銅製帯金具について　竪穴住居ＳＨ33の埋土中から出土している。鉈尾１点のみの出土であり、何らかの要因によって埋没したものと考えられる。

銙帯については、これまでの研究蓄積がいくつかあり、官位・職階との関連が注目されている[16]。逆に、亀田博氏は、全国各地の遺跡から単独出土するという実状を評価して、「その大きさが官位を表していないことと、養老令で規定された以外でも銙帯が用いられていた」[17]とする。近年では、１・２点しか出土しないということ自体に意義を見出し、完形品の分割なども行われていたのではないか、という意見が田中広明氏から提示されている[18]。

おそらくは、亀田氏や田中氏の見解が、単独出土の銙帯に対しては正当な評価となろう。したがって、今回出土した銙帯についても、帯を構成する１部分のみが紛れ込んだものではない可能性を考えておきたい。しかし、天花寺丘陵内では今回の出土は２例目となり[19]、また、周辺に古代寺院が多く立ち並ぶという環境も無視できない事実といえる。１点の銙帯では多くを語ることはできないが、田中氏の指摘にある郷長の可能性も含め、周辺集落とは少し違った集落である可能性も考慮したい。

竪穴住居出土の土器について　出土遺物の項目でも触れたが、竪穴住居跡から出土する土器は土師器ばかりであり、須恵器は１片もなかった。このような状況は、既出の天保遺跡の同時代の竪穴住居跡でも見られず、特異なあり方ではなかろうか。この状況に対するよい理解は、今のところない。今回の成果を踏まえて、今後注意しておきたい。

ｃ　集落立地について

今回調査した場所は、天花寺廃寺を眼下に見下ろす位置にある。そして、この集落を構成するのは竪穴住居である。現在の我々の感覚では、眼下に荘厳

な建物、高い位置に通常の集落、という構図は少し異様に思える。

今回調査を行った天花寺丘陵東部は、ほぼ天花寺城跡に相当する部分が極めて平坦な場所となっている。これは、城館の時代、あるいは天華寺の立地によって削平されたとするには、あまりにも規模の大きいものである。あるいは、この平坦な丘陵上に、古代における重要な施設の所在していた可能性も考えられるが、それは今後の調査進展に待ちたい。

4　中～近世の天花寺丘陵について

今回の調査により、中世の天花寺丘陵では、天花寺城が設置される以前に集団墓地の形成がなされていたことが判明した。また、集団墓地の形成は、城館成立以後も継続していたことも確認された。さらに、天花寺城廃絶後、天華寺の占地に伴い、方形の区画が設定されているらしいことも確認できた。これらの成果を個別に見ていこう。

天花寺城について　今回の調査で確認された、確実に天花寺城関連と考えられる遺構は、ＳＤ23・41である。また、ＳＤ61もその可能性が想定されるものである。

遺構の時期は、出土土器が少量のため限定できないが、15世紀後半頃を中心とした時期と考えられる。

ＳＤ23と41は一連の遺構と考えられるもので、その間が入口の施設に相当するものと見なされる。ＳＤ41についてはさらに東方に延長されるものであるが、ＳＤ23は調査区内で終息する。

共に、断面形はいわゆる「薬研掘」の形状をなすものではあるが、遺構確認面からの深さはさほどではない。溝の北側に土塁を想定するにしても、防御としてはあまり顕著とは言い難い。これは、調査区の南に位置する大規模な堀切とも関連しようが、この溝は城館の内部空間とその外部との隔絶を図る目的が最も大きく、防御に関しては二次的なものと考えられるのかも知れない。

さて、ＳＤ23の西端部以降がどのようになるのかは興味深い。これとの関連で注目できるのは、現在の天華寺の北にある、曲輪５を区画する土塁・溝との関連である（付図参照）。後述する天華寺周囲にある方形区画（土塁・溝）によって一部破壊され、南西端でその下に潜り込むこの遺構は、形態的に見てもＳＤ23・41の一連である可能性が考えられる。今後の調査で関連を注意したい。

このように見ると、天花寺城跡の中央部に位置する曲輪５の空間は、広い区画域を持つ平坦地であることが理解され、何らかの重要な施設が存在するものと想定される。この可能性は、今回確認された溝ＳＤ23・41に見られる、上述の特徴からも窺うことができよう。

城館と集団墓地　天花寺城の造営当初がどの時点にまで遡るのかは判然としないが、中世墓群は、ＳＸ47の検出によって14世紀中葉頃以降の造営が確認された。今回検出したＳＤ23・41が天花寺城に伴う遺構であることが確実であることから、天花寺城の空間内には城と集団墓地とが時期的に重なるようにして造営されていると考えざるを得ない。また集団墓地は、城の廃絶後も継続する。この墓地は、出土した遺物を見る限り、権力的に上層部を構成する者の墓地を含むにしても、一般庶民の墓地をも含んでいると考えて差し支えなかろう。このことは、天花寺城が造営される場所が、一般庶民側と権力者側とが一定の接点を持つ場所である、と評価できる可能性を秘めている。

このような状況は、大和の国人領主・古市氏による古市城跡[20]や、伊勢では玉城町・山神城跡[21]でも確認されている。

山神城の所在する山神地区は、中世では村落結合としての「惣」の存在が想定されている[22]。山神城についても、惣的結合集団による「村の城」という位置づけが可能であろう。また、中世における領主権力と村落との関係についても、単なる支配一被支配の関係には留まらず、領主が領主として成立し得る背景としての村落の影響力を評価するような研究が盛んになっている[23]。権力の本質を一定エリアにおける社会制度としての均衡に求めるならば、支配と被支配との関係も、当然このような方面に求めるべきといえる。

その意味で、上記の古市城や、ここで扱う天花寺城についても、領主権力と周辺集落（村落）との有機的な関わりのなかで評価するべき性格のものと考えられる。

方形区画をなす土塁と溝について　調査前に確認されていた土塁と溝については、調査前には中世まで遡り得るのではないかと考えた。しかし、調査に伴って出土する遺物は近世のものであり、遺構についても中世のものではない可能性も出てきた。

第Ⅲ章でも触れたように、土塁と溝との所属時期を考える要素としては、①15世紀後半頃の溝ＳＤ41が土塁下に潜ること、②集石群１下部の区画溝と考えられるＳＤ61が、やはり土塁下から検出できること、③ＳＤ61とＳＤ41とが直交・並行関係にあること、④ＳＤ41と調査区外南の堀切と並行関係にあること、⑤ＳＤ２の埋土中から出土する遺物が18世紀代のものであること、などがある。また、調査区外のことで、今後発掘調査対象となる場所であるが、⑦堀切とこの土塁の延長部東端とがあまりにも接近しており、両者が近接した時期の造営とは考えにくいことや、⑧前述の天華寺北方に見られる弧状を呈する土塁・溝と、ＳＤ23・41との間に有機的な関連が想定でき、共に方形区画土塁・溝によって破壊されていること、も挙げることができる。

⑤については、地境としても活用されたであろうこの溝が、後世に「溝さらえ」された結果、このような遺物が入った可能性も考えれられる。したがって、時期的な問題としては、①あるいは②、③の事実から、15世紀後半以降、16世紀代を中心とした屋敷地の区画である可能性も否定できない。

この土塁と溝は、第Ⅱ章でも触れたように、現在の天華寺を取り囲むようにある。したがって、現時点では、16世紀代を中心とした居館遺構と、近世に造営された天華寺に関連した遺構、のいずれかであると考えておくが、今のところは、近世のものの可能性が高いと考えておく。

それにしても、現在の天華寺境内は、中世においても極めて重要な場所と想定されることは、既に何度か触れたとおりである。この部分の調査なくしていくつかの想定を行うのは、隔靴掻痒の感が強い。今後の調査で、いくらか明らかになることを期待する他ない。

以上、今回の調査で得られた事例を基に、若干のまとめと検討を行ってきた。今後継続する調査を経て、問題点の検討を深めていきたい。

註

(1)　伊勢野久好ほか『天花寺山』（一志町・嬉野町遺跡調査会　1991）

(2)　都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』（岩波書店　1989）p128～134

(3)　西田尚史ほか『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』（松阪市教育委員会　1990）

(3)　前川嘉宏・野田修久『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第３分冊３　天保古墳群（三重県埋蔵文化財センター　1991）

(4)　吉村利男ほか『鳥居本遺跡発掘調査報告』（一志町教育委員会　1975）

(5)　全く同一時期というわけではないが、四日市市・永井遺跡の場合、受口甕の割合は6/11、松阪市・草山遺跡で7/26である（全て図示遺物による）。{小玉道明・伊藤洋ほか『永井遺跡発掘調査報告』(四日市市教育委員会　1973)、榎本義譲ほか『草山遺跡発掘調査月報』№1～10　松阪市教育委員会　1982～1985)

(6)　中西常雄「近江における甕形土器の動向一庄内期を中心として一」（『考古学研究』第32巻第１号　1985）、赤塚次郎「「Ｓ字甕」覚書'85」（『年報昭和60年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1986）など

(7)　西島定生「古墳と大和政権」（『岡山史学』10　1961）、白石太一郎「畿内の大型群集墳に関する一試考」（『古代学研究』第42・43合併号　1966）など

(8)　三重県埋蔵文化財センター編『三重県埋蔵文化財センター年報』４（1993）　詳細については、新田剛氏（鈴鹿市教育委員会）の御教示を得た。

(9)　その可能性のあるものは、松阪市・伊勢寺遺跡にあるが、不明瞭である。（森川常厚「伊勢寺遺跡（北浦地区）」（『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第２分冊　三重県教育委員会　1989）そもそも、三重県の発掘調査報告書では、カマドについて詳しく触れられたものが少ない。今後意識的な改善と、充分な検討を要する事項である。

(10)　埋蔵文化財研究会編『古墳時代の竈を考える』（第32回埋蔵文化財研究集会資料　1992）から

(11)　常松幹雄ほか『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財報告』Ⅱ　西新町遺跡（福岡市教育委員会　1982）

(12)　大崎哲人『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』ＸＶ－２（滋賀県教育委員会ほか　1988）所収、ＳＨ65・ＳＨ70・ＳＨ77など。

(13)　小玉道明ほか「伊奈冨遺跡」（『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』（鈴鹿市教育委員会　1967）

(14)　松井健「竈の地域性とその背景」（『考古学研究』第40巻第１号　1993）

(15)　河瀬信幸ほか『片野遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1985）および大西素行ほか『三重県斎宮跡調査事務所年報1981』（三重県斎宮跡調査事務所ほか　1982）

⑯ 佐藤興治ほか『平城宮発掘調査報告書』　（奈良国立文化財研究所　1975）、松本茂一・関谷良男ほか『鳥羽贄遺跡』（鳥羽市教育委員会　1975）、阿部義平「銙帯と官位制について」（『東北考古学の諸問題』1976）など

⑰ 亀田博「銙帯と石帯」（『関西大学考古学研究室開設三十周年記念考古学論叢』1983）

⑱ 田中広明「官衙及び関連遺跡と腰帯」（『地方官衙とその周辺』日本考古学協会茨城大会実行委員会　1995）

⑲ 註(1)文献に同じ。

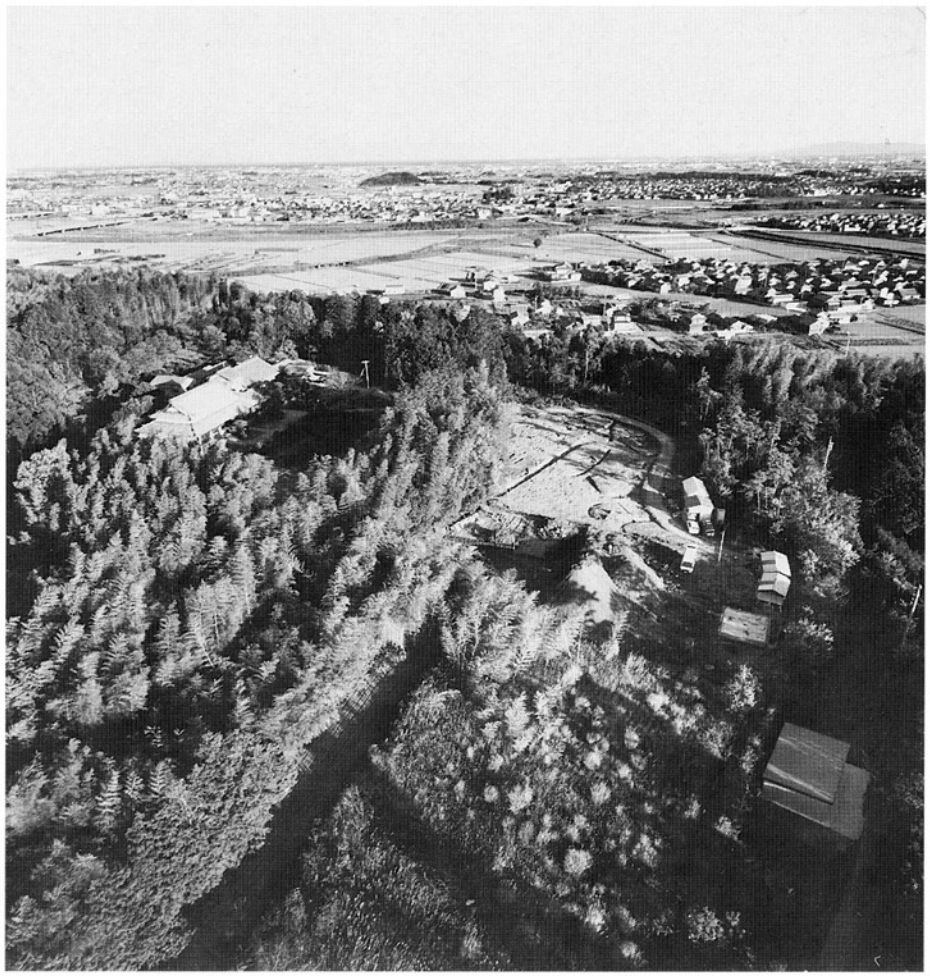
⑳ 森下恵介ほか「古市城跡発掘調査報告」（『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和55年度　奈良市教育委員会　1981）

㉑ 大川勝宏ほか「山神城跡」（『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第２分冊　三重県埋蔵文化財センター　1992）

㉒ 小林秀「第三章　中世」（『三重県玉城町史』上巻　玉城町　1995）p 594～597

㉓ 池上裕子「戦国の村落」（『岩波講座日本通史』第10巻　岩波書店　1994）、藤木久志『戦国史をみる目』（校倉書房　1995）など

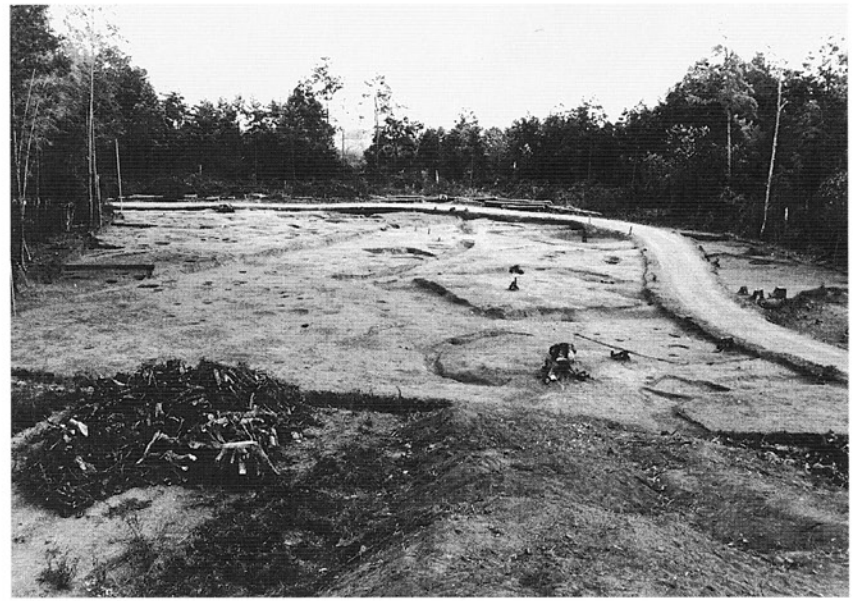
Plate



調査区を西方上空から望む（1995年11月撮影）

調査前後の風景

調査前風景・土塁と溝（東から）



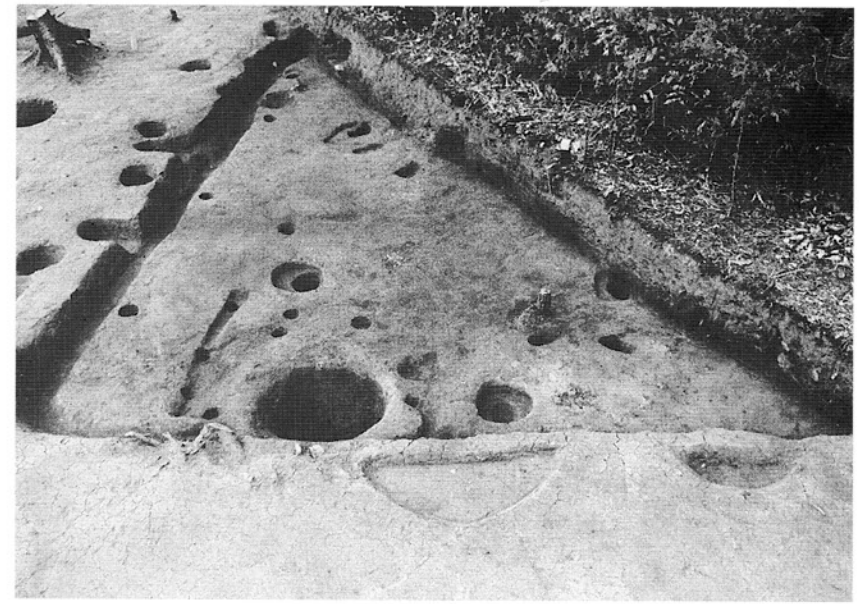
調査後全景（西から）

調査前風景（南東から）

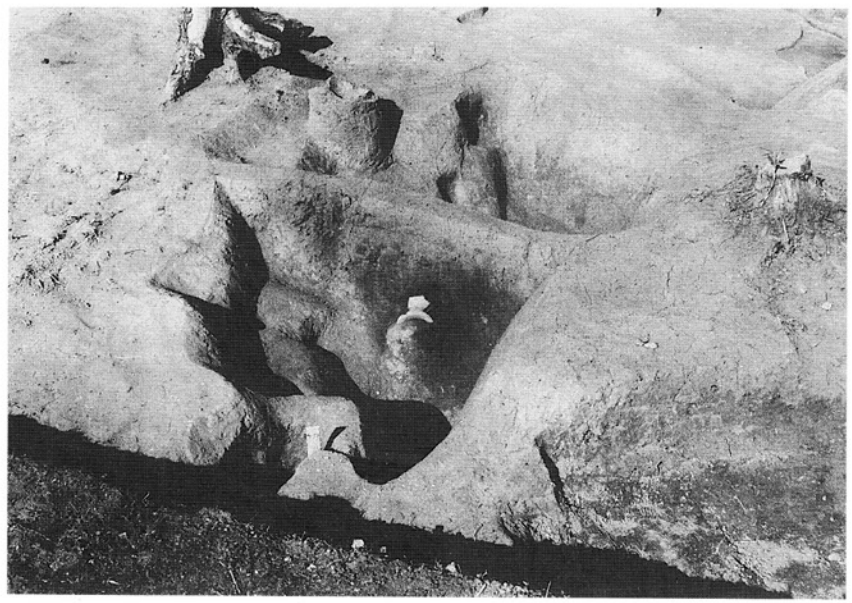
調査後風景（西から）

調査風景　遺構（弥生時代１）

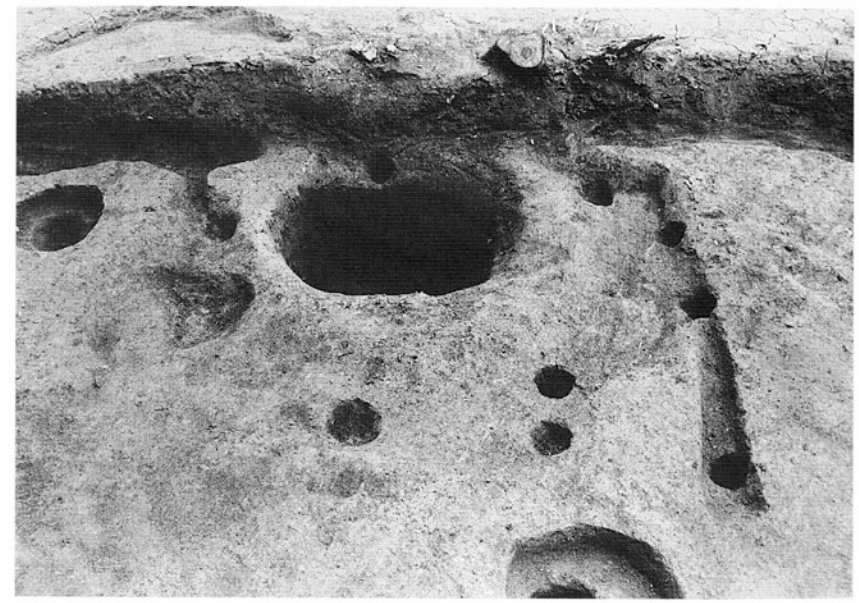
調査風景（東から）



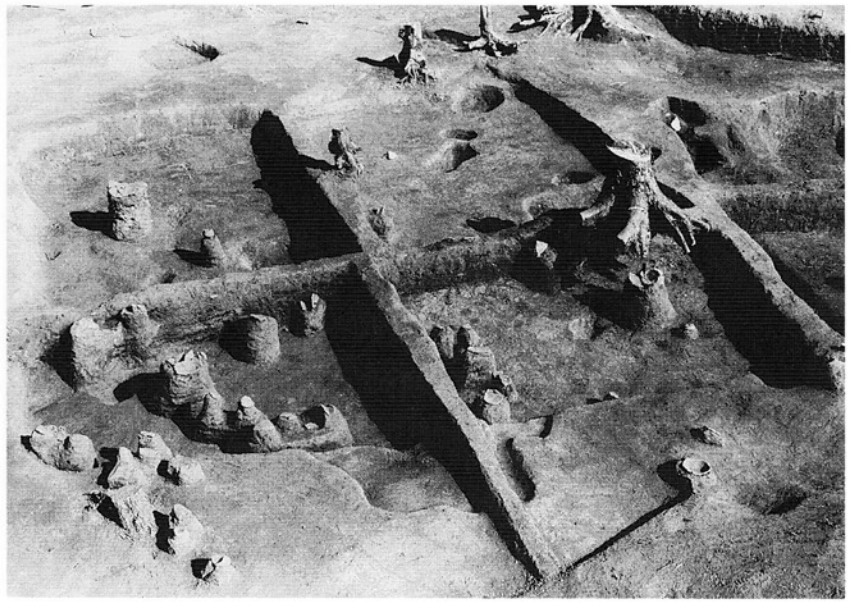
竪穴住居ＳＨ11（東から）



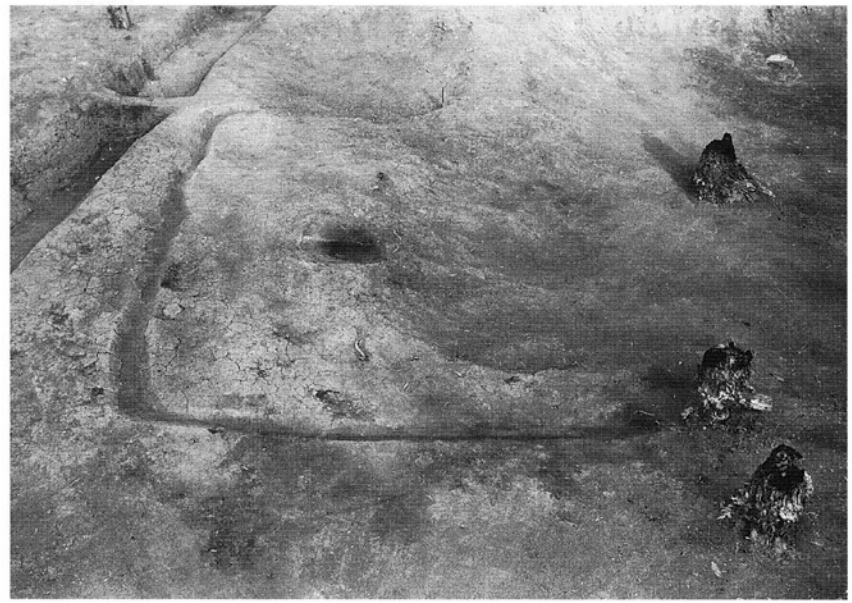
倒木痕ＳＺ27（南から）



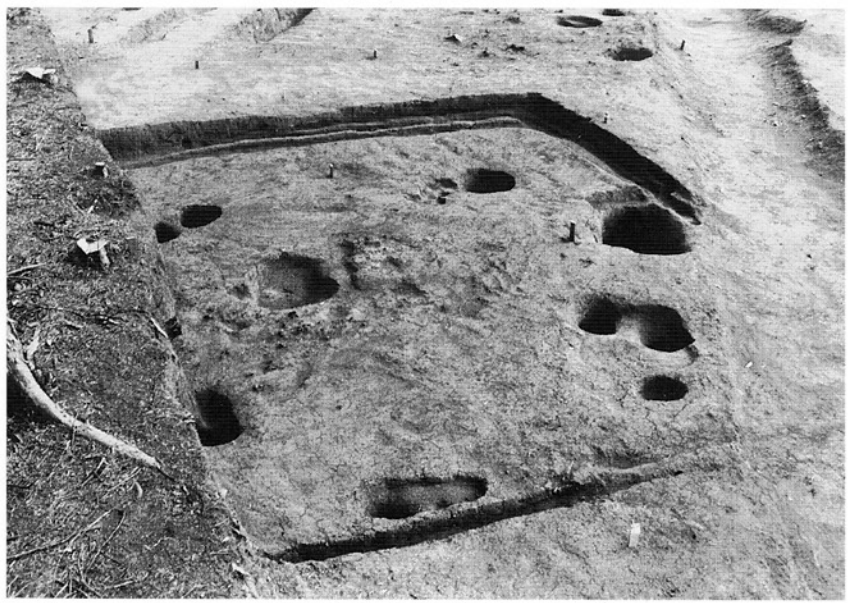
竪穴住居ＳＨ11貯蔵穴（西から）



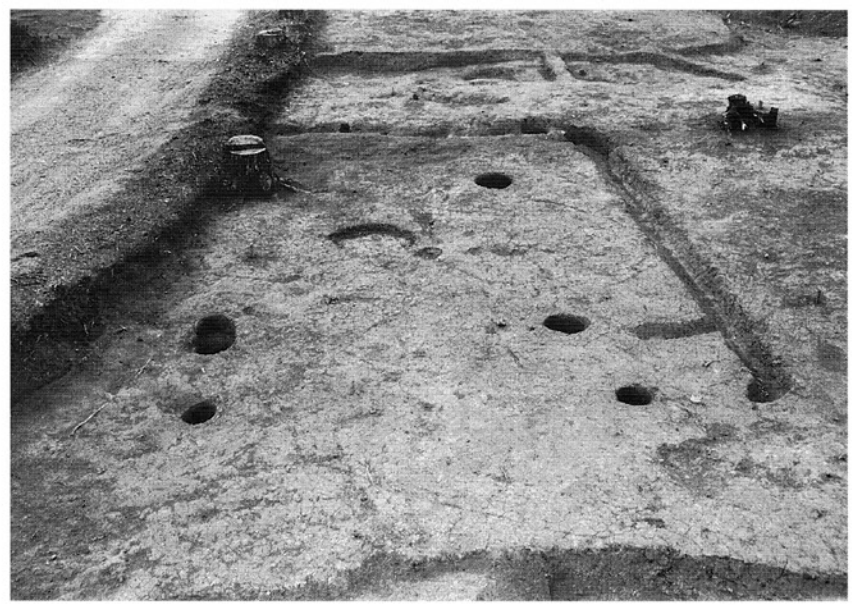
竪穴住居ＳＨ14・36（南から）



竪穴住居ＳＨ40（西から）



竪穴住居ＳＨ22（西から）



竪穴住居ＳＨ45（東から）

調査風景　遺構（弥生時代３）

竪穴住居ＳＨ43（北から）

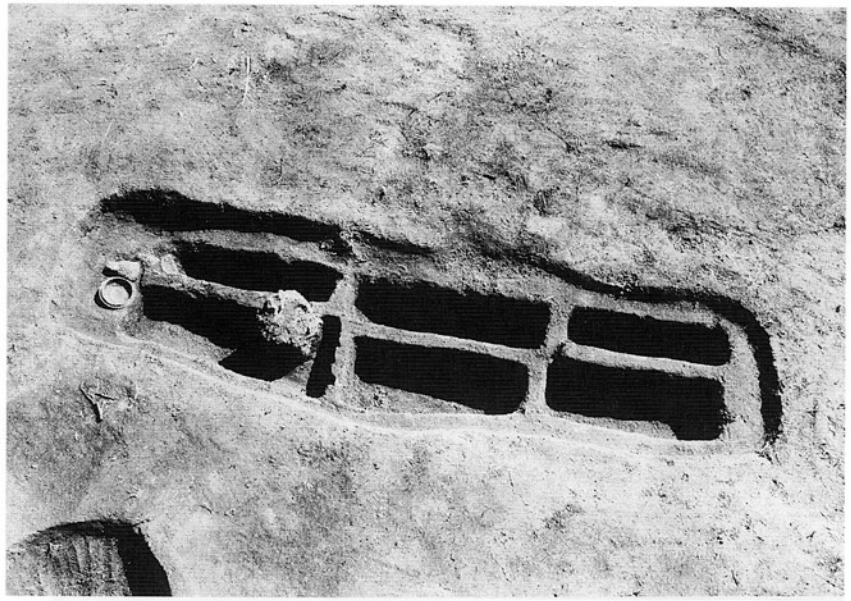
竪穴住居ＳＨ59（西から）

竪穴住居ＳＨ43貯蔵穴（北から）

調査区東部竪穴住居集中部分（西から）

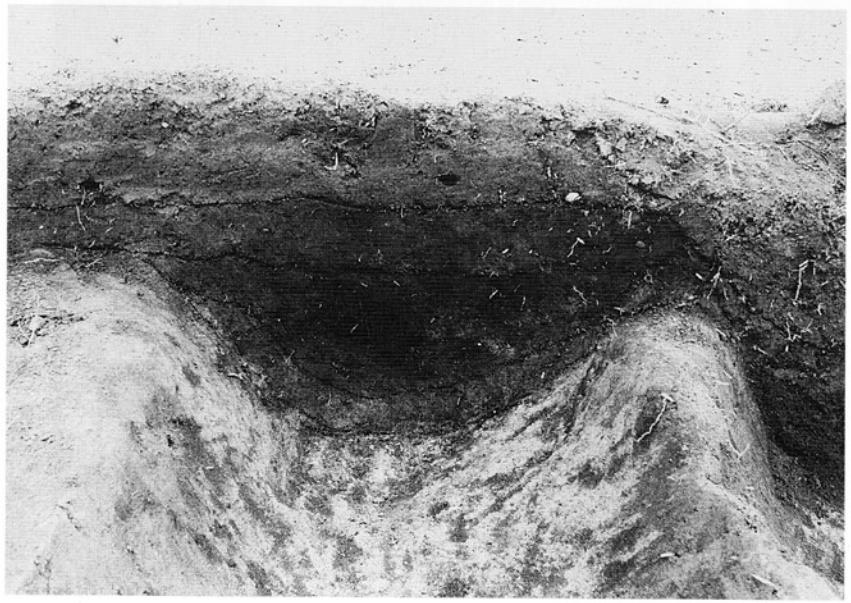
竪穴住居ＳＨ63（北から）

竪穴住居ＳＨ63　倒立の土器（南から）



１号墳埋葬施設ＳＸ２９（北から）

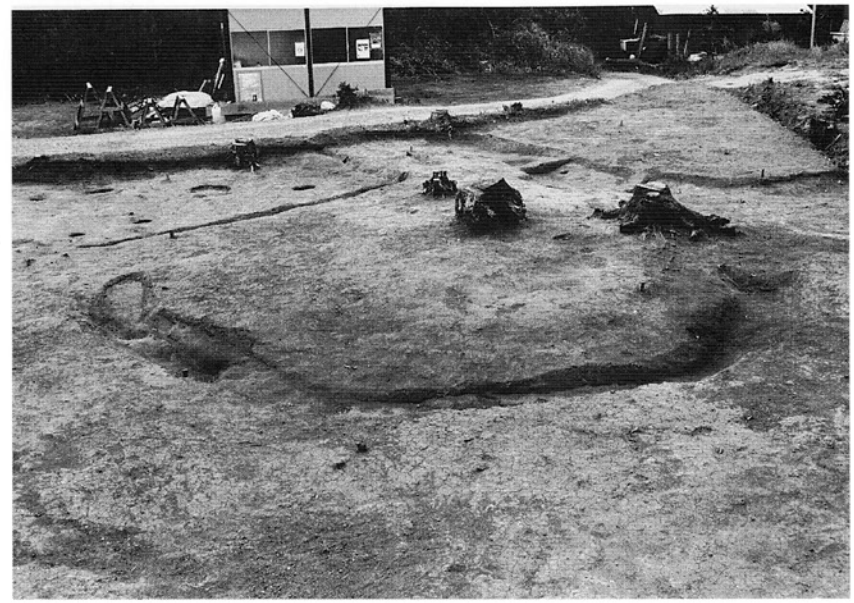
２号墳（西から）



２号墳東周溝土層（北から）

２号墳北部（西から）

3号墳（南から）

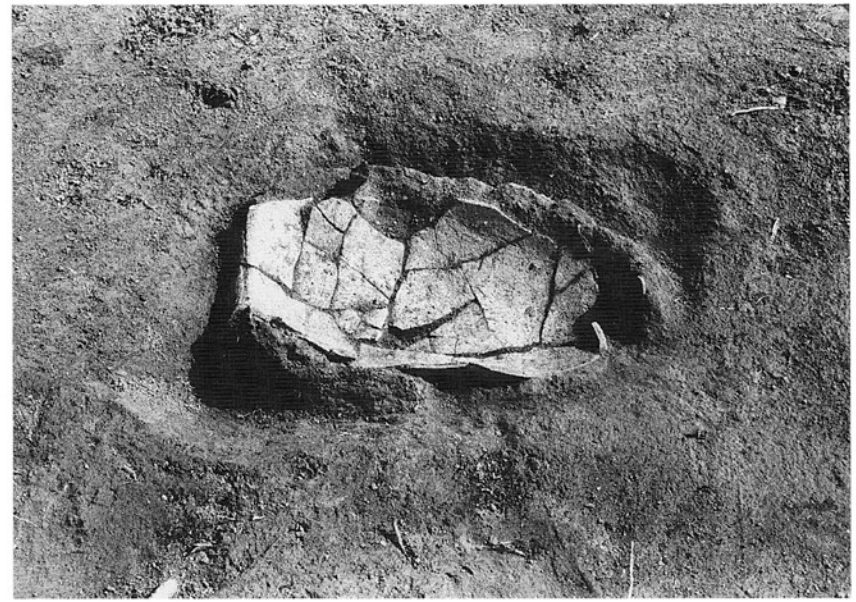


5号墳（北から）

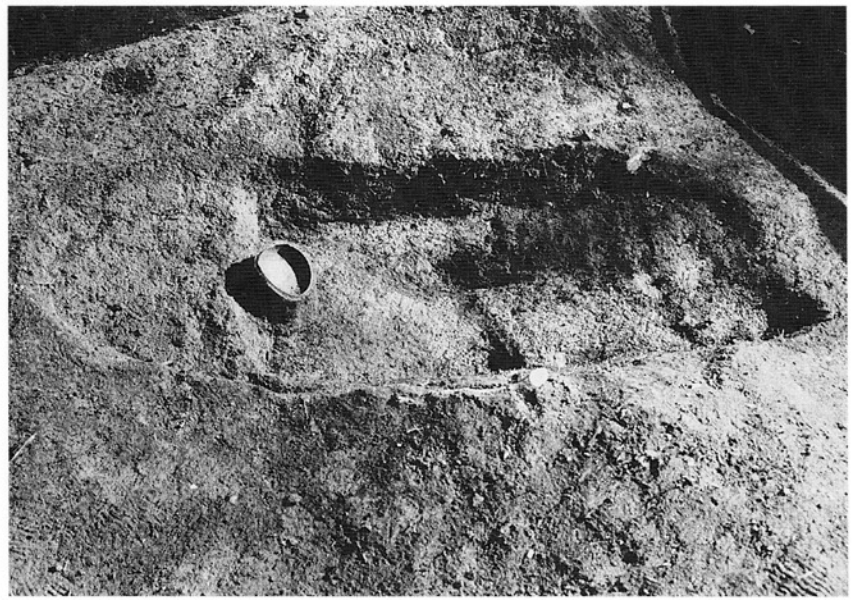
3号墳南部（東から）

6号墳（北から）

６号墳埋葬施設ＳＸ51（南から）

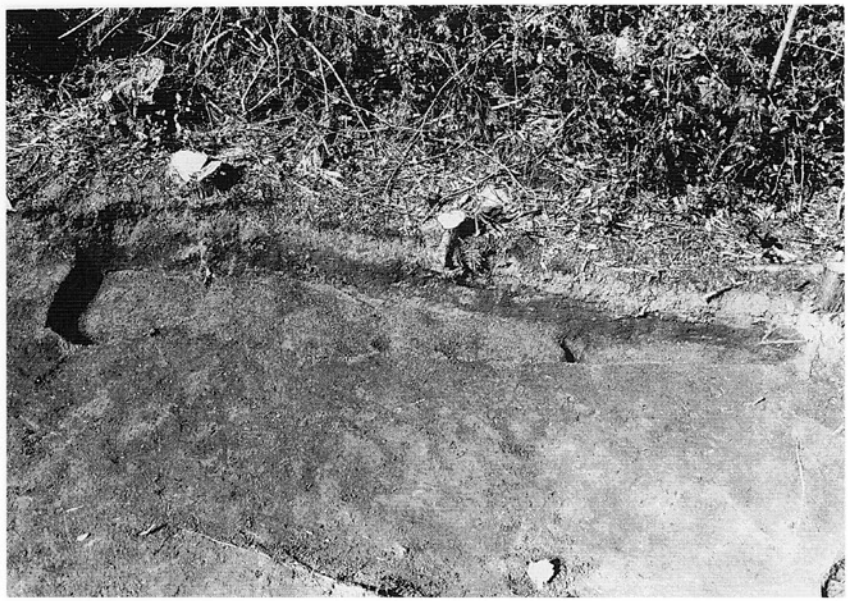


土器棺墓ＳＸ28（西から）



土壙墓ＳＸ64（西から）

土坑ＳＫ50（北から）



竪穴住居ＳＨ１０（南から）

竪穴住居ＳＨ３０　カマド（南から）

竪穴住居ＳＨ３０・３３（西から）

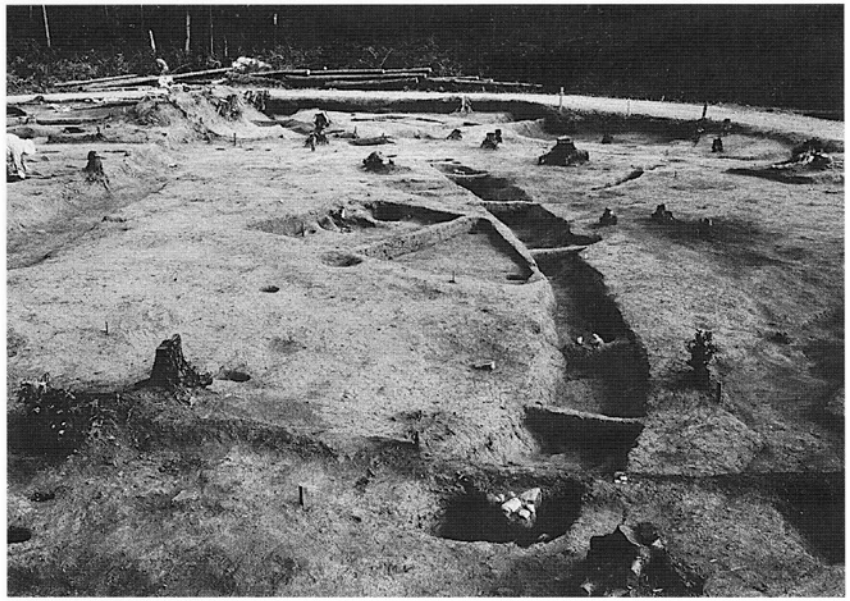
竪穴住居ＳＨ３２（西から）

竪穴住居ＳＨ34（東から）

竪穴住居ＳＨ35（西から）

竪穴住居ＳＨ37（南から）

竪穴住居ＳＨ35　カマド（北西から）

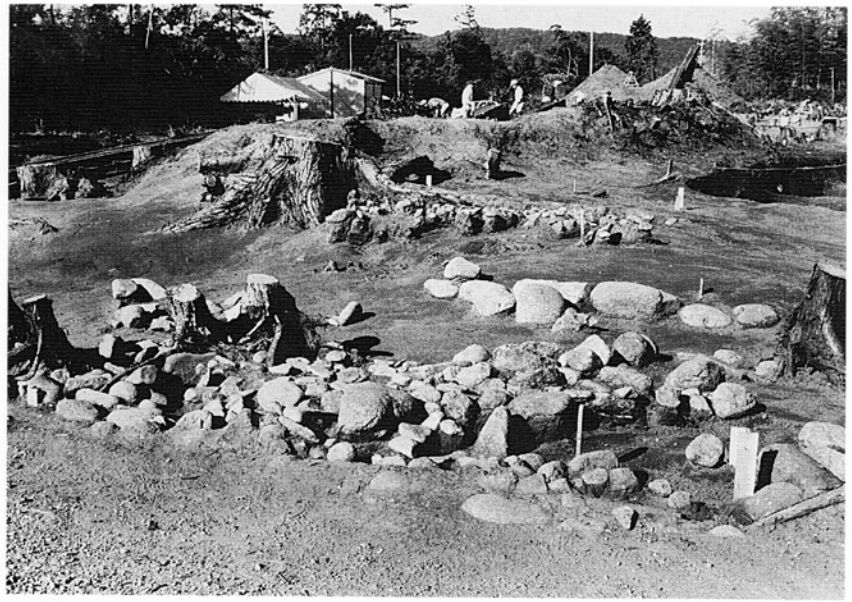


溝ＳＤ23・41（西から）

溝ＳＤ41（西から）

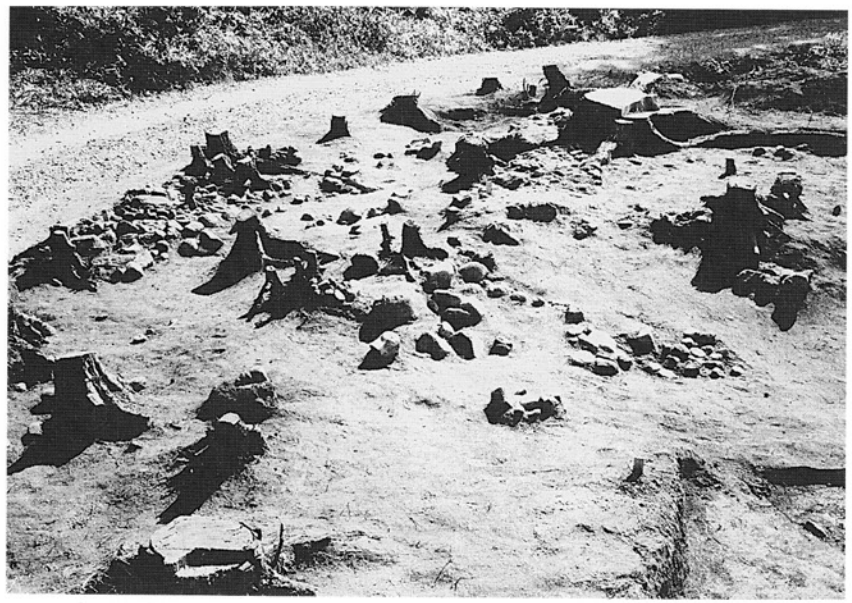
溝ＳＤ23・41間の状況（東から）

溝ＳＤ２と41との関係土層（西から）

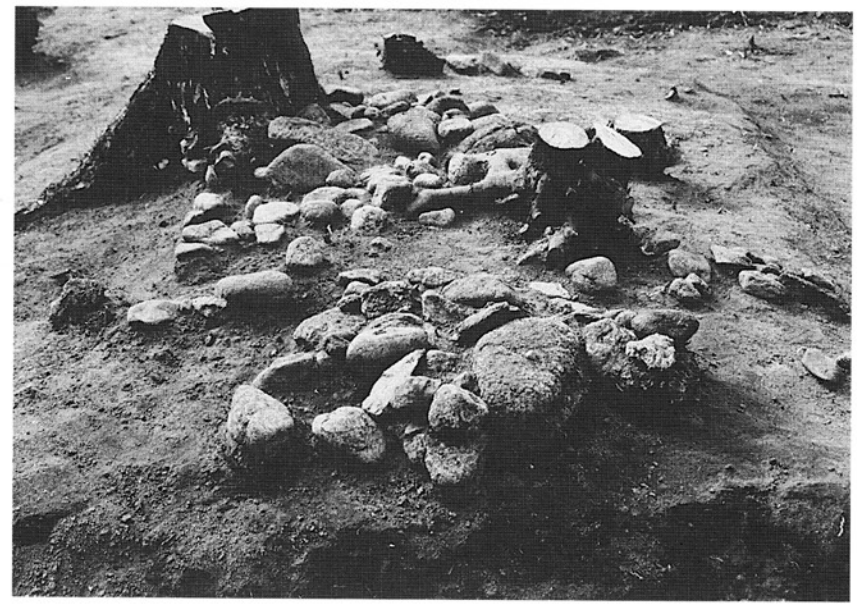


集石群１（北東から）

集石群１と土塁との関係土層溝（西から）



集石群１（北から）



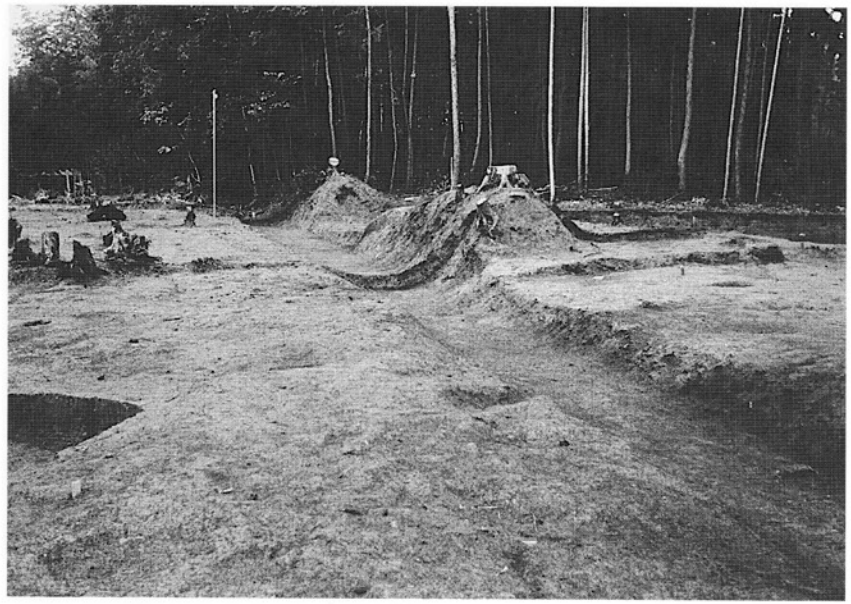
集石群２（北から）

集石群３（東から）

火葬墓ＳＸ47（東から）

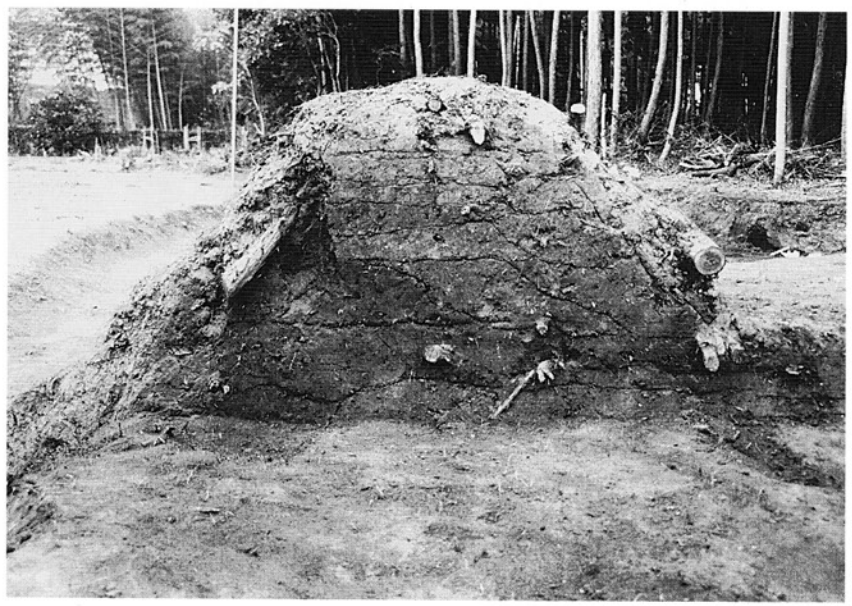
集石群３　小礫除去後（南から）

火葬墓ＳＸ26（西から）

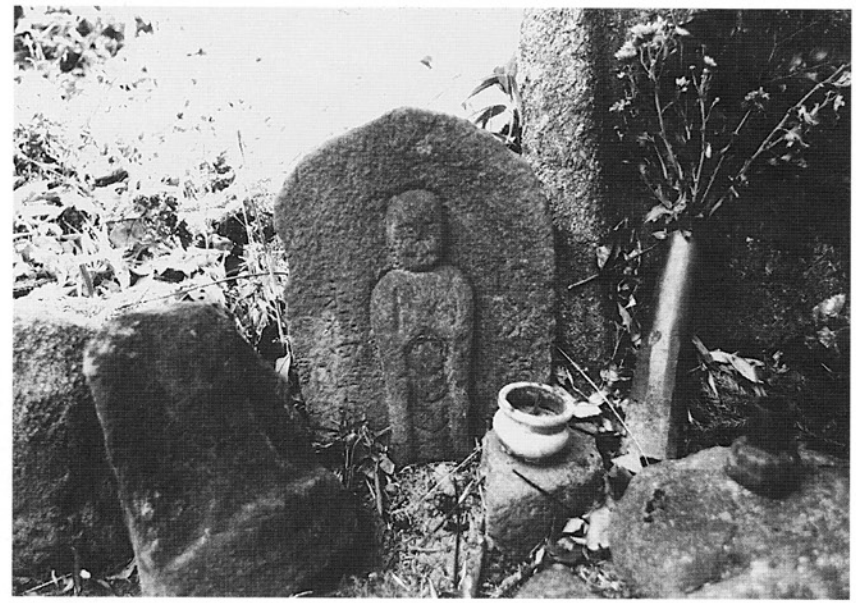


土塁ＳＺ１と溝ＳＤ２（東から）

天花寺集団墓地の現状



土塁ＳＺ１－ｂ　土層（東から）



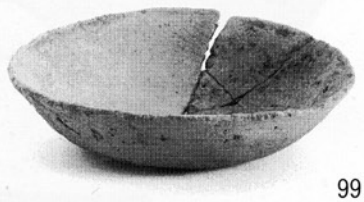
天花寺集団墓地内永禄１２年銘の石地蔵

遺物1

9

88

86

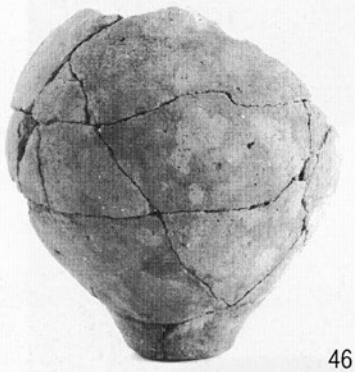

99

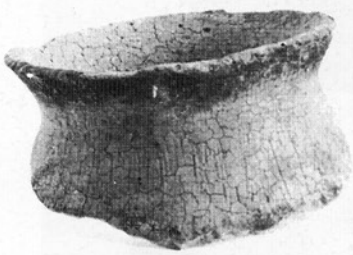
93

10

118

129


46


70

72

1

3

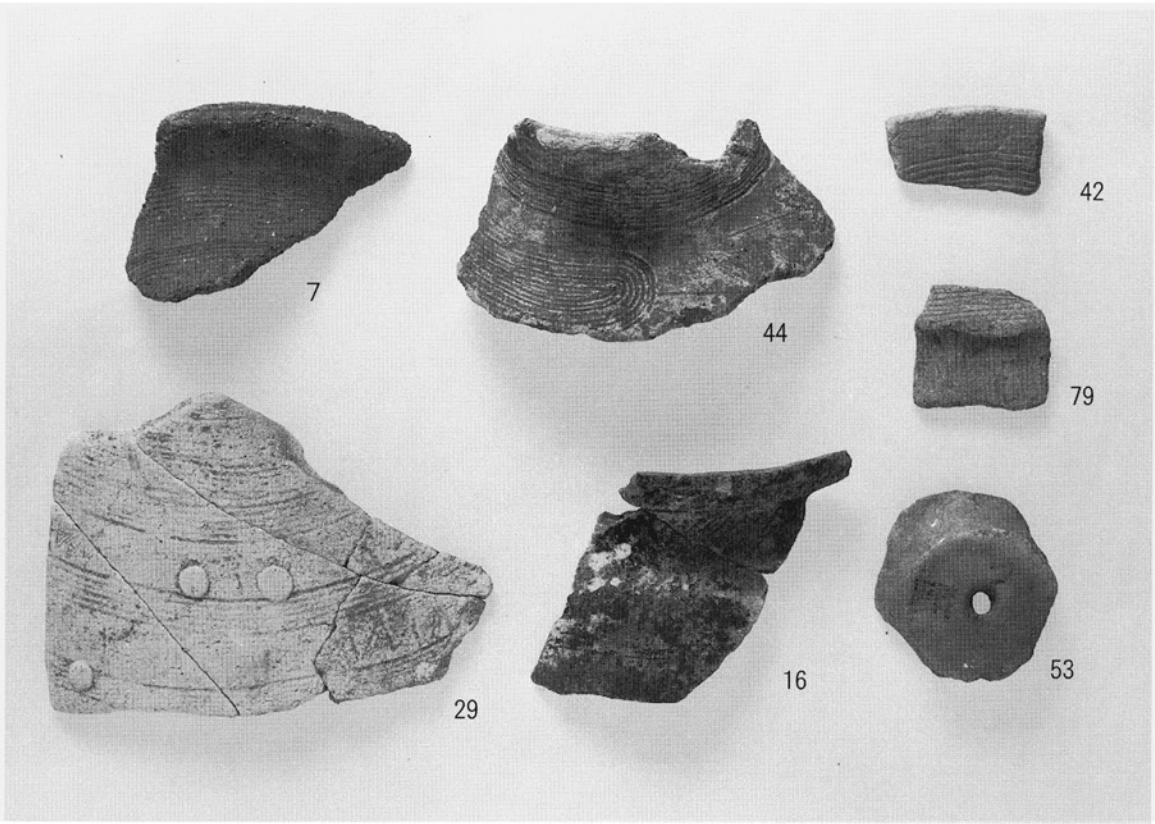
5

4

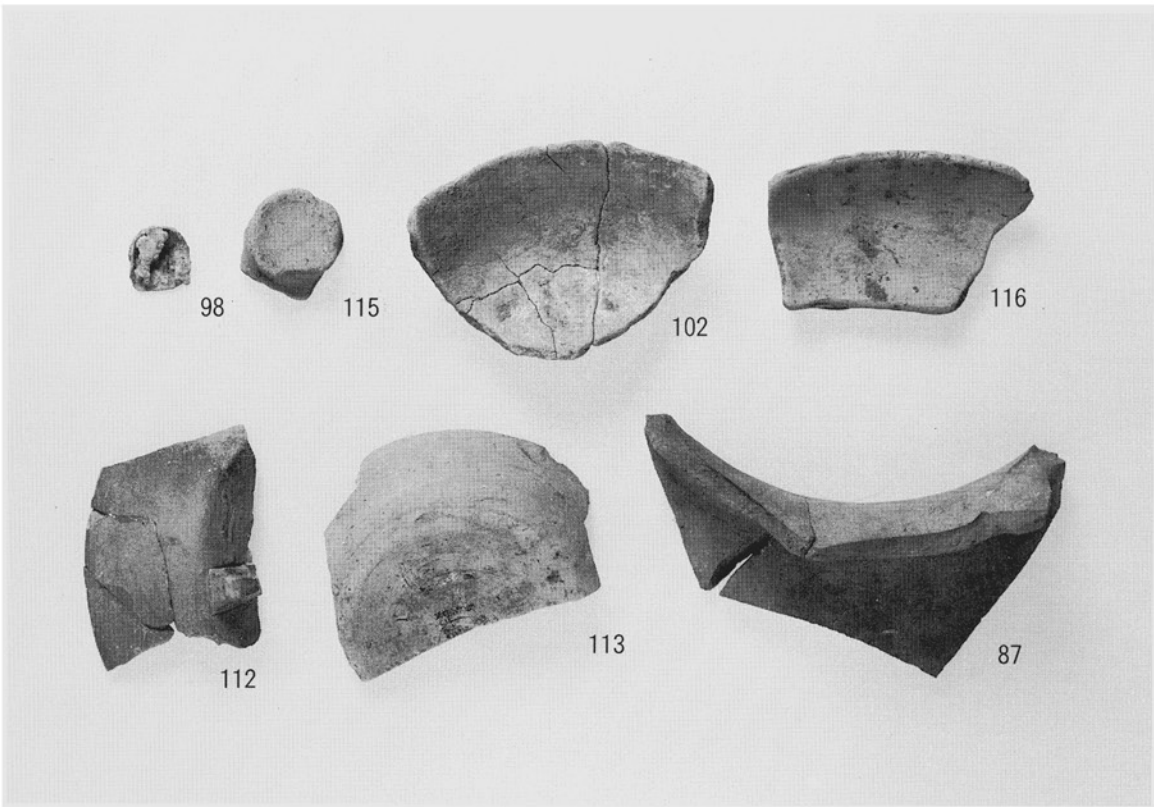
2

石器類

遺物2



弥生土器



古墳～奈良時代の遺物

報告書抄録

ふりかな	てんげいじきゅうりょうないいせきぐんはっくつちょうさほうこく
書名	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１３８
編著者名	伊藤裕偉
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03　三重県多気郡明和町竹川５０３　Tel 05965(2)1732
発行年月日	西暦１９９６年３月３１日

ふりかな 所収遺跡名	ふりかな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
天花寺城跡 小谷赤坂遺跡	三重県一志郡 嬉野町天花寺 字赤坂	24405	90・94	34° 38′ 45″	136° 27′ 30″	19950905 ～ 19951218	1,590	県道天花寺一志嬉野インター線緊急地方道路整備（Ａ）改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天花寺城跡	城跡	15世紀～	溝・土塁	土師器	土塁は近世のものか？
	墓地	14～18世紀	集石墓、火葬墓	土師器	
小谷赤坂遺跡	散布地	縄文前期		玦状耳飾	
	集落跡	弥生後期	竪穴住居跡11棟	弥生土器、石器	いわゆる「近江系」甕多い
	古墳	古墳時代	古墳６基、土壙墓２墓、土器棺墓１基	土師器・須恵器・刀子	「前方後方形」のものあり
	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡７棟	土師器	竪穴住居跡埋土から銅製帯金具（鉈尾）が１点出土

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　138

天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告

1996(平成八年)年3月31日

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社